

## 第五回 日本SF新人賞→次通過

『空の光に想いを馳せて』

原稿用紙換算455枚

永井佑紀（エミ 闇米） 著

### プロローグ

球体が、浮上する。

上空五百メートル。恒星が惑星を従えるように、球体は自身の周囲に一回り小さな球体を複数侍らせている。

エプロフェンは球体の各種センサーで都市を見下ろしていた。

青白い高層ビルが建ち並び、その隙間には整備された道路が縦横に走っている。さながら蜘蛛の巣の巣のようだった。巣の系の上には、複数の青い立方体が高速で流れている。

水素燃料を利用して電力を発生させて推進している。今日はいつもと比べると緩やかな流れだった。人間が乗っている車両が無いからだ。流れを形作っているのは、日々の業務を自動でこなす無人車両。見上げれば、高みで双胴の無人貨物機が青緑の空に白い軌跡を描いている。

球体が見下ろしているのは繁栄を極めた都市だ。

だが、衰退期がすでに始まっている都市でもある。

人間の大半がシエルターに隠れていることをエプロフェンは知っている。

「我、この大地に住む者の管理者」

エプロフェンは球体の真下にいるものすべてに聞こえる大きな声を放出させ、さらにネットワークのすべての回線に自分の音声情報を割り込ませた。これで聴覚を持つ人間すべてがエプロフェンの言葉を聞かざるを得なくなる。

「我、循環をもたらす者なり」

エプロフェンの声が惑星全土に染み渡る。惑星全土で聞こえるのは、エプロフェンの声と、無人車両が空気を切る音だけ。

『今回の文明は諦めが早かった』とエプロフェンは思う。球体に対して今回の文明は一度しか攻撃してこなかった。

攻撃が完全に無効化されてしまうと理解するやいなや攻撃をやめてしまった。そして彼らは日々の生活に戻ってしまっただ。

「一ヶ月の猶予は過ぎた。我、大いなる目的のために眼下に広がる文明を破壊する」

『なんとという怠惰な文明。運命に逆らおうともしない。この地点で断ち切る決断をしたのは正解だった』

エプロフェンはそう考えた。

『この文明では『探求者』には勝てない。まだ循環は続く。循環は続けなければならない』

もう何百回も繰り返した判断。いままでと同じ判断。

球体はゆっくりと空中で小さな円を描いた。包括的最小作用原理を満たす大気中の重力ポテンシャルの最適点を探していた。コヒーレントな重力波を球体内部で精製する。

球体の対称性を破り、突起物を出現させる。照準を都市へと合わせる。都市は変わらずに動いていた。

エプロフェンは無感動に一連の操作をしていた。最初に文明を破壊したときは心穏やかにはいらなかったが、四九九回目の破壊ではもう何のためらいも無かった。

それはただの作業だった。

眼下の文明がどんな形、性質の物であろうと、エプロフェンのやることは同じ。『探求者』を模したこの球体で目の前に広がる全盛期の文明を破壊するだけ。

「我、管理者の名の下に、この文明を破壊」

上で飛んでいた無人貨物機。その双胴の機体が二つに分離した。それぞれ、両側面から巨大な翼を繰り出す。急激に減速して反転。ジェットエンジンを唸らせ球体に向かって体当たりをかける。

貨物機はありつただけの運動エネルギーと核エネルギーを衝突時に解放した。その刹那にエプロフェンが見ていた景色が消失した。

エプロフェンと球体とのデータリンクが切れる。だが、切断は瞬間的なものだった。コンマ一秒後にはすでに球体の制御を回復していた。コンマ二秒後には各種センサーが情報をエプロフェンに送り始めていた。

眼下に広がっているのは茶色だった。大きなクレーターが一つできあがっている。半径四キロの巨大クレーター。クレーターの縁はきれいな円弧を描いている。円の外側には都市が広がっていた。道路が消失しているのを知らない無人車両が、次々とクレーターへと落下していく。車両は

永劫に近い時間をかけてでもクレーターを埋めようとして  
いる砂のようだ。

地平線を見る。

黒い物体が無数球体に向かってきていた。全方位からだ。  
物体は非常に細長く、先がとがっている。それらが球体を  
攻撃しようとしていることは容易に想像がついた。エプロ  
フェンは黒い物体の一つに注意を向ける。その細長い胴体  
の側面には白い文字で『希望』と書かれてあった。

『見直した。今回の文明もなかなか骨のあるところがある  
な』

エプロフェンは球体の水平方向にぐるりと百二十五基の  
目を出現させた。重力波の位相を揃え、すべての砲門に対  
して均等に波を分配する。

『しかし、今回の文明も循環の運命から逃れることはでき  
ない』

三秒後、空には球体以外に物体は存在していなかった。

五秒後、地上には都市が存在していなかった。

八秒後、惑星には文明が存在していなかった。

—

情報船団『ブレーヴ』の船団長は、船の群れから切り離  
されていく一隻の船を旗艦のメインモニターで眺めていた。  
進行方向の相対速度を零にした状態、つまり船団と並進し  
た状態で横に距離をとっていく情報収集艦『アイレム』の  
様子を彼はじつと見つめている。

船団とアイレムは十万キロ以上離れている。もちろん、  
肉眼では見えない。

情報船団『ブレーヴ』が、地球型惑星と木星型ガス惑星  
の二つを持つ恒星系を発見したのは、今から十年前のこと  
だった。

船団長は重要な決定の時以外は冷凍睡眠で眠り続ける事  
になっっている為、十年は彼の主観時間にしてほんの一年前  
のことだ。その時の情報船団は、惑星の存在しない恒星系  
で分離した情報収集艦からのデータの受け取り待ちをして  
いた。情報船団は居住型惑星の存在する恒星系では決して  
立ち止まらない。減速すらない。

アイレムが一瞬光る。ラムスクープ推進のベクトルが変  
化したのだ。ただひたすら加速する方向のベクトルから、

目的地に静止する為の減速方向へのベクトルへと。前方に広げた巨大な電磁的ネットで取り込んだ水素原子を、艦内の直線と曲線で構成させたラインに沿って走らせて運動方向を変える。反対方向に向きを変えられた水素原子は核融合炉を通り熱せられ、さらに加速され、取り込んだルートとは別のルートで前方に噴射される。後方への噴射が前方への噴射へと切り替わる瞬間電磁的ネットの形状が変化する為に、艦の周囲が光り輝くのだった。

船団長が艦橋でこの光を見るのはもう六回になる。その間に客観時間で四百年以上が過ぎた。最も重要な人物が最も多く冷凍睡眠に入る為、すでに彼の周りを見知った人物はいない。

情報船団の一部である情報収集艦だけを減速させその恒星系に駐留させる。情報船団本体は近隣の居住型惑星の存在しない恒星系に駐留し、情報収集艦からの情報を得る。

恒星間の深淵は広く、情報伝達速度は光の速さを超えられず、どんなに性能のいい船でも光速の壁を破ることはできないため、一つの恒星系から情報を得るのに少なくとも三十年はかかる。

とてつもなく時間のかかる方法だが、情報船団自体の存在を確実に維持するにはよい方法だった。最善の方法かどうかは誰にもわからない。が、良い方法であることは、その方法で『ブレーヴ』が客観時間で二万五千年近い年月を無事に旅してきていることで証明されている。

情報船団は恒星系からの情報を受け取っている間、次の目的地の選定を行う。今いる恒星系から近く、居住可能な惑星を持ち、太陽系からの植民記録が残っている星系が最適だった。

二つの惑星を持つこの発見された恒星系は、『ブレーヴ』の次の目的地として最適で、距離は二十光年。太陽系から三二番目の植民船が目指していた恒星系で、居住惑星があることが確かめられている。植民が無事に成功していれば、情報を収集するには非常に好都合な恒星系になっているはずだった。情報船団の目的は、人類の情報の収集と保存にあるのだから。

船団長は、恒星系の名を移民船の名前をとってエプロフェンズと名付けた。

相対速度が変化していく。アイレムが徐々に後ろへと下がっていく。目には見えないアイレムの電磁的ネットは、複数箇所で散発的な光を放つ。

『ブレーヴ』の人間達はアイレムを一度と見ることはない。それは船団長も同じだ。どのくらい長く生きたとしても、アイレムは二度と船団長と同じ時間を共有することはない。船団と切り離された情報収集艦は、訪れた恒星系で資源を調達し、新たな情報船団として他の情報船団がいない場所へと旅立つのだから。

そして、船団長は眠り、客観時間で四十年の月日が流れた。

レヘナ・カタギリ・F125はエプロフェンズでの情報収集の為に生まれた人間だった。

レヘナの名前の最後にある番号は、彼女が役割をあらかじめ持つて生まれてきたということを示している。レヘナの役割はエプロフェンズでの情報収集における中級要員というものだった。

レヘナはブレーヴがエプロフェンズ星系に向けて加速を始めたときに生まれ、十七年間は冷凍睡眠に入らずに、彼女に要求される専門技能の修得に励んだ。レヘナは情報収集艦の飛行技術者ではないため、その後二十八年間、情報収集艦が情報船団から切り離されてエプロフェンズのガスター惑星の周回軌道にはいるまでは、冷凍睡眠から目を覚ます権利を持っていなかった。冷凍睡眠中も緩やかに歳をとる。覚醒してから数ヶ月経った現在のレヘナの生物学的年齢は二十才だった。

レヘナは、艦を緩やかなカーブを描いて囲んでいるリング状の通路にいた。壁の側面にある手すりをつかみ、作用反作用で前へと進んでいる。レヘナの目からは、通路は直線にしか見えなかった。情報収集艦『アイレム』は、人間のスケールで考えるところととても大きくかった。レヘナのいる側面の反対側には、高速移動用の可動式手すりをつかんだ人間がレヘナの進行方向とは逆に流れている。駐留中の艦内には加速による疑似重力が働いていない為、たくさんの人間が思い思いの姿勢で手すりをつかんで移動していた。

通路といっても巨大な空間で、リング状通路の中心軸を上下とすると左右の壁に複数の速度の異なる移動用の手すりが取り付けられている。通路の上に行くほどより高速な手すりが走っている。レヘナが上を見れば、ハイスピードラインにつかまって移動する船の上級船員の姿を見ることが

ができる。

レヘナが今から行こうとしているところは近いので、彼女は一番下にある移動しないただの手すりをつかんで進んでいる。

「よつす」

レヘナがいつもと変わらない緩やかな速度で通路を進んでいると、上の方から声が聞こえた。ゆっくりと立ち止まって上を見ると、飛行技術者用の青くて機能的な制服に身を包んだ男が、器用に手すりを持ち替えながら高速移動ラインから低速移動ラインへ降りてくるのが見えた。男はレヘナがつかんでいる移動しない手すりまで降り、レヘナの前に漂った。レヘナは顔がほころんだ。見覚えのある顔だったからだ。

「エズベルじゃない。……ひさしぶり」

二人は再び手すりをつかんで前に移動し始めた。エズベルはレヘナの方を向きながら、片手で手すりを押しやりながら後ろ向きで進んでいる。

「レヘナは変わらないね。前に会ったときと同じだ」

「君はずいぶん変わったね。もう私の歳をとっくに追い抜いているでしょ？」

「ああ」

エズベルはレヘナと同じ時期に、つまり、ブレーヴがエプロフェンズ星系へと出発した時期に生まれた。レヘナの方がエズベルより三つ年上だった。飛行技術者と情報収集者は最初の十数年間は同じ教育を受ける。情報収集艦における共通の思想基盤を得るためだ。情報収集艦において何が最も大事なのか、何をやってはいけないのか。情報収集艦とは何のために存在するのか。どんな専門技能もより基本的な知識の上に成り立っており、それを身につけるのは情報収集艦に乗る者としての義務だった。

二人は、幼少期からレヘナが先に冷凍睡眠に入るまで、ずっと同じ教育を受けてきた。エズベルは中級の飛行技術者であり、ブレーヴとアイレムの分離作業を行う頃までに一人前にならなければならなかったため、レヘナよりも六年多く船内を過ごしてから冷凍睡眠に入っていた。

今のエズベルはつやのある金髪を後ろで束ね、いつもにこやかにしていそうな青年だった。常にレヘナの後ろをついてきていた幼いエズベルの面影はあまり無い。笑ったとき頬に現れる小さなえくぼが、目の前にいる男が間違いない。幼かった頃のエズ

ペルは、耳のあたりで髪を切り揃えてあった。レヘナが肩から水平にチョップをすると彼の額に当たるくらい背が小さかった。今ならエズペルがレヘナに同じ事ができるだろう。

「どこまで行くの？」

エズペルが聞いた。

「C・三二の小型艇収納区画。今日は、居住型惑星に初めて調査の船を着陸させる日ですよ」

レヘナが微笑みながら言うと、エズペルは手を叩いた。

「おお。そういうことか。レヘナも行くのか。いいな。うらやましいよ」

エズペルは再び手すりにつかまり、壁から離れたところある身体を引き戻した。

「けど、飛行技術者は新しいテクノロジーをさわる事ができる。私たちはそのテクノロジーを理解できても動かすことはできないもの」

「そうさ。飛行技術者と情報収集者、お互いにできないことを補ってる」

「勉強中に、一体何度そのせりふを聞いたんだろうね、お互い」

二人で同時に笑う。エズペルの笑い声がレヘナには懐かしかった。声変わりしていても、屈託のない笑い声は変わらない。二人は同じ教育担当者から教育を受け、その教育担当者は口癖のように飛行技術者と情報収集者の立場の同等性を説いていた。お互いでうらやましがってはならない。その業種に最適化された能力を持たされて生まれてきたことに誇りを持つ。相手を信じる。さまざまことを教育担当者に繰り返し繰り返し教え込まれたが、中でも『お互いできないことを補っているのだ』という言葉は、何千回も聞かされたために二人の頭にこびりついていた。その言葉を聞いた瞬間に、エズペルとの思い出がレヘナの脳裏に条件反射的に思い浮かんでくる。

エズペルはわからないことがあるとすぐに泣いた。自力でわかることをあきらめると、すぐにレヘナのあとをついてきて、「教えて」とねだった。アイレムの通路を子ども特有のばたばたという音を立てて、エズペルはどこまでも追いかけてきた。服をつかみ「ねえ、教えてよ。僕一人じゃわからないんだよ」というエズペルに、レヘナはよく「自分でわかることが大事」と言いながら、エズペルの額に水平にチョップをした。チョップをするとエズペルはいつも

泣きやんで笑みを浮かべた。レヘナがチョップをするときは教えてくれるときだということをエズベルは知っていたからだ。二人で壁際に寄り、腰を下ろし、エズベルに解析力学の最小作用の原理などを説明しながら、レヘナは「私ばかり補ってるじゃない」とよく思っていた。

自分が冷凍睡眠に入る時のエズベルの泣き顔をレヘナは思い出した。冷凍睡眠に入る前の日、下準備として薬で身体の代謝速度を抑えられて、頭までぼんやりとして自室にいた時、アイレムの反対側で身体反射速度測定をやっているはずのエズベルが息を切らせながらやってきた。「どうしたの」と聞くレヘナに、エズベルは「冷凍睡眠の日、教えてくれないなんて非道いよ」と言ってレヘナの袖をつかんで泣いた。「もう十四歳じゃない。いちいち泣く年頃じゃないでしょ」と言いながら、レヘナはとてもゆっくりとしたチョップを繰り返した。身体のあらゆる箇所の反応速度が低下していたレヘナの、力の限りのチョップだった。エズベルは避けずに、ただ構えていた。五秒近く経ってエズベルの額にレヘナのチョップが当たったとき、エズベルは泣き笑っていたのをレヘナは覚えている。「今度は僕がレヘナを補うから。いつか、絶対に」と言いながらエズベルは走り去っていった。ぼんやりとした頭で経験した事だったが、そのときの遠くへと消える不規則な足音を今でもレヘナは記憶している。

エズベルは手を動かすのをやめる。彼はふんわりと漂った。レヘナとエズベルの距離が縮まる。

「俺、そろそろいかなくちやならない。情報収集者の動かし小型艇やその他の動作チェックなりなんなりをしなければならぬんだ」

エズベルはそこで軽く笑った。レヘナも笑い返した。

「わかった。またね」

「じゃあねー」

エズベルは手すりから手を離し、レヘナに向かって手を振りながら片手で上へ上へと向かっていった。徐々に高速なラインに乗り換えるため、レヘナとの距離がどんどん開いていく。レヘナにはできない芸当だった。レヘナには無い、飛行技術者特有の迅速な状況認識に裏付けられた身体能力の高さのおかげだろう。最も速いラインに乗った頃には、エズベルの姿は判別不能になっていた。



手すりから手を離し、扉の前に立つ。扉はレヘナを認識して開いた。

レヘナの足下に緑色の光点が現れ、光点はなめらかに床の上を滑りドアの奥へと移動していった。光点の軌跡は緑色のラインになって光っている。レヘナはラインに沿って進んでいく。ラインに沿って移動すれば、自分の行こうとするところまで迷うことがない。そのためラインだった。アイレムは巨大で入り組んでいるため、完全に道を覚えきることが不可能だった。

緑色のラインはどこどころの暗闇を抜けてレヘナを案内した。

中央に通路が一本、左右にいくつものドアがある。ラインは一つのドアの前でとぎれていった。レヘナがドアの前に立つと、ドアは音もなくスライドする。さらにドアがある。一歩踏み出すとそのドアも開いた。

最初に目に付いたのは、真っ黒なスクリーンだった。小型艇操縦席前方の上半分を占め、レヘナの後方にある緑色のラインをうつすらと映り込ませている。下半分中央には状況を確認する為のモニター。椅子の左右には圧力感知レバーが一本ずつ。他には、着陸の際に使用する各種レバー、ボタン、ディスプレイ類がある。

レヘナはゆっくりと漂いながら椅子に向かい、身体をベルトで固定する。レヘナがベルトで固定された瞬間、二つのドアは勢いよく閉まった。

中央のモニターに光が灯り、スクリーンが透明になる。はるか前方に四角く切り取られた宇宙空間が見えた。

レヘナは軽い加速度を感じた。

「さて、これから居住型惑星に向かうわけだけど、私たちが惑星につくまでにしなければならぬことは、わかっているわね」

レヘナは小型艇の中で、上級情報収集者のキルシ・エリニマが中級情報収集者に向けて話している言葉を聞いていた。

レヘナの小型艇はアイレムから二キロメートルの距離に浮いていた。周りには同じ形状の小型艇が多数浮いている。大気圏突入にも耐えられるように作られた流線型で、翼がある。太陽系の太陽と同じG型主系列星の光を浴びてきめいている。

レヘナは生まれて初めて、ブレーヴやアイレムなどの巨

大船以外の船から宇宙空間を眺めていた。シミュレーションでは船から離れた宇宙服での活動までも体験していたが、自分が現実には巨大船というゆりかごから離れて存在しているということを考えて、今置かれている状況はシミュレーションの体験とは何か違うものがあった。だが、それは何が違うかと問われると返答に困るような、微妙なものだった。

「気の持ちようかな」

レヘナは一人用の小型艇の中で、誰にも聞こえないくらいの小さな声でぼそりとつぶやいた。

「私たちは惑星の大気圏まで何もしてはいけない。しなくではならないこと、それは何もしないこと。操縦は飛行技術者による遠隔操作に任せなければならない。目の前にある操作系統はいじれば小型艇を動かすことができるが、動かしてはいけない。今回が初めての小型艇活動の人間がほとんどだから、私は心配ですよ」

「わかりました」

レヘナはある程度大きな声で言った。一定レベルの音量を超えると自動的にマイクが作動する仕掛けになっている。多分他の中級情報収集者も同じせりふを喋っているだろう。

キルシ・エルニマのような上級情報収集者は中級情報収集者を統率する立場にある。中級情報収集者がほぼ一つの恒星系を調査して寿命が切れてしまうのに対し、上級情報収集者は冷凍睡眠に入っている期間が長く、重要な場面にしか利用されないため、平均三つの恒星系の調査にまで参加する。経験を積むことが上級情報収集者にとって最も重要なことだった。経験を積むことによって、状況を判断し中級情報収集者を統率することが可能になる。

小型艇のコックピットの中央の小さなモニター。そのモニターには、自分の現在位置、小型艇全体としての現在位置、今飛行技術者が何を行おうとしているか、などの情報が表示されている。モニターの右隅には、その小型艇を遠隔操作している飛行技術者の名前が表示されている。

レヘナの小型艇のモニターの隅には、エズペル・キリム T132、と表示されていた。

小型艇を操作する飛行技術者と小型艇に乗る情報収集者は会話を交わすことはできない。会話は無意味であるからだ。飛行技術者にとっては操縦とは自分の存在意義の一つであり、暇な情報収集者と会話をしても無駄に集中力を減らすことは自分の最良の仕事を行う上での妨げにしかならな

かった。

エズペルがあのでエズペルであることは、飛行技術者による現状解説の文字によるメッセージにも表れていた。

『今、エプロフェンズの居住型惑星への最適軌道への移動中だよ。最適軌道に移動してからイオンジェットエンジンを作動させるから。とりあえずガス型惑星の重力の影響が小さくなる場所まで移動しないとどうしようもないのさ』

通常ならば飛行技術者が送るメッセージは事務的な口調になるのだが、エズペルは自分が操縦する小型艇に乗っているのがレヘナだということを知っており、レヘナに話すときの口調になっていた。レヘナの側からはエズペルに通信する手段はない。脈拍等の身体的情報以外、エズペルからレヘナへ、情報は一方通行に流れる。

レヘナはモニターに流れるエズペルの言葉を眺めながら、同時に外の景色も眺めていた。

視野の半分を覆う、濃い緑と茶色の渦があちこちに見られるガス型惑星。その球の縁からのぞく黄色い光を放つ恒星。逆光で黒い細長い情報収集艦『アイレム』。巨大すぎて動かない背景の中で唯一動く小型艇の群れ。

居住型惑星はレヘナの位置からは見えなかった。

自分の太陽が星々と同じくらいの大きさにしか見えない場所で、その物体は待機していた。ほぼ完全な球体であるその物体は、恒星系の端から常に監視を行っている。

スペースガード装置は、ガス惑星の周囲にいつもは存在しない物体があることに気づいていた。それはガス型惑星の周囲を公転していた。小惑星の類ではない。物体の組成比から考えるまでもなく明らかだった。それはまばゆい光を発しながらこの恒星系につっこんできたのだ。すさまじい減速によりあらゆる波長の電磁波がこの恒星系にまきちらされ、スペースガードの計測器が一時的に麻痺を起こした。電磁波のシャワーが空間を拡散したところ、それはガス型惑星の周りに腰を落ち着けた。

スペースガード装置はある程度の判断を行うことができるように設定されていた。エプロフェンにより設置されたこの装置は定期的に部品の交換は行われたものの、装置自体は二万五千年もの間同じ軌道を公転している。常に、この恒星系へとやってくる物体への監視を怠らなかつた。

すべては、いずれやってくるであろう『探究者』のためだ。

スペースガード装置に与えられた任務は明確だった。明確であったが故に二万五千年の長きにわたって動作し続けたのかも知れない。

『設定値以上の戦闘能力のある存在が居住惑星に近づいたとき、それを殲滅せよ』

スペースガード装置はその戦闘能力を見極めるために時間が必要だった。戦闘能力を見極め、それが『探究者』と同等に近いかを見極める。スペースガード装置の存在目的は『探究者』への攻撃だ。破壊することを目的としていなかった。『探究者』に対しては、スペースガード装置の攻撃程度は足止め以上の物にならないということは分かり切っていたからだ。少しでも傷を与え、戦闘能力をそぎ落とすことができればそれでよかった。

スペースガード装置は恒星を三百年で公転する軌道からアイレムを眺めていた。

この恒星系に突入してきた時の光の強さや持続時間と、空間のゆがみの程度から推測する質量から、アイレムがどの程度の出力を持っているのか推定した。それが移動の為に出力だとして、その出力が攻撃に回されたときの破壊力を計算した。突入時の黄道面への角度、方向から、どこへ向かっているのか考えた。

装置は判断を下した。

『あれは居住惑星に近づこうとしている。そしてあれは『探究者』に相当する戦闘能力を有している』

スペースガード装置はアイレムの方角へと砲塔を移動させた。

『殲滅しなければならぬ。一つ残らず』

アイレムはガス型惑星を公転している。その公転周期を計算し、こちらの攻撃が届いたときにどの位置にいるかを算出する。攻撃は光速を越えることができないため、一撃でしとめなければならなかった。攻撃が命中したかどうかを判断するには、光が往復する時間がかかってしまう。その後二度目の攻撃を行っても、多分そのときにはアイレムは予測した場所にいく軌道を描いてはいないだろう。

もたらされる情報にタイムラグがあるほどの広さの宇宙空間における戦闘において大事なことは、先制攻撃を行うことと、相手に自分の進路を予想されないことだ。スペースガード装置は自力で移動できる手段を持っていないため、軌道は容易に予想されてしまう。そのため、相手に気づかれた時には相手の戦闘能力を削いでいなければならない。

スペースガード装置は根元存在であるスーパーストリングの振動パターンを変更し、コヒーレントな重力波を内部で精製する。フォトンの振動パターンから作り出された位相の揃ったグラヴィトンを大量生産する。それはすべて砲身に込められた。

音も光も無く、強い空間のゆがみを周囲に残しながら、重力波レーザはアイレムへと一直線に進んでいった。

急に、モニターの光が消えた。

レヘナがエズベルのメッセージを読んでいる最中だった。モニターは何の前触れもなくブラックアウトしていた。

「き、き、聞いて！ 緊急事態よ！」

それと同時に、キルシ・エルニマの声が小型艇内に響いた。声に切迫した響きが込められている。いつもの落ち着いた理性的な声ではなかった。レヘナはエルニマがそのような声を出すのを初めて聞いた。上級情報収集者が取り乱す事態など存在しないとよく中級情報収集者の間では言われていたが、それは嘘だったようだ。

エルニマは一呼吸をおいた。少しの間ができる。彼女の深呼吸がスピーカーを通して聞こえてくるような錯覚を覚えた。エルニマの口調は元に戻っていた。

「アイレムが攻撃を受けたわ。攻撃の質は分からないけど、攻撃を受けるまで兆候が見受けられなかったから、レーザの類でしょう。今飛行技術者達が攻撃源をつきとめて反撃しようとしているはず。私たちにできることは何も無い。操縦装置をさわって移動しようとしてはだめ。飛行技術者達を信じなさい。状況説明は自分の担当の飛行技術者がしてくれるはずだから」

レヘナは宇宙空間を眺めた。アイレムの巨大なスケールと、複数の小型艇の群れ。無人の収集機が、光を明滅させながらゆっくりとガス型惑星に降下している。何も変わっていないように思えた。攻撃を受けたとはとても思えなかった。アイレムも小型艇も、同じ場所に確かに存在しているように見える。

モニターの光が戻った。

レヘナはモニターを凝視した。現在状況を示すウィンドウが次々に立ち上がる。ウィンドウが次々と立ち上がるという状況そのものが、現在異常事態にあるということを示していた。情報収集者にとって必要な情報というのは宇宙空間においては限られており、通常ならばウィンドウを開

くほどの大量の情報が小型艇のモニターに提示されることは無かったからだ。

レヘナはモニターの上の情報をただ眺めていた。表示されている情報は技術系の情報ばかりだった。それは飛行技術者用の情報であって、アイレムから離れている情報収集者のレヘナができることなど一つもなかった。アイレム側は情報を選別して表示する余裕もないほど混乱しているのだろう。レヘナは口に手を当ててモニターを見つめていた。

『レヘナ。ごめん』

突然、まったくの唐突に、モニターが青一色になった。

そのあと中央に白い文字列が表示された。

小型艇のモニターに情報を流す余裕もなくなったというの？

レヘナはそう思いながら次々と表示される文字を読んでいた。

『レヘナ。単純に飛ばすのにはたいした技術はいらないと思うけど、一応飛行技術者用の小型艇の操作マニュアルをそっちに送信しておいた。できるだけ早く居住型惑星の方へと移動するんだ』

レヘナはただ文字を眺めていた。

『アイレムはもう駄目だ。対消滅炉も推進用の核融合炉も完全にやられてる。攻撃はアイレムの中心に直撃した。攻撃自体で数百人は死んでる。対消滅炉が散発的な暴走を繰り返して、そのせいでアイレム中心半径一キロメートルの間からの連絡は完全に途絶えた。多分数千人が死んでると思う。君の目からはアイレムは巨大すぎて何が起きているかわからないかもしれない。肉眼で確認できないかもしれない。けど、アイレムはもう壊滅的な状況なんだ』

レヘナは膝の上に置いた手を握りしめた。

レヘナはエズベルと話したかった。青い画面にただの白い文字の一方通行が嫌だった。自分もエズベルにメッセージを送りたかった。

だが、それはできない。アイレムとの通信手段をレヘナは持ち合わせていない。

宇宙空間は何も変わっていないように見えた。

『情報技術者は宇宙空間では小型艇の操縦を禁じられていることはよく分かっている。けれど、その場所にいたらレヘナ達情報収集者は全員やられてしまう。相手はアイレムどころかブレーヴの護衛艦すら持っているような高出力の重力波レーザーで攻撃してきてる』

視界が涙でにじみ、青い画面の文字がぶれる。レヘナは両目を強くこすった。

『ごめん、ほんとごめん。俺、何の役にも立たないで終わってしまった。レヘナの役に立ちたかったのに。俺の方が年上になったのに……』

そこで、青い画面は消えた。

モニターは現在状況を表すウィンドウが多数ある状態にもどった。ほとんど全く変わっていないかったが、右下の担当の飛行技術者の名前が無くなっていた。

レヘナはしばらく無機質なモニターを眺めた。だが、溢れてくる涙でよく見えなかった。両手で顔を覆い、首を左右に振る。飛び散った涙の粒がコックピット内に漂った。

レヘナは本来なら着陸時まで触ることがないはずの圧力感知レバーを握った。レヘナが握ることで、コックピットが活性化する。沢山のディスプレイが光を灯し、レヘナの次の入力を待ちかまえた。圧力素子がレヘナの手の圧力を感知し、微小な圧力の変化はコックピットの各部へと伝達される。

レヘナの小型艇が他の小型艇の群れから離れていく。

「レヘナ・カタギリ・F125、何をやってるのです。操縦桿に触ってはいけません。すぐに戻りなさい！」

小型艇の中に上級情報収集者の声が大音量で響き渡る。

レヘナはすぐにスピーカーの音量をゼロにした。

もう、上級情報収集者は必要がなかった。

レヘナはエズベルが送ったマニュアルをモニターに表示させながら、居住惑星へと加速した。ガス型惑星の重力の影響を考えずに、ただイオンジェットエンジンを目一杯噴かせた。体験したことのない高加速度で肺を押しつぶされそうになりながらも、レヘナは圧力感知レバーを放さなかつた。

私の小型艇が小型艇群から離れていくところはエズベルから見えるはず。エズベルは私の小型艇をモニターしているはずだから。情報収集者から飛行技術者へと何かを伝えるには、私のはつきりとエズベルの望んだことをしているという事を示すには、行動しかない。

エズベルは見てくれたのだろうか。

居住惑星への最適軌道に乗り、ガス惑星とアイレムとある程度距離が離れると、レヘナは圧力感知レバーから手を

離して軽く息を吐いた。コンピュータ音声が増速の終了を告げ、背中が圧力が消失する。

中央モニターの隅をタッチしてコックピットを展望モードに切り替える。コックピットの上半分が透明になった。腰に着けていた拘束具を取り外し、レヘナは後ろを振り返る。

ガス惑星は依然として巨大だった。両手で包み込めるくらいの大さに見えた。細かな渦は見えないが、巨大な緑色の渦が茶色い球体の表面で踊っているのは見える。

アイレムは見えない。恒星間航行能力を持つアイレムがいくら宇宙船としては巨大だとしても、自然が作り出した巨大な物体と比較すればものすごく小さい。

「拡大。対象、アイレム」

レヘナが短く指令を出すと、スクリーンの映るものが変化した。ガス惑星は近づいてくるかのように大きくなる。ガス惑星の隅、茶と緑の渦巻きの中に、黒い物体が見えた。黒い物体がレヘナの視界の中心に来るように映像がさらに変化する。そして再び拡大される。

茶色い背景に、漆黒のアイレムが存在している。そのアイレムのそばには無数の小型艇が見える。ガス惑星の放つ反射光のせいで、それらは黒いシルエットとしてしか見えない。

アイレムは散発的に橙色の光を放っている。時間的間隔はだんだん縮まっているように見えた。

アイレムは、同一中心軸に円盤状構造物が何十層も積み重ねられている構造をしている。中心軸上、船体の中点付近中から漏れ出すように光が放射されていた。形はレヘナが知っている形と変わらない。光を出していること以外は、これといった異常は見あたらない。

突如、スクリーンが黒く不透明になる。

レヘナは前を向き、中央モニターを見た。強力な放射線が対象物から放射された為、目を保護する為にスクリーンが不透明になったらしい。

「保護、オフ。自動輝度調整モード」

「放射線警戒レベルダウン。能動的保護機能停止。受動的輝度調整モードスタンバイ。スクリーンの透明度、変更します」

コンピュータ音声とともに、スクリーンに再び映像が現れる。レヘナは後ろを向いた。両手を口に当てる。

アイレムは瓦解しつつあった。



同一中心軸が失われたように見えた。何十層もの円盤状構造物はそれぞれが剥離して上下左右にゆっくりと散りつつあった。ときおり激しい赤い光が発せられている。アイレムのまわりにいたはずの小型艇は、無重力空間にぶちまけた水のようにあちこちへと飛び散っている。どの小型艇も蒸発するかのように砕けていく。

ガス惑星の色がおかしい。表面にまがましい赤色が渦巻いていた。緑と赤が混じり合い、不気味な色だった。その赤がガス惑星の流す血に見える。

出し抜けにガス惑星は光り出した。

赤い光が黄色い光に変わる。緑色の光は完全に消失していた。黄色い光は橙色へと変わり、また赤色になる。レヘナには、ガス惑星の輪郭がぼやけ膨張しているように見えた。

膨張しながら赤い色が濃くなる。赤以外の色が消える。次第に暗くなる。光は赤より長い波長へと変化している為に見えない。

スクリーンが輝度を明るく補正し、赤が映えた。

「スクリーン輝度九十パーセント減らしてっ」

レヘナが叫ぶとスクリーンは一気に暗くなった。星もガス惑星も全く見えない。

瞬間。

スクリーンに光が満ちた。

まぶしいと感じてレヘナが目をつぶる前に、スクリーンは自動輝度調節を放棄し完全に光をシャットアウトした。暗い室内を室内灯の薄暗い光が照らす。

十秒後、スクリーンの輝度が戻った。

スクリーンには、無数の恒星の光だけが映っていた。

レヘナはたった一人になった。

二

ティキは空を眺めている。

学校帰りにぶらぶらと散歩をしているうちにあたりはすでに星が瞬いていた。いつもの場所で、いつものように、足を投げ出して座った。

住宅街に唐突に現れる緑の草原。ティキはコンクリートの縁に座っていた。草原はティキがひょいと飛び降りられる程の高さだけコンクリートよりも低い。港の縁から足を降ろせば下に海が広がっているのと同じように、ティキの

足下には草原が広がっている。草原の向こうは水平線だった。草原のさらに向こうには海が広がっている。

惑星の緑化政策によって生まれた草原だった。自然にできた草原ではなかった。草木も何も生えていなかった茶色い荒地を、政府が三十年かけて短めの草が生えるに最適な土壌に作り替えたのだ。

徹底的な管理の末に生み出された草原。人間は立ち入り禁止であり、さらに動物もいない。動物は美しい景観を乱すからだ。この草原は、ただ景観のためだけに存在する。

それでもテイキはこの草原が好きだった。

彼は毎日この場所を訪れていた。現実と完全に区別できないヴァーチャルリアリティの中には、これを上回る美しい景色も無数にあったが、やはり現実に存在するということとは重要だった。ただ草がなびいているだけだが、飽きなかった。草原の上に広がる空は毎日異なっていたからだ。雲は仮想現実とは異なり完全な不規則な形をしており、その流れる速度には何の意志も介在していない。すべてがその日にならないとわからない。

テイキは星のことをよく知らない。夜空に光る星々の一つ一つが太陽と同じように自力で光る星だということは知っている。だが、それだけだ。それ以上の事を知りたいと思っっているが、知ることはできなかった。テイキ以外にそれ以上に知りたいと思う人間はほとんどいない。誰も彼も無関心で、何の資料もない。唯一の資料らしい資料は数年ほど前に学校で使った教科書だけだ。自然科学の教科書データが入っていた端末は、いつも持ち歩いていた為にぼろぼろになっていた。何度も見ても、映像も文字も完全に丸暗記してしまった。目を煌めかせて熱心に端末を見るテイキを見て、結局眺めることだけしかできない星々について知ったところで一体何の役に立つのか、と周囲の人間はため息を漏らす。父親がいなくなったからって星に安らぎを求めているのか、と嘲笑する者さえいた。

草原と違って、夜空はいつも異なっている。草原の上にある空は文明の光に遮られないためによく見えるのだ。テイキはいつも、流れ星を数えたり、夜空に一番大きく光り輝くガス型惑星『フェン』の魅力的な色彩の変化を眺めたりして過ごす。

テイキ達が住んでいる惑星は『エプロ』。ガス型惑星は『フェン』。昼間を作り出す恒星の名前は『エプロフェンズ』。最初に名付けた人のセンスが疑われるよな、とテイ

キは思う。

ティキはそのようなとりとめのない事を思いながら時間をつぶす。家に帰っても何もすることがなかったからだ。ティキは一人暮らした。仕送りはあるが、ヴァーチャルリアリティに毎日興じられるほどの余裕はない。

ガス型惑星が光った。

コンクリートに影ができるほど強く光り輝いていた。直視できないほどだ。ティキは思わず立ち上がった。背中に背負っているバッグを地面に降ろし、中をまさぐる。

「確か双眼鏡があったはずんだけどな……」

ティキが双眼鏡を探している間も、光はさらに強烈なものになっていった。熱さがあるように錯覚してしまうほどの光だ。ティキが今まで星を眺めてきた間には、一度もこんなことはなかった。ガス型惑星が光り輝くことは一度もなかった。ガス惑星にはただ幻想的に渦が見えるだけだった。ティキには起こっていることが全く理解できなかった。

双眼鏡を見つけたときには、すでに強い光は消失していた。光っていた場所には余韻のように薄暗い光がある。

ティキはとりあえず双眼鏡でその薄暗い光をのぞいてみた。

ぼんやりとした、光。

手の力が抜ける。

ティキは双眼鏡を落とした。あわてて拾おうとしたが、足下の草原に落ちてしまっていた。草が双眼鏡のかたちにくしゃりと折り曲がっている。草原の中に降り立ってはいけないのだが、物を落としてしまったのなら仕方がない。

ティキはすぐに草原に飛び降りた。

たいした高さではない。背の低いティキが背伸びをすればコンクリートの縁に手をかけられる程度の高さだ。双眼鏡を足で踏まないように慎重に着地し、すぐに双眼鏡を拾う。すぐにレンズに目を押しつける。最初にのぞいたときのことか本当なのか確かめるためだった。コンクリートの上から覗いたときは、ありえないものが見えたのであわてて落としてしまって、はっきりと確認することができなかった。

薄暗い光の方向に双眼鏡を向け、次にその周囲に向ける。「やっぱり」

あるはずの所には、何もなかった。いや、何も無いわけ

ではない。何かぼんやりとした薄暗い光だけがそこに存在していた。惑星が夜空の中で極端に移動することはない。それはティキも知っている。

ガス型惑星は見えなかった。

なぜ、『フェン』は見えないんだろうとティキは思う。

ティキには何がなんだかさっぱりわからなかった。ただその場で呆然と空を眺めていた。双眼鏡が手の中から滑り、地面に落ちる。

空の明るさが少し減ったような気がした。

どのくらい眺めていたのだろうか。ティキはしばらくしてようやく自分が草原に長時間立っていることに気づいた。足跡が付かないくらいの短い間しか草原に立ってはいけなという政府の規則を思い出す。身体をかがめて落ちている双眼鏡を拾い、コンクリートの壁に向き合う。つま先立ちをして双眼鏡をコンクリートの上に置いた。そのまま手をコンクリートの縁にかける。

コンクリートに、自分の影が映った。

手をかけるのをやめて、ティキは振り向く。

光の正体は流れ星だった。普通の流れ星が影を作り出すほどの光を放出することはない。ただの流れ星ではありえなかった。それに、後ろを振り向いてもまだ空を流れているということ、かなり速度が遅いということになる。

ティキは流れ星を目で追った。赤や白の光の尾を引きながら流れ星は斜めに落ちていく。風が吹き荒れ始めた。轟音が空から聞こえてくる。空自体が震動しているかのようだ。ティキは後ろを振り向いたまま硬直していた。目の前で起きていることを認識し切れてなかった。

流れ星の先端は、草原のど真ん中に落ちた。

背中の中の痛みを感じながら、ティキは目を覚ました。視界のほとんどを緑が占めていた。ティキは草の上に横になっていた。ゆっくりと身体を起こす。緑以外の色が視界に入る。

それは赤だった。

「あ……」

ティキはそれしか見えなかった。草原の真ん中が燃えている。海とコンクリートのちょうど中間あたりだった。火が燃えているところを現実で見たのは初めてだった。草原の草は燃えている地点を中心にして放射状になぎ倒されて

いる。

炎の中心に何かが見えた。草原に何かが斜めに食い込んでいた。炎のせいでテイキからは黒くしか見えない。丸くはなかった。流れ星とは違うようだ。

テイキが眺めている間も、赤は緑を徐々に浸食していった。草原はすでに草原とは言えなかった。ただの醜い緑色の大地だった。テイキにはそう思えた。

炎の中心にある黒い物から、かなり小さな別の黒が現れた。その小さな黒い物は、大きな黒い物から産み落とされたかのように不器用に落ちる。

黒いシルエットは人の形だった。ふらつきながら立ち上がっていた。

熱を伴う風がテイキの方へと吹き付けてきている。ほんの少し焦げた匂いが流れてきていた。頬がじりじりとほんの少し熱い気がする。

テイキは炎の中心にかけ出した。

「大丈夫ですかー？」

テイキは叫びながら近づいた。黒い人影はよろよろとテイキの方へ歩いてくる。近づくとつれて人影の細部が判明しだした。

ヘルメットのようなものをかぶっている。手足は細いようだ。

さらにテイキは近づいた。火の粉が中心部から飛び散っている。顔面が熱い。両手で頬を叩く。

その人は、赤いつなぎのようなものを着ていた。頭部のヘルメットの前面はガラス質らしく、赤と緑と青が映り込んでいる。顔はそのために見えない。頭は不規則に揺れ、今にも倒れそうだ。

十歩進めば手が届く距離にまで近づいたとき、人影は大きくバランスを崩した。膝が折れ曲がり、身体を回転させて地面に倒れ込む。テイキは可能な限り全力で走った。

草の上に仰向けに倒れているのは、女の人だった。ヘルメット前面の透明部分には、飛び交う火の粉とテイキの顔がうつすらと映っている。

「大丈夫ですか？」

見た目で大丈夫ではないことはわかっていった。だが、口に出す言葉でそれ以上よい言葉は思いつけなかった。赤いつなぎの脇腹付近が破れ、つなぎよりも赤い物がその下の服を染めていた。女の人を背中に背負ってとりあえず炎の

中心地から離れようと、ティキは彼女の手に触れた。

瞬間、赤いつなぎに吸い込まれるようにしてヘルメットが消えた。女の人の顔が露わになる。長い赤い髪の毛が外気に触れた。髪の毛がさらさらと風になびきだす。女の人

はティキの方を向いた。

「着陸は、なんとか、成功したみたいね……」

「い、今、救急チーム呼びますから、とりあえず、炎から離れましょう！」

ティキは女の人の手を掴み、引っ張り、彼女の身体を背負った。引っ張り上げたときに、女の人は言った。

「事態は切迫してるの。騒ぎを大きくしたくない。救急チームとか、そういうものは呼ばないで。私はまだこの居住型惑星の公的機関に知られてはならないの……。私のことは見なかったことにしてほしい」

「けど、血だらけですよ」

「なんとかなるから」

なんとかなるようにはティキには思えなかった。ティキはこの女の人について何も分かっていなかったが、このまま服が染まるほどの血を流し続けると、確実に死んでしまうことだけはわかった。

背中に生暖かい物を感じる。ティキの服にも血が染み込んできているらしい。

「やはり、救急チームを呼びましょう。あなたは自分がどのくらい出血しているか理解しているのですか？ このままじゃ、死にますよ」

ティキは女の人の身体を動かさないようにゆっくりと歩く。人を背負っているというよりは、何か人型の物を背負っているようで、少し重かった。

「それだけは、絶対に、やめて。自己治癒能力増強モジュールが造血しているから出血は気にしなくてもかまわないのそれに、もうそろそろ止血も完了するはず。あなたは私を見なかったことにして去ればいいの。私を背中から降ろしてちょうだい」

だが、女の人が自分から降りる気配はなかった。自力で降りる力が残っていないのかもしれない、とティキは思う。そんな人が人をおいて去ることができるほど自分は冷血じゃない。

確かに、流れ出す血の量は減ってきているように思えた。ティキは後ろを振り返った。草原に引かれた血のラインが徐々に細くなっているのが見える。

「あなたが私を助けても、何のメリットもないでしょう？」  
「困っている人を助けるのは、当然の事でしょう」  
「それなら、私が自殺するつもりだったとしても助けるの？ 私にとって生きていることが最大の苦痛で、死ぬことが唯一の逃走手段だとしても？」

「もし目の前に死のうとしていて人がいたら、誰だとしても僕は止めます。そして一緒に現状の打開策を考える」

「……お人好しなのね」

女の人はずぶやくように言った。

「そんなことはないです」

ティキは自分の鞆と双眼鏡が置いてある場所から少し離れた場所に向かっていた。その場所には、コンクリートと草原を結ぶ階段がある。そこなら人間を背負ってもコンクリートの地面に上がることができる。

「本当に、あなたは自殺をしたかったのですか？」

コンクリートの階段を一步一步確実に踏みしめて上がる。足の下のコンクリートがやけに堅く感じられた。ティキは鞆と双眼鏡のある場所を横目で見た。今取りに行くことはできない。あとで取りに行けば別にかまわない。

「違うわよ。そんな無駄なことはする気ないわ」

階段を上り終える。草原はティキの家の至近距離にある。階段さえ上ってしまえば、あとはただまっすぐ歩くだけだった。

「そうですか。よかったです」

「けど、私はいつ死んでも構わない」

足が止まる。急に女の人が重くなつた気がした。

「……なんで、そんなことを言うんですか」

死にたくないのに、死んでしまう人がいるのに。

ティキは再び歩き出した。だが、足取りが重い。急に背負ってきた疲労が全身に押し寄せてきた。ティキは、首を一度左右に振って歩く。

ティキの視線の向こうには、ティキの家が見える。この惑星には珍しい木製の家だ。そのまわりには、何も無い。ただコンクリートが広がる平面。その平面の上に、ぽつんとティキの家が建っている。コンクリートの灰色と家の茶色がちぐはぐとしている。

ティキの問いに女の人は答えなかった。

女の人の息がティキの首にかかっている。

呼吸は規則正しかった。

ちらりと横目で女の人の顔を見る。  
ティキの背中の上で眠ってしまっているようだった。

やがて、ティキは自分の家の前にたどり着く。ティキが来たことを家が感知して、木製のドアがゆっくりとスライドする。

ティキはとりあえずゆっくりと自分のベッドの上に女の人を降ろした。シーツに赤いシミがいくつも付いたが、ティキは気にしなかった。血はもう流れ出してはいないらしく、それ以上シーツを赤くしそうにはなかった。

ティキは適当にタオルケットを探してきて女の人の身体にかけた。タオルケットが呼吸に合わせて上下に動き出す。女の人は今も眠っている。

ティキは女の人の頭の上に濡れたタオルを載せてから、自分は床に寝転がった。

横になつた瞬間に、疲労がじわりと全身に広がり、それとともに睡魔が襲ってくる。着替えてから寝ようとティキは思っていたのだが、襲ってくる睡魔は強力で魅力的だった。ティキはそのまま眠ってしまった。

### 三

ティキは身体の節々の痛みとともに目覚めた。横を向いて眠っていたからか、右手が痺れている。ティキは顔に手を当てて目をつぶった。そのまま手を顔から離し、握ったり開いたりする。痺れを空气中に追い出すかのように。

身体を半回転させて床から起きあがる。ティキはベッドへと視線を移動させた。  
いない。

そこには誰もいなかった。シーツもなかった。ベッドがベッドたる最低限の物以外、ベッドには何もなかった。

「起きたんだ」

背後から声があった。ティキは声のした方へと振り向く。真つ赤なつなぎ。所々にさらに赤く黒くなっている部分がある。脇腹付近はやはり破れている。破れた服の間から肌が見えた。傷を受けたようには、出血していたとは思えないような健康そうな肌が見える。

長い髪は血で赤かったわけではなかった。茶色に近い赤は地毛のようだ。一本一本見分けられないほど細い。歩く動作に合わせて髪全体が一つの作品のように滑らかに動い



ている。

女の人がティキの方へと近づいてくる。

「昨日は、どうもありがとう。着陸地点から遠い場所へと運んでくれたのは感謝してる」

床に座り込んだままのティキの隣に女の人は腰を下ろす。特定できないが花の香りだとわかるようなふんわりとした甘い匂いが漂った。

しばらく二人は何も喋らずにただ座っていた。ゆっくりとした時間が流れ、音もない。耳を澄ませば、女の人の呼吸音すらも聞こえてきそうな静寂。

「疲れてる？」

女の人がティキに聞く。

「いや、ただ変な体勢で寝たから身体のおちこちが痺れたり痛かったりしてるだけです」

「そう。じゃ、ちよつと迷惑ついでに手伝って欲しいことがあるんだけど、いいかな？」

女の人は立ち上がった。動作がきびきびとしていた。

何を手伝って欲しいのだろう。ティキは相手を見る。明らかに怪しい。だが、この人が何をしたいのかが気になった。

「わかりました。いいですよ」

ティキはゆっくりと身体にできるだけ負担をかけないようにして立ち上がった。すでに女の人は玄関の方向へと向かっていった。

「あの」

「なに？」

女の人が立ち止まる。ティキのことをただまっすぐ見つめていた。瞳は青かった。ティキにはその瞳から感情を讀みとることができなかった。

ティキはただ怪我をしている人を助けただけだった。夢中だったが、結局のところ、救急チームを呼んでそれで終わりだと思っていた。それなのに、今、助けた相手は自分の家にいる。救急チームを呼ぶな、とはどういうことだったのか。救急チームを呼ぶと困るということは、犯罪者なのか。

女の人の怪我はすっかり癒えているように見える。

ティキにはさっぱりわからなかった。ティキはポケットの携帯端末の感触を確かめる。ポケットの中で指を動かし、家の防犯機能を気づかれないように活性化させた。ドア近くの小さな防犯ボックスのライトがかすかに一度明滅する。

テイキは内心でほつと息をついた。防犯ボックスはテイキを家主と認識している。家主に危害が加えられそうになった場合には、すぐさま指向性のある強烈な可聴外の音波を発し、攻撃者の内耳を麻痺させる。攻撃者は平衡感覚を失い攻撃不能になる。

「僕には何がなんだかよくわからないのですが、とりあえず、名前だけ教えてもらえますか？」

目の前の人物に対して潜在的優位に立ったところで、テイキは言った。だが、本当に優位に立っているのかどうか、テイキには判断できなかった。まっすぐとテイキを見つめる瞳はすべてを見抜いているような気がしたからだ。

「レヘナって呼んでくれればいいわ。あなたは？」

「テイキ・RM10です。もしよければテイキって呼んでください」

レヘナは微笑む。その微笑みを見るとテイキはなぜか暖かな気持ちになった。犯罪者かもしれない、という可能性はありそうにない気がした。警戒したのは無駄だったのかもしれない。微笑みが自分の何かを溶かしている、そうテイキは感じた。放っておくことができない。幸い今日は暇だし、彼女が何者なのか見極める時間はたっぷりある。「了解。じゃあ、テイキ。着陸地点に行きましょう」

そう言っただけでレヘナは、テイキが歩き出す確認もせず、たすたと家の玄関にまっすぐに向かっていた。テイキは慌ててついていこうとする。だが、一歩目を歩き出そうとしたとき、腰の痛みが瞬間的に現れて体勢を崩し、転んだ。誰も見ていなかった。テイキはすぐに立ち上がる。レヘナはすでに奥へと消えていた。部屋を出る間際に、テイキは防犯ボックスの警戒態勢を解除した。

レヘナが早く起きたのには理由があった。情報収集艦『アイレム』が消失してしまったとしても、レヘナが中級情報収集者である事実は変わりない。惑星の情報を集め、ブレーヴにその情報を送らなければならない。それがレヘナの唯一の存在意義だった。たとえ半径三十光年に誰も仲間がいなくなっても、やりとげなければならない。そうでなければ、アイレムがこの星系に来たことが全くの無駄になってしまう。

軽装宇宙服のあちこちは破れているが、歩くのには支障がなかった。服は気密性が失われ、温度調節機構は損壊している。すでに宇宙服としての役割をなしていないが、こ

の惑星にはレヘナに対しての致死性のウイルスがないことはわかってる。朝早く起きたときに大気の成分その他のサンプルを採取していたからだ。

すでに惑星の大気組成などの物理的情報は空間メモリーに記憶させてある。文明のレベルのたいもテイキと名乗る少年の家に備わっていた各種電子機器で推測してある。情報船団の共通語が通用することは幸運以外の何物でもなかった。第三十二植民船の太陽系出港時の言語体系が共通語であることはアイレムで調べたときにすでに知っていたが、言語がほとんど変遷してないことにはレヘナも驚いた。通常孤立した惑星では言語は簡単に変遷する。従って意志の疎通段階で困難に遭遇することは珍しいことではない、と過去に教えられていた。変遷してないのは徹底的な言語管理を行っている証拠だろう。今のところ、不時着してからはトラブル無くファーストコンタクトが行われている。案外上級情報収集者がいなくてもやっていけるものなのね、とレヘナは内心で苦笑いした。

テイキが何らかの防犯機構を作動させたときは内心で驚いたが、顔に出さずにすんだ。

レヘナが草原へ続く階段の方へと颯爽と歩いていると、テイキが小走りで走ってきた。着替えたのだろうか、着ている服が昨日とは違っていた。昨日はだぼだぼとしたえんじ色のフリースにジーンズだったが、今日は青を基調とした落ち着いた配色の飾り気のない機能的な服装だった。トレーナーはちょうど良いサイズで、すらっとした体型によく似合っている。レヘナには、機能的な服装がテイキという子の趣味なのか、惑星全体の文化なのかは判断できなかった。住人をまだ一人しか見ていないのだから当たり前とも考えられた。

「あそこへ行つて、どうするんですか？ もう何も残っていないと思いますよ。残っていたとしても、燃えかすくらいしか無いような気がするんですが」

レヘナに追いついたテイキが言った。テイキと目が合つ。どんな知識も貪欲に吸収しそうな黒い瞳だった。好奇心が前面に押し出されている。瞳の色は違っていたが、雰囲気のエズペルの青い瞳に似ていた。どのような世界にでも好奇心という物は存在するんだな、とレヘナは感じた。

「私の小型艇はそう簡単には破壊されないの。燃えていたのは草と空気だけ。多分小型艇自体は傷一つ付いていないはず。それを確かめに行くのよ」

「じゃあ、なぜあなたは血だらけで負傷していたのですか？ 小型艇とやらに傷一つ付いていないのなら、あなたも傷一つ付いていないことになりませんか？」

なかなかするどい事を聞く子ね、とレヘナは思った。相手が提示した情報を鵜呑みにせず、自らの判断を行っている。飛行技術者よりも情報収集者に向いている性格かもしれない。

レヘナは後ろを振り返った。コンクリートの大地には静寂が広がっている。あれだけの轟音があれば近隣の住民が見に来ていてもおかしくなかったが、誰も外にいなかった。飾り気の無い建物がただ遮蔽された窓を草原側に向けている。

階段を小走りで草原に降りる。緑色がどこまでも広がり、地平線付近は青黒かった。小型艇の着陸地点の地面は焼けこげて悲惨な状況を示しているようだが、それよりもやや離れた場所の草はすでに何事もなかったかのように普通に風に揺れている。草原に自己治癒能力が埋め込まれているのかもしれない。

「私がなぜ負傷していたかは、多分あなたには言っても理解できないでしょう。それに、敵の攻撃兵器の性質によるものだと推測できるけど、残念ながら私にもそれ以上はわからない。小型艇に向かっているのは、その理由を判断するという目的も兼ねてるの」

そういうものなんですか、と言いながらティキはレヘナの横を歩く。その表情は納得しきれていないようだ。

草原をただまっすぐに歩いていく。たいした距離ではなかった。すぐに小型艇が視界一杯に広がる。小型艇は斜めに地面に突入したまま、そのままの浅い角度で放置されていた。レヘナの腰あたりの高さにあるドアに向かって手を伸ばす。ドアの中央付近にレヘナの手が触れると、ドアは横にスライドした。それとともに、タラップのようなものがドアから生えてくる。タラップは斜めに地面にぶつかって止まった。

「じゃあ、ティキ、ちょっとここで待ってて」

機体の突起部分に手をかけながら、レヘナはタラップを使ってドアに入る。

ティキはレヘナが入った後にすぐに閉まったドアを見つめていた。タラップはそのままの状態だった。ティキはレヘナが触ったドアの部分へと手を伸ばす。一度動きを止め

てから、息を軽く吐く。ゆっくりと人差し指の先で触れてみる。

何も反応しない。

個人の識別が働いているんだろうか。

ティキは小型艇が全部視界に入る位の距離に腰を下ろした。足を左右に投げ出して座る。草がティキの足の重みで曲がった。

ティキはすでに政府の草原に関する規定を完全に無視していた。この目の前にある巨大な飛行機械が草原を荒らし、押しつぶして起きた被害と比べれば、自分が座ったりすることによる被害は些細な物でしかないだろう。小さい物はより大きな物の中で目立たなくなる。

地面すれすれに吹く風が気持ちよかった。

これは、なんなんだろう。ティキは改めて考える。ヴァーチャルリアリティのシナリオの中にもこのような物はない。流線型で翼があることから空を飛ぶ物だと言うことは推測できるが、どここの所属かはわからない。この惑星で主に空を飛ぶ物を利用しているのは、政府と軍だけだった。政府と軍の飛行機械にははっきりと所属ナンバーが書いてあるが、これにはなかった。それどころか、政府と軍が所持しているどの飛行機械もこれと似ている物は存在していないはずだ。

空を飛ぶだけにしては推進機関が大きすぎる。推進機関が機体の半分を占めている飛行機械などティキは見たことがなかった。とても空を飛ぶように作られているとは思えない。ジェット推進でもないようだ。大気中ならば空気を取り入れて加速し反動質量として用いるジェット推進が効率がいいというのに、この飛行機械は反動質量も自分の中に用意しているように見える。空気の取り入れ口がないのに噴射口だけがあるのがその証拠だ。

そして

レヘナという人は何者なのだろう。ティキは最初首都の『エプロフェン』から来た飛行機が墜落したのか程度にしか思っていなかった。だが、今あらためて飛行機械を眺めるとそれがありえないことがわかる。首都から飛んできたとしても、あれだけ燃え上がることはない。首都からこんな形状の物が飛んできたとしたら、ものすごい大騒ぎになっっているはずだ。それに、既存の飛行機械ならば、いくらか浅い角度とはいえ突き刺さって無傷であるはずはない。

一体全体、どういうことだ？

草原を円形にくりぬいた焦げた茶色の地面。遠くから漂う潮の香り。草原の中程にいくと海の匂いがするなんて事はティキは知らなかった。

ティキはただ目の前に確かに存在するものを見つめていた。

#### 四

ティキがぼんやりとしていると、草原が急に騒がしくなる。小型艇が動き出していた。

風が巻き起こる。小型艇は何かを噴射しながら空中へと浮き上がった。ティキは立ち上がった。

どのくらい軽い素材でできているのだろう、とティキは思った。地上へ向けてほんの少し噴射をしているだけなのに、小型艇は何の不安定さもなく浮き上がっている。風が小型艇を中心にして吹き荒れている。草が円形にひねられるように揺れている。止まっている小型艇と動いている風景が対比的だった。

ティキの汗が引いていく。首筋にまで寒気が上がってくる。

その時初めて、ティキは小型艇の翼は補助的なものではないということに気づいたのだ。この小型艇は、翼が無くても空が飛べるだけの出力を持っている。これは飛行機とは全く違う物に決まっている。ティキは確信した。

それとともに、レヘナの正体に関するティキの憶測がある一つの塊となって固着する。

ありえない可能性をすべて取り除いて得られた憶測は一つ。

惑星外、とティキは小さくつぶやいた。この恒星系には惑星は二つしかない。しかも、もう一つの惑星はガス型で人が住むことはできないし、人が住めるほどの大きさのいかなる衛星もない。それが示していることは一つしかない……。

息ができなくなりそうだった。ティキは口を大きく開けた。呼吸の仕方を忘れてしまったかのように口をばくばくと開閉させる。

小型艇は機体を水平にして、ゆっくりと着地した。いつの間にか機体からは三本の足が出ていた。

トラップが延びてくる。トラップは地面に触れてびたりと静止した。揺れていた草たちはいつの間にか静止してい

た。風が止んでいる。

ドアが開く。

レヘナが出てきた。最初に着ていた赤いつなぎではなかった。ティキは思わず息を呑む。灰色のスーツの下、胸元には黒い色が覗いている。三つあるボタンはすべてはめられている。スレンダーな印象を服装が強めていた。落ち着いた配色を好む惑星エプロの人間が見ても違和感がない服装だった。背中にリュックのような物を背負っている。それはすごく軽そうに見えた。

「その格好なら、人混みに混じっても目立ちませんよ。きわめてこの惑星っぽい服装です」

レヘナの目をまっすぐに見つめながらティキは言った。どんな変化も見逃さないように瞬きをせずに見続けた。

ティキの言葉の真意を理解するのに時間がかかったのか、少し間をおいてレヘナの目が見開く。ティキは微笑んだ。憶測は外れていないらしい。

「どこまで、理解したの？」

レヘナはタラップを下りながらもティキの方を眼光鋭く見ている。その瞳の迫力に、ティキは一步後じさった。

「あなたがこの惑星の人間ではないということまでです。それ以上はわかりません」

今度はレヘナがティキに向かって微笑みかけた。

「すばらしいわ。ほんと、あなたは情報収集者の素質があるわよ。こんな事態になっていなかったら、私はあなたを情報船団に推していたわ」

「よくわかりませんが、ありがとうございます」

レヘナはゆっくりと歩いて小型艇と距離を置いた。離れるようにティキに手で指示している。ティキはレヘナの方を見ながら小走りで移動する。レヘナの隣に立ち、改めて小型艇を眺めた。恒星エプロフェンズの光がなめらかな機体に反射している。

「この惑星の言語体系が古代地球と酷似していて助かったわ。身振り手振りを深く考えずに使うことができるのってすごく楽ね」

レヘナは右手を上挙げた。その動作に反応するかのようになり目の前の小型艇が動き始めた。船首を上にして縦になっっていく。小型艇は重力に逆らっているかのように緩やかに姿勢を変更していた。だが、実際に重力に逆らっているわけではないことはティキにも理解できた。小型艇のあちこちに噴射炎が見え、真下の地面は騒がしい。絶妙にコ

ントロールされた噴射と機体の軽さがそのような芸当を可能にしている。ティキが知っているどんな種類の飛行機械もこのような芸当は不可能だ。試みようとする事さえないだろう。浮力を発生させる回転翼無しでは空中に停止できないのだから。

発射、とレヘナが言うと、ゆっくりと空を昇り始めた。風が吹き荒れ、前髪が目刺さるうとする。ティキは額を押さえながら眺め続けた。

まっすぐに上昇せず、少し斜めになって飛んでいく。かろうじて見えるくらいの大きさになると、小型艇は激しい光を放った。少し遅れてつんざく轟音が草原を叩く。小型艇は途端に上昇速度を増した。あっという間に空を駆け上り、見えなくなってしまった。

「何をしたのですか？」

消え去った空の向こうを眺めながらティキは聞く。青緑の空には何の形跡も無かった。

「この惑星を九十分で一周する軌道に乗せたの。ここに置きっぱなししておくより、危険が少ないだろうから」

視線を地上へと戻す。レヘナは背伸びをしていた。手を伸ばしたままさっさと回転して、ティキの家の方向を向く。

「じゃあ、とりあえず、今後のことについて話し合いますよ」

レヘナは歩き出した。ティキはしばらく立ち止まってレヘナの後ろ姿を見ていた。レヘナの髪はふんわりと風になびいている。小型艇の轟音の余韻がほんのりと空間に残っている。余韻は次第に空気にとけ込んでいく。噴射の残り香は消え、空気は凜として冷たい。

ついてこないティキに気づいたのか、レヘナは足を動かすのをやめてゆっくりと首だけ振り返る。そのあと身体をくるりと回転させる。

「それとも、もつこんな非現実とはさよならして、もとの生活に戻る？ 私はそれでも構わない。私はどっちみち、やらなきゃならないことをやらなきゃならない。あなたの参加の有無にかかわらず」

レヘナがティキの事を見ている。青い瞳がまっすぐにティキを見つめている。やはり瞳から何も感情を読みとることができない。いかなる感情の要素を瞳の中に見いだせない。何も表現しない瞳に畏怖を感じて、ティキは一歩後じさった。するとレヘナは微笑んだ。

「元の生活に戻るのなら、私はあなたのことは見なかった



ことにするわ。あなたも私を見なかったことにすればいい」  
首を大きく横に振る。だが、前へ足を踏み出すことがなかなかできない。

恒星間の深淵は深い。惑星エプロに住むどんな人間も想像することができない深さだ。そんな深淵を乗り越えてやってきた者と自分は行動できるのか。単なる好奇心で付いていっていいのか。レヘナがやってきたことよって、間違いない惑星エプロは変わるだろう。星の世界に興味のない住民がどのように変わるのかは想像できない。

決して届かない、眺めるだけの存在だった星々が急に近づいた。無意味な物を眺めるなんて無意味だ、と嘲笑していた奴らを見返せる。

だが、自分が足を踏み出すことによって、影響が惑星全体に広がっていくような気がして怖かった。自分はそんなにも重い責任を負うことができるのだろうか。

「親父のように、逃げたくはない」

ぼそりとテイキはつぶやいた。誰にも聞こえない声で。目をつぶり、まぶたの上を見る。そこで一回深呼吸をした。

テイキは一步を強く踏み出した。

「外部へのネットワーク経路って、この家にはないの？」  
レヘナが聞く。レヘナは二人が家に戻ってから、リュックから小型の端末を取り出して、テイキの家のネットワークに接続しようと試みていた。小型の端末は手のひらに収まるくらいの正八面体だった。八面がときおりあらゆる色に光っている。三角形の八面はただのつべりとしている。接続端子やケーブルという類の物は何もなかった。レヘナは家の壁際にしゃがみ込んで操作している。家を制御しているネットワークには侵入できたらしく、テイキの家のドアや窓の開け閉めを実験していた。ドアと窓が全く同じタイミングで開いたり閉じたりを繰り返している。

「この家、外部ネットワークには接続されていません」  
テイキは居間のソファに座りながら答えた。

「どうしてなの？ この惑星にも全惑星規模のネットワークが存在しているんでしょ？ ある程度進歩した文明なら、いつでもどこにいてもネットワークにアクセスできなければ日々の生活は成り立たないはず」

レヘナは暫くしゃがみ込んで端末を操作していたが、テイキの家が物理的に外部ネットワークとは切り離されて

いることに気づいたのか、あきらめて立ち上がり、テイキの向かいに腰を下ろした。

「父がこの家を建てたのですが、そのときに、父がネットワークには絶対に接続できないような構造の家を建てることに執着したんですよ。学校へ行けばネットワークには接続できるので、もう家がつながっていないのは慣れました。不便なのは確かですが」

「そうなんだ。で、そのお父さんは今どこにいるの？ 仕事？」

「父は、失踪しました。母は僕が幼かった頃に死別しています。僕は今、一人暮らしです」

テイキの声に若干の陰が落ちた。父親が失踪したときの心理的ダメージはまだテイキの心に残っている。テイキの父親は、『絶対にこの家を外部ネットワークに接続してはいけない』という書き置きを残してある朝に消えてしまっていた。あのときの自分の感情の推移をテイキは完全に覚えていた。呆然、怒り、悲しみ、達観へと推移した自分の感情。だが、まだ完全に達観へと至っていないかった。

「ふーん。アイレムでは逃げられる場所なんてなかったし、一人一人に発信ビーコンがついていたから、そんなことはありえなかったわ。それに、自分のやるべきことを放置して逃げ出そうとすることは、人間が行うこととして最低なことだと私たちは教えられていた。失踪なんて、最低なことをしたもののね、テイキのお父さんは」

レハナの口調は、感想以上の物ではなかった。いない人間について語ってもしょうがないとでも考えているのだろうか。

テイキも、自分の父親が最低なことをしたと思っている。養育義務を放棄してどこかへと消えてしまうことは、この惑星でも充分に悪いことだ。首都と、その周りを取り囲む位置に存在する巨大な都市に人口のほとんどが集中し、都市にいさえすれば文明の繁栄を謳歌できるというのに、テイキの父親は大陸の端、草原と海の近くにネットワークからも切り離された家を建てた。それだけでテイキは父親のことを許せなかった。ネットワークとつながっていることは文化的な生活を営む上での最低限度の条件だというのに、テイキの再三の懇願にもかかわらず、父親は絶対に家を外部ネットワークに接続しようとしなかった。

ネットワークにつながっていないことにも慣れ始めた頃、父親は失踪した。生活には困らなかった。どこからか入金

されていたからだ。入金しているということは、父親がまだ自分の事を気にかけている証拠とも考えられたが、本当に気にかけているのなら失踪などしない。父親は親としての自分ではなく、歴史学者としての自分を選んだのだ。世間に認めてもらえないのを日々こなさなければいけない事が多すぎるからだ。と決めつけ、子どもと住んでいけば研究時間は少なくなると考えたのだ、とティキは今にして思う。どこへ消えたのかは知らなかった。ティキは探そうとはしなかった。

ティキはソファに座ったまま、まっすぐ窓の外を見た。青と緑が混じり合った空が遠くまで広がっている。恐ろしいくらい天気が良かった。

「父さんは、何か考えがあつて、僕の前から姿を消したはずです。父さんは無責任な人じゃなかった。他の多くの人間とは違って。父さんは、歴史学者としてこの文明の行き着く先を考えた末に、何らかの行動を起こすためにどこかへ行ったはず。父さんは最低な事をしたわけではありません」

父親がどのくらい最低かを喋ろうとしていたのだが、気が付けばティキは父親のことを弁護していた。父親が失踪したときに周りの人間からかけられた言葉と同じことを喋っていた。ティキを慰めようとしてくれる心暖かな人たちが、ティキの心の傷を少しでも癒そうとして吐いた気休めの言葉だった。それがティキの口から溢れてくる。

「ふーん。で、なんでティキのお父さんはネットワークにつないじゃいけないって言ったの？」

「わかりません。父さんは、ただ、『ティキが生き残るために必要な処置だ』とだけ言つて、それ以上は僕がいくら聞いても理由は教えてくれませんでした。全然意味が分かりませんよね。ネットワークにはほとんど全ての家がつながっているのに」

レヘナはティキの父親の話については熱心そうに見えなかった。レヘナはティキの父親自体には興味がないらしい。あくまでも関心は外部ネットワークにあるようだ。それがティキには嬉しかった。本当に無関心なのか、それともこの惑星の文化がわからないから聞かないのか、ティキには判断できなかった。しかし、そんなことはどうでもよかった。

「私は、まだこの惑星の事がよくわからない。ティキのお父さんが言った意味を判断できるほどのコンテキストを得

ていない。とりあえず、どこかからネットワークに接続してデータベースにアクセスしないとイケないわ。データベースにアクセスできるネットワーク端末って、近くにあらなの？」

テイキは腕を組んで考える。自分がいつも使っているネットワークは学校ののだが、学校はセキュリティが堅く外部の人間は入ることができない。ほとんどの人間が自分の家のネットワークを外部ネットワークに接続している。

「外出先からネットワークに接続したい人用に、都市部にはあちこちにネットワーク端末があります。けれど、それはID無しでは接続できません」

「ハッキングして接続してもいいんだけど、あんまり目立つことはやりたくないわ」

さりげなくとんでもないことを言う人だ、とテイキは思った。レハナの文化圏では、ハッキングは殺人に次ぐ罪ではないのか。ハッキングは個人を電子的に殺すことができる手段の一つだと言うのに。

あ、とテイキは声を出した。あることを唐突に思い出していた。父親が歴史学者として仕事をしているとき、どこで情報を仕入れていたのか。父親は主にフィールドワークで、家が外部ネットワークに繋がっていなくても仕事に支障がなかった。だが、どうしてもネットワークから情報を得ることが必要になるときがあった。そのとき、父親はどこで情報を仕入れていたのか。

テイキが目を何気なくレハナの方へ移動させると、レハナと目が合った。レハナはテイキが口を開くのを待っているようだ。

「図書館です。図書館にいれば、自由に情報にアクセスできます」

テイキの声が自然と弾む。

「確か、図書館は全住民が利用できるようになっていました。あ、全住民に開かれていますので、入場制限はなかったはずです。貸し出しのみ本人の確認がいるはずで……。お、かなりいい案かもしれません。ネットワークには自由に接続できるはずですよ。しかも、図書館には約五百年の長きに及ぶこの惑星の全記録が保存されています」

「五百年？」

レハナが怪訝そうな顔をして聞き返す。テイキには何故レハナがそのような顔をしたのが理解できなかった。五百年という歴史の長さに驚いているのだろうか、とテイキ

は思った。

「五百年です。ちょうど五百年ほど前に原因不明の大惨事があつたらしく、そこであらゆる情報が断絶しています。まあ、有史以前と言つてもいいくらいの、どうでもいい情報ですよ。図書館は都市には必ず一つあるので、とりあえず向かいましょうか」

ティキは立ち上がる。一番近い都市の図書館には自動陸上輸送車両と地下鉄を乗り継いでいけば行ける。ティキは床に無造作に置いてあつた自分用の長方形の小型端末を拾い、ズボンのポケットに入れた。家の玄関に向かつて歩く。ソファのスプリングが元に戻る音が背後で聞こえた。ティキは立ち止まり、振り返る。ティキの方を歩いてくるレヘナを見る。ティキはレヘナに指を指した。レヘナが立ち止まる。

「僕がいろいろ喋つたんだから、今度はレヘナの番ですよ。あなたがどこから、何の為にやってくる、データベースで何を行うのか、包み隠さず話してもらいます」

レヘナは腕を前に出して、親指を立てた。そしてにこやかに微笑む。

「わかつてるわ」

レヘナが示したジェスチャーの意味は明確だった。レヘナの文化とティキの文化のジェスチャーが同じという事をティキは再確認した。ティキも指を指した手の人差し指を引つ込め、親指を上を立てる。

「よし、じゃ、とりあえず、自動陸上輸送車両の停留所までここからは距離があるので、歩きながら話しましょう」

家を出る。直射日光が白いコンクリートに反射して目に入り、ティキは目を細める。見上げれば、青と緑の中間の色合いの空が広がっているのが見えた。その空の中に恒星エプロフェンズが輝いている。

ティキの気分は高揚していた。雲一つ無い空をこれほど気持ちよく眺めたことがなかった。父親が失踪してからは、こんなにも気分の高まる出来事に遭遇していなかった。平凡な日常が非日常へと変化していく手応えを感じていた。どうせすべてが変わってしまうのなら、自ら変えてしまった方が楽しいじゃないか。

二人はティキの家を出発し、自動陸上輸送車両の停留所へと向かった。

エプロフェンは目を覚ました。部屋は周りすべてが銀色だった。

ほぼ五百年ぶりの目覚めは爽快だった。身体などの箇所も異常はない。念のために機械に診断させたが、やはり何の異常もなかった。

両の手の指を折り曲げたり開いたりしながら、中央の椅子に座る。椅子は活性化し、エプロフェンと一体化する。

エプロフェンはスペースガード装置から送られてきた情報を読んでいた。

スペースガード装置は、自らが重力波レーザーで破壊した物は『探査者』であると主張していた。

『そんなわけがあるはずがなかるう』  
エプロフェンは鼻で笑う。

装置はガス型惑星『フェン』を破壊した。二万五千年の長い待機の末に、初めての系外来訪者を迎えて回路がおかしくなったのだらうとエプロフェンは思う。確かにフェンの周囲に何かがあったのは確かだ。それはデータが示している。

装置は『探査者』に傷を負わせる為に自らができる最大出力の重力波レーザーを放った。伝わった空間を歪ませ、通過した空間にある物質を強力な潮汐力で分解させながら、重力波レーザーはフェンのもとに到達した。フェンは強力な潮汐作用による分解効果で、中心のダイヤモンド殻が崩壊、その後自重で圧壊。中心へと落ち込んだガスは密度が高まったある瞬間に反発し、中心にダイヤモンドをわずかに残し熱と光を伴って四散した。

そのときに、その何かは消滅した。後には、拡散したガスのぼんやりとした光しか残らなかった。

もしその何かが本当の『探査者』であれば、フェンは壊れなかっただらう。『探査者』は情報を求めている。立ち寄ったばかりの恒星系の、唯一のガス惑星が破壊されるのを見ているままのはずがない。重力波レーザーはエプロフェンが知る限り最強の攻撃で、エプロフェン自身も直撃を受けたときの防衛手段を知らない。だが、『探査者』は知っているに違いないのだ。

そもそも重力波レーザーは『探査者』の技術なのだから。エプロフェンは次の準備の為に文明の情報も読んでいた。今度の文明が『探査者』に対抗できるほどの能力を持っているか否か。それを見極めなければならない。

フェンが消失したことは長期的にはマイナスになるかも

しれないが、現時点の文明にはさして影響を与えないだろう。

部屋の中央に、白く半透明で正八面体の物体が浮いている。原子スケールにまで正確な正三角形が八面張られたその物体は透明な球の中でゆるやかに回転している。中に光を反射させて時折様々な光を見せる。

それは、破壊されない限り半永久的に情報を保持できる空間メモリーと呼ばれる代物だった。情報を空間に記述する為、銀河のすべての素粒子の現在位置をプランクスケールで記述してもまだかなりの量を記述できると言われている。すなわち、空間メモリーに記述できる情報量は事実上無限大であると考えてもいいだろう。エプロフェンが知る範囲では、空間メモリーの情報記述限界に達した人間は存在していない。

空間メモリーは『探究者』が太陽系に來襲したときの置き土産だった。『探究者』は、重力波レーザーと空間メモリーという人類には実現できなかった技術と、人類が想像もできなかったほどの荒々しい破壊の傷跡という相反する二つの物を残して忽然と消えた。

どこへ消えたのかは誰もわからない。

ただ、一度と『探究者』による破壊が行われないように、と彼は作業を続ける。

空間メモリーに蓄えられたデータを元に、今回の文明の程度をはかる作業がひたすらに続けられた。

## 六

静かに時が流れている。

ティキとレヘナは地下鉄に乗っていた。

地下鉄はきわめて静かで、駅に停車するときと発射する時の加減速で身体が前や後ろへと引つ張られる以外には、動いている兆候が見られない。車両は四人用の個室で区切られている。今、ティキとレヘナはその四人用を二人で使っていた。個室の防音は完璧で、他の客の話し声が聞こえることも、自分たちの話し声が廊下に漏れることもない。

「個人のプライバシーの尊重がここでは発達しているのね」

レヘナが壁を軽く叩きながら言った。壁を叩いても音はしなかった。

「どんな話をしていたとしても、それが他の人に聞こえる

ことはありません。自動陸上輸送車両と違って、地下鉄は  
「ライバシーを必要とする場所と認識されていますから」  
自動陸上輸送車両は文字通り自動化されているが、個室  
で区切られていなかった。乗る全員が一つの大きな区画に  
入る構造になっている。自動陸上輸送車両はライバシー  
が必要ではない場所と認識されている。ライバシーの尊  
重の為に金を使う代りに、コストを減らしているのが自動  
陸上輸送車両だった。僻地に住んでいる人間しか自動陸上  
輸送車両を使わないからという理由もある。テイキも含め  
て、僻地に住む人間は都市部の人間ほどライバシーに敏  
感ではないのだ。

レヘナの話はテイキの想像を超えていた。あまりのス  
ケールの大きさに鳥肌が立つほどだった。もしその話を又  
聞きで聞いたとしたら、テイキは全く信じなかつただろう。  
だが、テイキは直接に目撃している。その話が本当でなけ  
れば、エプロという惑星に他の人類が降り立つことはでき  
ないに違いない、とテイキは思った。

結局、家から停留所まで歩いている間にレヘナが話して  
くれたのは、情報船団という存在と『探査者』という存在  
のことについてだけだった。それを話した頃に自動陸上輸  
送車両がテイキ達がいる停留所についた。自動陸上輸送車  
両の中で何も喋らずに座っている間に、テイキは自分なり  
に情報船団と『探査者』について考えてみた。だが、それ  
が本当に正しい理解かどうかはレヘナに確認してみなければ  
ならない。

「情報船団とは、結局のところ、『探査者』から人類を守  
る為の手段ということですよ。情報を保持していること  
ろに『探査者』は現れるが、人類史上最大の情報量を持つ  
情報船団は絶えず移動を続けている。『探査者』ですらも  
光速の壁を越えることができない為に、情報船団は『探査  
者』に襲われる心配がない。電波などあらゆる情報が光速  
を超えられない為、情報船団がいる場所をリアルタイムで  
知ることができない。だから待ち伏せもできない」

どこかの駅に止まったのか、テイキは自分の身体がゆっ  
くりと前へと引かれるのを感じた。頭に最も力がかかって  
いるように思えた。レヘナは腕を組んで目をつぶっている。  
地下鉄が駅から発進して加速度が消えた後にレヘナは目を  
開けた。

「だいたいそういうことになるわね。けれど、『探査者』  
が情報船団に襲われる可能性はゼロじゃない。『探査者』



は物理法則による制限の中でのすべての事ができると想定すれば、ラムジェット推進の軌跡や行動予測によって、もしかしたら停留中あるいは停留予定の恒星系を割り出して到達できるかもしれないわ」

「だから、情報船団は広がっていく、ということですね」  
ティキはレヘナが喋り終わってすぐに言った。ティキは自分の脳細胞が活性化しているのを感じていた。視界まで鮮明であるかのように錯覚するくらいだった。手が痛かった。拳を握りしめすぎている。膝の上で両拳は震えている。レヘナはただにこやかにティキを見つめている。

「そう。情報船団は広がっていく。船団は情報収集艦を人類の居住する惑星に送り出し、その情報収集艦をもとにしてそこで新たな船団が作られる。できあがった船団は終わりのない旅に出発し、また情報収集艦を作り出して産み落とししていくのよ。たとえ一つの情報船団がまるごと壊滅したとしても、人類の情報には消えない」

ティキは情報船団が恒星間の深淵を渡り、自らのコピーを増やしながら広がっていくのを想像しようとした。だが、想像できなかつた。小型艇しか見ていないティキには、都市一つ分の大きさの宇宙船が何十も集まって群れをなして移動しているという情景は想像の範囲を超えていた。

息が止まりそうになる。ティキは軽く息を吐いた。

「情報船団というものを存在させなければならなかつたのは『探査者』という存在がいたからで、情報船団というものを成り立たせるのに必要な技術は、『探査者』が太陽系に残さなければ人類にもたらされることはなかつた。すなわち、『探査者』という存在自体が人類を銀河系規模の文明にしたと」

「こそ」

人類は厄災を経験することにより太陽系の枠を飛び出したと言える。宇宙的スケールで見ればその歩みはゼロに等しかつたが、人類は着実に銀河系に広まっていく。二万五千年前に情報船団は出発した。今現在、夜空に見える星々のどのくらいが情報船団の来訪を受けたのだろう。

ティキの文明の記録は五百年前から始まっている。ティキは自分たちがこの惑星で進化したのではないということを知っている。はるか昔、自分たちが植民船に乗ってやってきたことを知っている。中央の唯一の陸地だけが自分たちの住めるように改良されており生態系が豊かだが、極地方には嫌気性のバクテリア以外は存在せず防護服無しで人

間が住むことはできない。それは太古の昔に自分たちの祖先が惑星改良を行ったからだと言われている。だが、それがいつ行われたのかは誰にもわからない。確かめる手段がないのだ。五百年前の地層の放射性物質含有量が異常に高く、非常に分厚い。分厚い地層をくりぬき放射能対策を施してその下の地層を調べようとしても、何故かその下には地層はなかった。その下には完全な混沌に近い土があるだけで、地層と呼ばれるものはない。一説では五百年前に起きた出来事によりそれ以前の地層が破壊されたと言われているが、テイキにはそれが本当かはわからない。

一時期、歴史学者である父親に影響されて地層に興味を持ち、歴史を知る手段としての地層について調べたことがあった。そのときに親父から詳しく話を聞いておけばよかった、とテイキは今更にして思う。そうしていれば少しはレヘナの役に立ったかもしれない。調べた時は父親に物事を聞くのが何故か恥ずかしくて何も聞けなかったのだ。

テイキは、父親の学説が突飛すぎてどこにも受け入れられなかったということを知っている。だが、どんな研究でどんな学説だったのかはテイキは知らない。父親は仕事の話は一切しなかったからだ。幼い頃一度、頭を抱えて悩む父親に向かってテイキは尋ねてみたことがある。そのとき父親は、「おまえは聞いたってわからないよ。父さんの学説が世間に広まるような時期が来たら、そのときになったら教えてやるさ」と言っただけでテイキの頭を撫でた。大きな手のひらの感触は今でもうっすらと覚えている。

「じゃあ、そろそろ本題に入るわよ」  
レヘナがうなじから髪をかき上げながら言う。長くて赤い髪がレヘナの手の動きに合わせて水のように滑らかに動いていた。テイキはポケットから端末を半分だけ出して、小さいディスプレイで地下鉄の運行状況を確認する。あと十五分ほどで図書館の最寄り駅に着くようだ。

本題、とはレヘナの目的のことだった。今までレヘナが話していたのはただの基礎知識でしかない。情報船団や『探究者』のことは目的を理解する為の背景知識であり、まだテイキは目的について話してもらっていなかった。

「私がなぜデータベースへのアクセスを希望しているのか。テイキ、あなたならもうわかるんじゃないかしら」

レヘナがテイキを見つめる。その表情はにこやかだ。興味津々という顔なんだろうか。さっきから、ときどきレヘナは自分を試すような事を言う。それに自分が期待通りに

答えると、とても満足そうな顔で微笑むのだ。その笑顔を引き出す為には努力を惜しみたくない。

「レヘナ、あなたは僕たちの文明がどの程度のものなのか見極めようとしています。僕の家ネットワークでは情報収集が不十分だったのですよね？」

テイキは一度視線を下に向けて、上げた。レヘナは微笑んでいる。

「そうね。ある程度は当たってる。あなた達の文明の程度を見極めるのは、情報収集者としての仕事。文明の程度を見極めた上で協力を依頼し、情報をブレーヴに送らないといけないわ。あとは？」

あとは？ と聞かれてテイキはたじろいだ。テイキの推測はここまでだった。情報船団が新しい情報船団を作るには現地の協力が必要で、そのためには文明のレベルを推測してどの程度協力が得られるのかを判断しなければならぬ、という事はわかる。

「えっと、あとはレヘナの船が不時着したことに関係があるのですよね」

ゆっくりと顔を上げ、目をつぶって考えるが、それ以上何にも思い浮かばなかった。

「まあ、これ以上は推測で答えが出るとは思えないから、私から話をするよ」

テイキは顔を下げて目を見開き耳を澄ませた。レヘナの目をただ見つめた。あまりにも静かな為に、耳を澄ませるときーんという幻聴が聞こえてくる。

「私たちの情報収集艦アイレムは、何者かによって攻撃されたの。この恒星系には惑星が二つしかない。一つはその攻撃と共に消失したわ」

室内の気温が下がったようにテイキには感じられた。レヘナという生き証人がいて目の前で小型艇が空高く飛んでいく所を見ても、テイキはまだ完全には恒星規模を越える話に実感がなかった。自分の経験との共通点が多すぎたからだ。今になってやっと、自分とレヘナが別々の場所で共通に経験したことを発見した。

フェンが一瞬強く光り輝いて見えなくなったのは、アイレムもろとも消失させられたからなのか……。

一体誰が、と思っただけからテイキははっとした。

レヘナは微笑んでいる。その微笑みは真剣味を帯びているように見えた。

「僕たちの惑星の誰かがやった、ってことですか？ けど、

ちよつと待つてください。僕たちの惑星に、対宇宙攻撃兵器なんてありませんよ。そんな技術は持っていません。第一、一つのガス型惑星をまるごと消し去ってしまうような威力のある攻撃兵器を持つている理由がありません。僕たちは五百年間平和に暮らしてきました。僕たちの惑星は一つの大きな大陸と少数の小島から成り立っていて大部分が海ですし長距離射程の攻撃兵器は必要ないん……」

「まあまあ、落ち着いて」

レヘナになだめられて、ティキは自分が呼吸を忘れるほど早口に喋っていることに気づいた。胸に手を当てて一度大きく息を吸う。しばらく肺の中に空気をためてから、吐きだした。気分が落ち着いてくる。

「僕には想像できません。核攻撃より強力な兵器が存在すること自体が信じられません」

レヘナは再び微笑んだ。満足そうな微笑みではない。口元がほころび瞳には柔らかな光が湛えられている。失敗を許容するかのような、苦笑いのような微笑みだった。

「核兵器より強力な兵器なんて、いくらでもあるわよ。コンピュータウイルスとか。質量当たり発生させることのできるエネルギー量が核兵器より大きいのを強力っていうのなら、反物質による対消滅を利用した兵器とかがあるわ」

「けれど、そういうものがあつたとしても、僕たちの惑星にそのような兵器があるとは思えません。最大級の核兵器は大陸のすべての生命を死滅させることができます。それ以上の兵器を開発する理由がありません」

核に関する知識は太古の昔からある。強力な核兵器を作り出すには単に時間と労力のみが必要だった。

「だから、それを調べるの」

レヘナがため息を吐きながら言った。

あ、そうか、とティキは拳で手のひらを叩く。乾いた音が部屋に広がり、壁に吸い込まれた。レヘナが微笑んでいる。今度は満足そうな笑顔だった。

「何の目的でアイレムを破壊したのかはわからないけれど、犯人が必ずこの惑星にいることはわかってる。私が新たな情報船団を作る為には惑星の協力が必要。犯人を突き止めなければ必ずどこかで妨害が入ると私は思ってる」

レヘナは決意を感じさせる凜とした顔で言った。どんな障害が立ちはだかろうとも目的を達成しようとしている表情だ。ティキは同じような表情をどこかで見たことがあると思った。記憶の糸を繰り寄せる。しかし、記憶の糸は絡

み合っているらしく思い出せない。なかなかたぐり寄せることができない記憶にもどかしい思いを感じた。頭の中をかき出して探したくなるようなもどかしさだ。

ティキは身体に加速度を感じた。それとほぼ同じタイミングで、ポケットにある小型端末が信号音を発する。ティキは立ち上がった。少しバランスを崩して前のめりになったが、足をとっさに前に出してバランスを保つ。レヘナは地下鉄が完全に停止してから立ち上がった。

「着きましたね」  
「そうね」

二人の目の前には通路へのドアが開いていた。緑色のタイル張りの通路。ちり一つ落ちていない。タイルは光沢を放っている。ティキはその清潔さを気持ち悪く感じた。二人はその通路を歩いて地下鉄と駅を繋ぐドアへと向かう。ドアはすでに開いており、『第六図書館前駅』という看板がホームの天井にぶら下がっているのが見えた。ティキが前になってホームへと降り立つ。レヘナが降りた瞬間に地下鉄のドアは閉まり、地下鉄は緩やかに発進した。ホーム内に地下鉄の走行音が響く。走行音が遠ざかるにつれて、冷たい空気が地下鉄を追うように流れていく。風はレヘナの髪を揺らめかせるほどだった。

空気の流れが収まると、匂いが漂ってきた。ティキはこの匂いをどこかで嗅いだことがあると思った。嗅いだ瞬間に古めかしいと感じられるような、きれいな埃の匂いに近い。匂いというよりか、香りだった。

唐突に。

ティキは思い出した。あの表情。確かに以前、レヘナの決意の表情と同じような表情を見ていた。

それは失踪した前夜の父親の表情とそっくりだったのだ。ティキはそのとき、父親が失踪するなど夢にも思っていなかった。二人で食べる静かな夕食の時、父親はその表情をしていた。ティキは研究がうまくいっていないから次こそは成功させようとしてそのような顔をしていると思っていた。だが、違っていたことにティキはたっただいま気づいた。

今思えば、あのときすでに失踪する決意をしていたんだ。  
「ティキ、何してるの？」

エスカレーターの手前でレヘナが手を振っている。ティキは自分が足を止めていたことに気づいた。

「あ、考え事していただけです。今行きます」

走り出したティキを確認したからか、レヘナはエスカ

レーターに乗った。ゆっくりとレヘナが上へと上がっていく。彼女を追いかけるようにティキはエスカレーターに飛び乗った。

## 七

レヘナは図書館の入り口に立っていた。

大小様々な円がいくつも組み合わされた複雑な構造物が図書館だった。円柱の側面以外には、直線部分がほとんど無い。様々な色合いの青と緑が組み合わさっている。惑星全体として落ち着いた配色が主流なんだろう、とレヘナは推測した。なんとなく色の選び方がティキの服装に似ていたからだ。

十メートル以上の幅がありそうな入り口の中央の上部に、金属のプレートで『第六図書館』と書かれてある。

図書館の入り口は地上にあった。エレベーターを上りまっすぐに歩いて階段を上ると地上に出た。地下鉄が図書館の真下に走っているというのに地下に入り口がないのは、保安上の問題なんだろうかとレヘナは考えた。地下鉄に乗って訪れる人間もいれば、地上を歩いて訪れる人間もいるのだろう。入り口を一つにすれば盗難防止の為のセキュリティシステムが安くあがる。地上に入り口があるのは、地上から図書館に入る人間の方が多いということなのかもしれない。

青と緑が入り交じった空。爽やかな風が吹いている。さわさわと髪の毛がうなじに触れているのを気持ちよく感じた。

この惑星では、青と緑が混じった空が標準的な空らしい。空は、どこまでも突き抜けるように高い。アイレムで、レヘナは現実と寸分違わぬヴァーチャルリアリティで惑星を体感していたが、現実は何か違っていた。それは実感の有無の違いなのかもしれない、とレヘナは思う。現実では、間違いなく自分が大気の底に居ることを実感できる。

書物の香りがする。どこか懐かしい匂いだった。紙という有機物質が古くなって発する匂い。嗅いだ瞬間にそれとわかる匂い。

どこで嗅いだんだっけ？と、図書館の入り口の柱に片手をついて考える。円柱形の柱は青くて冷たい。ひんやりとした感覚が手のひらへと伝わってくる。

ひんやりとした感触、匂い。レヘナは過去にブレイヴの

書物保存船に一度だけ入ったことがあったことを思い出した。

そこはアイレムがブレーヴから分離する前、情報収集者としての一般教養を身につける為に訪れた場所だった。訪れる全ての文明がデジタルデータで情報を保存している訳ではないということを理解させる授業だったと、レヘナは思う。そのときのレヘナは幼く、あまりにも昔の為にはつきりとは覚えていなかった。何を見たのかは全く覚えていない。船団の入手したすべての書物が収められた書物保存船の記憶は、匂いだけだった。他の船にはない匂いにとまどったことは覚えている。書物の匂いに慣れるまでレヘナは書物保存船に軟禁されたのだった。

ゆっくりと視線を横に移動させると、テイキがカウンターのところで登録を行っているのが見えた。自分の小型端末と図書館の端末を接続して、図書館利用IDを発行してもらおうとしている。もしレヘナが資料を持ち出したくなったらときには僕名義で借りればいい、テイキはそう言った。

図書館は全ての住民に開放されている。書物の閲覧もデータベースの閲覧も自由らしい。この惑星にはまだ書物を読むという習慣が存在している。アイレムやブレーヴでは、書物を読むということはありえないことだった。書物は保存するものであって、読むものではない。内容はすでにデータベースに蓄えられているのだから、わざわざ書物を損傷させる危険性を犯してまで手に取る必要はなかった。柱から手を離し、もたれかかった。今度は背中にひんやりとした感触が伝わってくる。書物の匂いを含むやわらかな風がレヘナの前髪を揺らしている。

「平和ね……」

レヘナは小さな声でつぶやいた。出した声はそよ風に乗って消えていった。

図書館の入り口より前方に広がっている都市の風景を眺める。図書館の目の前はT字路になっている。複雑に円を組み合わせた高層ビルが道路の左右に建ち並んでいた。大小様々な円盤やリングを使って様々な形が表現されている。ある建物は、無数の積み重ねられた円盤の縁にさらに無数の楕円形のリングがつらなり、全体としては直方体に見える。最小構成単位が円で、それで万物が創られているかのよう錯覚するほどに美しかった。

道路には路面から微かに浮かび上がって走行する車両が

高速で移動している。車両はT字のぎりぎりまで速度を落とさない。曲がる瞬間にレハナの方に底面を向けるようにして、ある程度速度を維持したまま角を曲がっていく。音はほとんどしない。どのような防音技術を使っているのかレハナには想像ができなかった。防音技術に関して、惑星エプロの文明はブレーヴが記録していたどの文明よりも進んでいる。

車両は次から次へとビルの谷間の地平線からやってくる。車両の色のほとんどが緑や青系統だった。都市の風景には激しい色遣いというものはない。

レハナには、なぜこの都市に円を複雑に組み合わせる構造物ばかりあるのが理解できなかった。直線で建物を構成した方が安定さを増し、衝撃にも耐えられるのはわかりきったことだ。建物を直線で構成しないのは平和の象徴であるのかもしれないとレハナは思う。絶妙なバランスで成り立つ構造物は意図されない破壊に弱いからだ。最近に大規模な戦争が起きていない証拠なのだろう。

レハナは目をつぶる。風と匂いだけを感じた。

テイキは大きく背伸びをした。目の前の端末には『利用者登録完了』という文字が表示されている。テイキは自分の小型端末から伸びたケーブルの端子を図書館の端末から取り外し、ケーブルを本体に収納させた。

端末をポケットにしまい、後ろを振り返る。レハナが柱にもたれかかっているのが見えた。両腕を組んで目をつぶっている。前髪が風に揺れている。テイキはレハナの方へと小走りで向かった。

「準備できましたよ」

テイキはささやき声でレハナに言った。レハナはゆっくりと目を開ける。背中に反動をつけるようにして柱を離れた。

「ありがとう。行きましよう」

レハナがテイキよりも先に歩き出す。テイキはレハナのあとについて図書館の中へと入る。図書館は外よりもラック上の静寂に包まれていた。二人の足音すらも聞こえない。足音は床に吸収されていた。

「レハナ、図書館ではあまり大きな声では喋ってはいけな  
いみたいです」

「テイキはレハナの横に並んでささやく。」

「わかってるわよ。図書館は初めてじゃないから」



レヘナはテイキの顔を見ずにただそう言って、ひたすらまっすぐ歩いていく。図書館というものは人類文明に共通で存在するものなのか、とテイキは考えた。

レヘナは背筋をまっすぐに伸ばして歩いているので、図書館の中で目立っている。周りにいる利用者はレヘナがそばを通ると少しだけ視線を上げ、その後何事もないうように本に視線を落としていた。惑星エプロの文化ではそのような行為は、対象が目立っていないければされることはない。

実を言うとテイキは図書館は初めてだった。紙という媒体に印刷された情報を見る習慣はテイキにはなかったからだ。学校のネットワークを使えば大抵の情報は手に入る。

それなのになぜ重たい本を借りなければならないのか、テイキには理解できなかった。本自体は見たこともあるし触ったこともある。過去にテイキの父親が文献を調べているのを手伝った。父親の部屋の本棚の前に立って、父親が欲しいと言った本を机にまで運んだことがある。

テイキは書物の発する匂いはあまり好きではない。古い物にはあまり興味がなかった。父親が、本の匂いが好きだと言っていたことをテイキは覚えていた。テイキにはただ何かが朽ちていく間際の匂いとしか思えない。

テイキは朽ちていくという現象が好きではなかった。壊れるというのは何かがきっかけで起こる現象だが、朽ちるというのはきっかけが何もなく、ただ時の浸食に屈していく現象だからだ。どんな物体も朽ちるということから逃れられない。朽ちてしまうことと情報が失われてしまうということが同義な、書物という存在は理不尽なものとしてテイキには思えなかった。その朽ちていく事の象徴が匂いだった。だから匂いが好きではなかった。

レヘナはまっすぐに歩いている。レヘナが歩く先には個室が並んでいる。水色の個室のドアはほとんどが開いていた。個室は二人が入ると狭いくらいの大きさのようだ。机の上にはモニターを備えた情報端末が備え付けられ、緑色のケーブルが何本か机の上で丸まっている。閉まっている場所は左端の二つと右端の一つだけだ。テイキはざっと数えてみた。どうやら個室は全部で十五室あるらしい。

水色のドアには窓がなかった。利用者に完全なプライバシーを提供する為だろう。ドアの左下隅に手のひら大の緑色の円盤が張り付いている。ドアが共振を起こしたときに、それをうち消す為の振動を発生させる機械だった。防音も完全なはずに違いない、とテイキは思った。

ティキは歩きながら上を見上げる。天井は円形に切り取られて吹き抜けになっていた。二階と三階の本棚で本を選んでいる人が見える。それより上の階は高すぎて、ティキのいる位置からは様子が分からない。

上を眺めていると、視界の隅でレヘナが立ち止まるのが見えた。視線を前に戻して立ち止まる。レヘナはティキの方を向いている。ティキに何かを聞きたいかのようにまっすぐにティキを見つめている。

「どうしました？」ティキは小声で聞く。

「この個室って、誰かに監視されたりしてる？」

レヘナは背中のリュックを床に降ろし、ティキの家のネットワークを調べたときに使っていた正八面体の端末を取り出した。レヘナは、親指と中指と薬指で頂点を押さえ、もう片方の手でぐるぐるとそれを回し始めた。ティキはレヘナの質問の意図を理解した。端子もケーブルも付いていない端末を使ってデータベースにアクセスするのを誰かに見られると不都合な事が起きる。

「大丈夫ですよ。僕たちの惑星で個室と名の付くものには完全なプライバシーが保証されています。その中で何をしようと誰も見ることはできません」

レヘナは正八面体の回転を止めた。

「わかった。じゃあ、私調べてるから、その辺で時間つぶしてて。個室に二人入るのって、まずいことなんですよ？」

ティキは回転の止まった正八面体の頂点を眺めていた。ティキは一度レヘナの顔に視線を移動し、動かない頂点へと戻す。頭をかき、もう一度レヘナの顔へと視線を移動する。

「個室に二人入るのが、なぜまずいことなんですか？」

「こういう個室というのは一人で使うことが想定されているんですよ？二人入ったら怪しまれるんじゃないの？」

レヘナがそう言った瞬間、使用中だった左から二番目の個室のドアが音もなく横にスライドした。ドアからは二人の若い男女が出てきた。男は髪の毛が青、服装が緑系であるのに対し、女は髪の毛が緑、服装が青系だった。惑星工プロでは標準的な男女のカップルだ。個室に二人で入るといふ事は、二人の間に何が起こっても他の人間に干渉されたくないという意思表示だった。

ティキはレヘナの方を見る。レヘナはすぐに二人の男女から視線を外しティキの方を見た。口元をほころばせて微笑んでいる。

「ま、どつちみち、私は個室には一人で入るわ。私は私のみの完全なプライベートが欲しいの」

口を半開きにしてティキはレヘナを眺める。レヘナがどのようにして正八面体を図書館のデータベースに接続するのか見てみたかった。端子の無い正八面体でどうやって接続しているのか興味があったのだ。自分の家では努めてレヘナがやっていることを見ないようにしていた。自分はレヘナの協力をしているのだから、そのくらい見せてくれたっていいじゃないか。個室に入れてくれないということには、レヘナが自分の事をまだ信用していないからだろうか。レヘナはまた正八面体を手の中で回し始めていた。ティキには何をしているのかわからなかった。ただ回しているだけなのか。それとも、正八面体にアクセスしているのかもしれない。

どつちにしろ、レヘナがティキの事を見ていないのは確かだった。

「……わかりました。じゃあ、僕はそこで何か飲みながら時間つぶしてます」

ティキは個室からほんの少し離れた場所にあるソファを指さした。ソファの近くにはガラス製と思われるテーブルがある。そこでの飲食が自由であることは最初に図書館に利用者登録をしたときに知っていた。

「了解。じゃ、またあとで」

レヘナは正八面体を持った方の手を挙げ、きびきびとした動作で身体を回転させて個室に向かった。レヘナの身体が全部個室に入った瞬間にドアは音を立てずに勢いよく閉まった。

ティキはドアが閉まるのを見届けてから、きびすを返して深緑のソファの方へと向かった。

テーブルとそれを挟むようにして向かい合っているソファの組は十組以上ある。ソファに座っている人間は二人しかいなかった。その二人はそれぞれ違うテーブルにいて、透明な液体の入ったグラスを片手に、ティキの小型端末よりも二回りほど大きな四角い電子書籍をテーブルの上に置いて読んでいる。

ティキは窓際の席を一つ選んで腰を下ろした。ソファはティキの想像以上に柔らかく、腰が沈みすぎて若干バランスを崩した。

エプロフェンは顔を上げる。

巨大な正八面体の情報の海から意識を切り離れた。

地上の様子を見る。

空中に常に浮遊させてある小型のカメラは、緑と青が多い都市を見下ろしている。音声の入力も受け付けているはずなのだが、音はほとんどしていない。それはこの文明が防音技術に長けた文明であるということの証明の一つだということ、エプロフェンは理解していた。空間メモリーに蓄えられた文明の情報からもそれを証明できた。

複雑に円が絡み合った構造物を好む傾向は今までの文明にないものだ。大陸に点在する都市のどれもが円を基盤とする都市だ。音波という存在が円運動から導き出せる故に円を重宝しているのか、円の存在そのものの完全無欠さに芸術的な感銘を受けているのか、そのどちらでもないのか、エプロフェンには円を利用する理由が解らなかった。

部屋へと意識を戻す。

正八面体は半透明な状態でゆっくりと回転している。

エプロフェンはすでに決意している。空間メモリーには現在の文明が保持している情報を全て書き込んだのである。過去の文明のケースと照らし合わせて、この文明が『探査者』に対抗しうる文明かどうかを判断した。

エプロフェンは立ち上がり、大きく背伸びをする。腕を下げ、指先をまっすぐにコンソールへと向ける。四角い透明なカバーがコンソールから跳ね上がった。コンソールには様々な計器があるが、その中でひときわ目立っているのは、手のひらほどの大きさがある赤い四角いボタンだった。汚れがほとんどなく、光沢すらあった。

『これでこのボタンを押すのも五百回目か』

エプロフェンはコンソールへと歩み寄った。エプロフェンの部屋はすべて自動化されている為、歩み寄る必要など無く、エプロフェンはただ椅子の上に乗って命令を下すだけでいい。だが、この行為だけはいつも自らの手で行っている。自らがきちんと赤いボタンを奥まで押し込むことにしている。

数百万の人間の運命を変えてしまうボタン。五百年間の積み重ねを無に帰すボタン。

自らの意志で、きちんと『押す』ことが重要だった。押すこと、すなわち、それは判断を下したということだから。確かに押したという『感触』が大事だった。

実際には五百年の積み重ねを無に帰すわけではない。も

し無に帰してしまうのならば、次の文明に何も引き継がれないことになる。エプロフェンが必要としているのは『探究者』に對抗しうる文明であり、壊滅的ダメージでも生き残った人間が行う爆発的復興だった。

エプロフェンは赤いボタンの表面を指先でなぞる。指先は何の抵抗もなく表面の上を滑る。一度指先を離す。指の裏を見る。埃はついていない。

ボタンが奥まで押し込まれた。

エプロフェンの部屋は、ボタンが押されても何も変化はない。だが、エプロフェンは、押した瞬間に五百年ぶりに起動した機関が自己診断をエプロフェンのデータベースに送りつけていることを知っている。すべてが正常だった。

エプロフェンは片手で透明なカバーをつかみ、下へと降ろした。かちりという音がして、コンソールのボタンは封じられた。開くのはまた五百年後になるだろう、とエプロフェンは思った。ゆっくりと歩き、中央の椅子に座る。

『まだわからない。データベースから知り得ない情報もある。もしかすると、今回の文明は合格点に達しているかもしれない』

文明が壊滅的状况になり、生存者が一人を切るまで、この文明が合格点に達しているかどうかを判断できない。

『探究者』を模した白い球体を破壊することができれば、エプロフェンの役目は終わることになる。

エプロフェンは椅子の上で両手を組み、組んだ手を額にあてた。

『いまから、試練を、始める』

## 八

ティキの目の前にはコーヒーの入った白いカップがある。紙製の媒体ではなく電子書籍を読む場合にのみ飲食が許可されており、貸し出しカウンターらしきところでティキはコーヒーを注文した。自分の小型端末をカウンターに備え付けられたリーダーに読みとらせ、ソファに戻った。ソファに戻って数分後、湯気をたてたコーヒーの載った台車を押す女性がティキのテーブルにやってきた。女性は営業的スマイルを浮かべながら、「紙の書物を読みながら飲まないようお願いします」と言ってテーブルに音を立てずにコーヒーカップを置き、去っていった。

コーヒーの受け皿には角砂糖が一つと、スプーンがある。

ミルクはなかった。ティキは角砂糖をつまみ、コーヒーの液面すれすれに近づける。立方体の角を液面に触れさせる。角が溶けていき、コーヒーの表面に輪ができた。ティキはゆっくりと手を離す。角砂糖はカップの底へと沈んでいった。

スプーンでゆっくりと、カップとスプーンが当たって音が立たないように慎重にかき混ぜる。コーヒーの表面の中央がへこんでいる。ティキはスプーンを受け皿の上置いてカップを手に持った。カップに口をつけ、ほんの少し飲む。熱い。ティキは顔をしかめてカップを受け皿に置いた。

コーヒーを注文するときに借りてきた電子書籍端末の電源を入れ、コーヒーの隣に置く。過去に何度読んだかわからない、『やさしい天文学のおはなし』を表示させる。

コーヒーを片手に、ほんの少しずつ口をつけながらティキはレハナが検索が終わるのを待った。一口つけるたびにコーヒーはより冷たくなっていた。

その本の文字は全て暗記してしまっている。ティキは映し出される映像をぼんやりと眺めた。主系列星である黄色い恒星エプロフェンズの周りに惑星エプロと惑星フェンがあり、その二つは実際の公転速度とは比べ物にならない速度で回っている。だいたい五秒で一回転だった。くるくると回る二つの惑星の傍らには、小さい子がわかる程度に記号化されたウサギが跳びはねている。閲覧者にポイントされると惑星について解説してくれる仕組みだった。ティキはウサギが語る内容はすべて覚えていたのでそのまま放つて置いた。ただ回転するエプロとフェンを眺めていた。

このあと、レハナはどうするのか。それがティキにはさっぱりわからなかった。ネットワークやデータベースにアクセスして情報を取り出した後、レハナは何をするのか。最終的には情報船団を構築すると言っていたが、具体的には何をするのか。この惑星にアイレムを破壊した存在がいるとして、そのような規模の相手にどうやって立ち向かうのか。

沸点に達した水のように、ティキの内側から疑問点が沸き上がってくる。疑問の泡が決して消えないという点では、沸騰とは異なっている。

ティキは電子書籍端末の電源を切った。ウサギがにっこりと笑って消えた。ソファの上で背伸びをしてから、手に持っているカップに口をつけて一気に飲み干した。

レヘナは顔を上げ、端末の接続を解除した。図書館の情報端末の端子から、正八面体を離す。電磁波による直接リンクは解除され、図書館の情報端末の画面がスタート画面に切り替わる。レヘナは何度も目をまたたき、あくびをした。

たいした成果を上げることができなかった。

図書館のデータベースは五百年分しかなかった。それ以前の記録は完全に失われているらしい。図書館の外部のネットワークも検索したが、どこにも記録はなかった。

両手を頭の上で組んで座ったまま背伸びをする。

今からちょうど五百年前に超自然的災害があったらしい。そのときの災害で人口の九九パーセントが死亡し、既存の建築物はすべて破壊されたらしい。五百年以上前についての信頼できる記述は一つもなかった。どれも推測で、どれも他のものと異なっていた。

この惑星に人が住んでいるのは誰かが植民したからだ、という記述はあちこちに見られた。子供用のテキストにも載っている。だが、いつどうやって植民されたか、という情報は皆無だった。宇宙に関する資料がほとんど無かった。しょうがないか、とレヘナは思う。この惑星の住民が宇宙開発に全く興味が無いのは当然とも言えたからだ。

惑星エプロには衛星が存在しない。宇宙空間に飛び出す意味が存在しない。住民は静止衛星軌道よりも遠くへ行く意味が見いだせなかった。静止衛星軌道では惑星を公転する周期と惑星が自転する周期が一致し、地上から物体が静止しているように見える。人工衛星をその軌道に置けば様々な利点がある。この惑星の場合、それ以上遠くに行つたところでガス型惑星フェンシカ存在しない。ガス型惑星にも衛星は存在していない。惑星上で活動している限り、ガス型惑星の資源を活用しなければならぬ状況は起きえない。エプロにまで持つてくる為に消費する資源が持つてくる資源よりも大きくなってしまふからだ。

第三十二植民船が太陽系を飛び出した頃は約二万五千年前で、情報船団よりほんの少し前だということはアイレムにいたときに調べてあった。そのときにはまだ対消滅機関が完成しておらず、太陽に向かって放射状に配置される無数の細長い反物質精製プラントも当然必要としていなかった。従って、惑星エプロの住民は公転軌道よりも内側に行く必要が生じない。太陽系のように恒星系規模で壊滅してなどおらず、植民船を他の恒星系に送り出す必要もない。

それらを考慮しても、データベースは何か不自然だった。人間は未来よりも過去を嗜好する。過去の出来事である植民船到着という出来事に関して具体的な事が何も存在しないのは不自然だとレヘナは思った。少しは推測などがあるのならわかるのだが、推測すら存在していない。

「意味わかんない」

レヘナは口に出して言った。テーブルに肘をついたまま正八面体を回す。

文明のレベルに関しては判断できるほどの資料が集まった。テイキが言ったとおり、この惑星には核兵器よりも強力な兵器は存在していない。アイレムと惑星フェンを消滅させた原因である重力波レーザーは、理論の段階でも存在していなかった。この文明の現在の力では惑星一つを消滅させることは不可能だった。

「アイレムがどちらの方向から攻撃を受けたのかエズベルが言ってくれば良かったのにな」

胸が苦しくなる。

エズベルの名前を口に出した途端、言いようもない悲しみがレヘナを襲った。自分にはどうしようもできなかったのに、とレヘナは左右に首を振る。生き残らなければ良かった。そうすればエズベルの死の責任を背負う必要は無かった。

思い描いたエズベルの顔は笑っている。チョップしたあとの顔。「またやられちゃった」と思っているのが一目で分かる顔。悲しみの影はまったく無い、ただ期待に輝いている顔だ。青い瞳がレヘナをまっすぐに見ている。

その瞳が、黒に変化した。

レヘナは我に返った。握りしめすぎて手のひらにはつめの痕が赤く付いている。頭を軽く叩いて目を何度も瞬く。

「テイキにいろいろ聞かなきゃ」

椅子から立ち上がり、左足を中心に半回転した。

レヘナは、アイレムが消滅したことと、この惑星の歴史が五百年しかないことに、何らかの共通点があるような気がしていた。アイレムが消滅し、惑星フェンが夜空から消えて無くなったというのに、だれも関心を持っていない。ネットワーク上のどこを探しても惑星が一つ消えたことについての記述はない。

まるで情報操作が行われているようだ、とレヘナは思っ

一度深呼吸して、目をこする。

指先でドアの閉閉スイッチを押す。



カウンターで二杯目のコーヒーを注文しようと端末に触れようとしたとき、テイキの視界の隅にレヘナが見えた。

テイキはコーヒーの注文数を一つから二つに変えた。

テイキがカウンターからソファに戻るのと、レヘナがソファにやってくるのはほとんど同時だった。ソファに座り、テイキはあくびをした。レヘナの方を見ると、レヘナも大きなあくびをしているのが見えた。レヘナが微笑む。

「テイキ、暇だったみたいね」

「何か情報得られました？ あくびをしているところから見て、あんまり成果がなかったように見えますけど」

二人はささやきよりもやや大きな声で会話をしていた。ソファが二つ向かい合っている場所は、図書館でもある程度の音量の会話が許されている場所だ。それはテイキが時間をつぶしている間に発見していたことだった。ソファの側面に半球の物体が備え付けられており、それが、発生している音波の逆位相の音波を発射して中和している。

レヘナはテーブルの上に正八面体を置いた。正八面体から漏れる乳白色の光が透明なテーブルにほんの少し反射していた。

「一応データベースの情報全部と、ネットワークの有意な情報全部を記録しておいたわ。検索かけてみたけど、テイキの言うとおり、アイレムを攻撃できるような技術レベルはこの文明には存在しないみたい」

「でしよう？ 惑星一つを消失させることのできる兵器が

この惑星にあるわけがないです」

「けど、実際に惑星は消滅してる」

「ですね……。ん？」

テイキはレヘナの喋った言葉にひっかかるものがあった。レヘナは何気なく言ったが、さっき実はとんでもないことを言ったのではないか。テイキはそう思った。

「ちよつと待ってください」テイキは空になったコーヒーカップの底を見ながら考える。底にはほんの少し茶色が残っていた。

「さつき、レヘナ、あなたは、データベースの情報全部とネットワークの有意な情報全部を記録したって言いましたよね？」

「言ったわ」

テイキはゆっくりと考えた。「ごぶしを額に当てて考える。

『データベースの情報全部とネットワークの有意な情報全部』という表現に含まれたデータ量の巨大さを推測しよう

とした。

「で、それを、どこに記録したのですか？」

こぶしにしていた手を開き、手のひらを額に当てる。ティキはなんとなく予想がついていた。だが、それはありえないとも思った。もしそれが実在するのなら、いや、もしそれが目の前にあるのだとしたら、それは情報船団の技術レベルと惑星エプロの技術レベルの差はティキの想像以上に大きいということになる。蟻の巣とこの図書館との建築技術レベルの差以上だろう。

レヘナが手をゆっくりと動かす。手はティキの予想通りの場所へ移動した。手は物体の二つの頂点をつかみ、持ち上げた。レヘナの口から、ティキの推測通りの言葉が出た。

「これ」

正八面体だった。

「ちよっと、触ってもいいですか」

「いいわよ」

レヘナから正八面体を受け取る。触った感触はプラスチックのようだった。指を滑らせることができる。内側から漏れるように乳白色の光を放っている。重さも、材質がプラスチックの物体とあまり変わらない。仮に地面に落としたとしたら、砕けるのではなく割れるというイメージがある物体だ。上下に振ってみたが、音は何もしなかった。本当にこの中に図書館の全てのデータが保存されているとティキには信じられなかった。

台車がやってくるのが見えた。台車の上には二つのコーヒークップが置かれている。台車を押している女性は最初にコーヒーを持ってきた女性とは違う女性だった。茶髪の毛の先が肩近くで外側にはねている。図書館の緑色の制服を着ている。ティキはそれに目をとめると、レヘナに正八面体を返した。ティキは台車を押してくる女性に見覚えがあった。

「注文のコーヒー二つです」

女性はテーブルの横に台車を止め、湯気の立つコーヒーを受け皿ごとテーブルの上の一つずつ置いた。カップを二つ置いた後、角砂糖とスプーンをそれぞれの隣に置く。ティキはその様子をずっと眺めていた。

「あの、ミルクももらえないかな、ジーンズさん」

ティキが名前で呼びかけると、その女性は動きを止めた。手に持ったスプーンを受け皿に触れさせたまま、ゆっくりとティキの方を見る。営業的なスマイルがティキの顔を見

た途端に崩れた。

「あら、ティキじゃない。こんなところで会うなんて珍しいね。図書館なんて来ない人でしょ」

そう言いながらジーンスはティキとレヘナの顔を交互に見比べる。見比べるときにジーンスとレヘナの目が合ったようにティキには見えた。お互いに微笑んでいる。

「はじめまして。ジーンス・SW12と言います」

「はじめまして」とレヘナ。

ジーンスはティキの学校のクラスメイトだった。惑星エプロには義務教育の為の初等、中等、高等の教育機関があり、ティキは高等教育機関で学んでいる。単位制で、少々の必修科目はあるが基本的に選択科目は個人の裁量に任されている。そのため、クラスメイトだからと言って頻繁に顔を合わす訳ではない。しかし、ジーンスは何かとティキと選択科目が一緒になっていた。単なる偶然なのか、趣味がティキと似ているからなのか、理由はティキにはわからない。同じ教室にいたことが多かったので、出席確認をしたときにティキはよくジーンスの名前を聞く。見かけたら挨拶をするという程度の関係だったが、それはティキの中では大きい関係だった。ティキに挨拶をする人間は学校の中にはほとんどいないからだ。

耳の辺りで短く切り揃えた髪の毛は青い。青色の中に若干の緑が混じっている。空の色に似せた最近流行のナチュラルブルーと呼ばれる色だ。

最後にジーンスを見たのは四日ほど前の教室で、そのときにはジーンスは髪の毛にフィールドグリーンと呼ばれる緑色の上に黄色のメッシュを入れていた。ティキは教室の一番後ろから、教室の途中で四角い端末を机の上でくると回すジーンスを見ていた。端末は面白いように回転していて、ティキも自分の机の上で試してみたが、ジーンスがやるようには回らなかった。

ジーンスは角砂糖大の小さなミルクのパックをティキのコーヒーの受け皿に置いた。台車からさらにもう一つのパックをつまみ上げる。

「あなたも要りますか？ ミルク」

「いや、いらナイわ」

「わかりました」

指でつまんだパックを台車に戻しながらジーンスは言った。空になっているティキの一杯目のコーヒーカップをもう片方の手でつかみ、持ち上げる。そして言った。

「テイキはちよつと変わってるけど、いい人ですよ」

テイキはミルクのパックを親指と人差し指でつまんだ。パックを開き、コーヒートの表面にゆっくりと注ぐ。注ぎ終わってふと顔を上げると、レヘナとジーンズが自分のことを見ているのに気づいた。二人の視線の先はテイキのコーヒードッグだった。

「どうしました？」テイキは二人に聞く。二人は顔を見合わせて、軽く微笑んでいる。

「いや、私は君がミルクをどうコーヒートにいれようと気にしないわ。私はただの図書館のバイトだから」

「私も気にしない」

ジーンズは台車に手をかけた。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

テイキはどういう状況なのか、なぜ二人で微笑んでいるのかわからないまま、二人の顔を交互に見ていた。

ジーンズが一步を踏み出した瞬間。

テイキは図書館の雰囲気が変わったのを感じた。高位の静寂に包まれていた図書館にどこからか喧嘩があふれ出してきていた。消音装置で消しきれない音がどこかに存在するらしい。テイキはあたりを見回して音の位置を探る。何が鳴っているかわからないが、何かが鳴っているのが解る程度の小さな音だった。ジーンズも同じように顔を動かしている。レヘナは図書館の雰囲気の変化には気づいていないらしく、砂糖を受け皿に置いたままコーヒートを一気に飲み干そうと、手に持ったカップを大きく傾けていた。

テイキは音源を一つに特定できなかった。図書館全体が何かの音に包まれている。音源は複数ある。その複数のどれか一つでも特定しようと、テイキは目をつぶって耳を澄ました。

「どうしたの？」

受け皿に軽いカップが当たるような音とともにレヘナが聞く。テイキはレヘナの問いには答えずに、耳に手を当てていた。

「何、これ？ 何か音がしない？」

「静かにしてください、レヘナ」

音は次第に大きくなっている。テイキは目を開け、テーブルにあるそれを凝視した。

図書館の電子書籍端末から音が出ていた。切ったはずの電源が入っており、そこにはさっきまで読んでいた天文の文は表示されていない。端末の画面は乳白色に光っている。

その色はレヘナの正八面体と同じような色だった。

「一体、何が……」ジーンスはあたりを見回しながらつぶやいていた。ティキも周りを見回す。あちこちから乳白色の光が放出されている。ある人が手に持っている個人用の端末や、電子書籍用の端末、コーヒーを注文した図書館の端末、ありとあらゆるディスプレイ付きの端末から光と音が放たれていた。

ティキはズボンのポケットから自分の小型端末を取り出した。ティキの端末も乳白色に光っていた。ボタンをいじってみるが、どんな操作も受け付けない。

「ジーンズさん、これは何かのイベントですか？」

否定されることはわかりきっているのに、ティキはそう尋ねていた。通常、図書館という施設は突発的なイベントを行う場所ではない。こんな状況は異常だった。ティキはこれがイベントであって欲しいと強く願った。

ジーンズは首を横に振りながら自分の小型端末をいじっていた。ジーンズの顔が乳白色の光に照らされている。レヘナは正八面体を手にとっていじっている。

やがて、漏れていた音が理解できる音声へと変化した。低い男の声だった。

『我は五百年間、この惑星に広がる文明を観察してきた』ジーンズは自分の端末の側面にある音量つまみをいじっているが、音量はまったく変わらないらしい。ジーンズは端末の側面を叩き始めた。手のひらと端末がぶつかりあう音が満ちた。ジーンズと同じように端末を叩き始める人が増え始めた。床に端末を叩きつける人もいた。

男の声が大きくなってくる。ティキはただその声に耳を傾けた。レヘナはティキよりも真剣な顔つきで聞いている。『我、この大地に住む者の管理者。我は今、この大地に存在するすべての電子機器を掌握した。我の言葉はこの大地に住む者全員が聞いている。では、この文明の成績を発表しよう……』

次第に喧噪が収まってきた。何をしても端末の制御を回復できそうにないと悟ったのか、端末を叩いたり投げたりしていた者は、相変わらず乳白色の光を放つ端末をただ呆然と眺めている。その場にいる全員が、端末の光を眺めていた。ジーンズは自分の端末を投げ捨てるように台車の上に置いた。その衝撃で台車からコーヒーのカップに入っていたスプーンが落ちた。

静かな空間に、金属音が鳴った。

床から空中へと拡散していく金属音には、誰も注意を払わなかった。

「こいつよ……。こいつがアイレムを消したに違いないわ。電子機器全てを掌握する技術なんて、データベースやネットワークには載っていない。存在すら示唆されていない。ブレーヴにもそんな技術はないわ。一体、こいつは何者なの？」

レヘナが両手で持っている正八面体の色が変化していた。乳白色の光が薄れていき、半透明になる。半透明な材質の内側から様々な色の光が漏れていた。紫から赤へと変化していき、色が無くなり、赤から紫になり色が消えるというのを繰り返ししている。レヘナは脇を締めて肘を折り曲げ、胸の前で指をせわしなく動かしている。指は正八面体の表面にいたり離れたりしている。レヘナは目をつぶっていた。

テイキはレヘナに声をかけようと思ったのだが、やめた。テイキはただ男の声に耳を傾けた。

声は図書館全体から聞こえた。声には低い振動音が混じり、テーブルが小刻みに震えている。無数の音源が一つの無指向の音源のようになっていく。場所を特定できない音はテイキには気持ち悪かった。音が拡散してしまう音源はテイキ以外の人間にも嫌われており、あまり使われていなかった。

『極端に劣っている箇所はない。全体的にバランスの良い文明だと言える。音波の操作の技術はすばらしい。我の知るどの文明よりも高度だ。だが、この文明は耐久性が足りない。大きな戦争を一度も行っていないからだ。戦争は軍事技術を発達させる。この文明に対する私の結論は……』

こいつは何を言っているんだ。意味が分からない。電子機器を掌握？ そんなことできるわけじゃないか。何かのはつたりが決まっている。それに、文明の成績などというものをなぜ発表するんだ。何様のつもりなんだ。こいつは何の目的でこんなばかげたことをしているんだ。

テイキは電子書籍の端末と自分の個人端末を裏返した。乳白色の光は透明なテーブルを通過して床で反射していた。二つの端末からの声はくぐもった。ふと顔を上げると、レヘナが正八面体から顔を離して真剣な顔でテイキの方を見ている。

「何かわかりましたか？ このわけのわからない狂人について。一体、どんな意図でこんな茶番を演じているのか、

僕にはまったくわかりませ……」

レヘナが人差し指を突きつけてティキの言葉を遮った。

「ティキ、静かにして。逆探知されないように極めて慎重に探っているとはいえども、私に何の情報も漏らさないとするのは信じられない。技術レベルはこの惑星のレベルを超えてる。しばらく様子をみましょう」

レヘナはそう言っつて、ティキが裏返していた二つの端末をひっくり返して元に戻した。

ティキは元に戻された自分の個人用端末を手を取った。

乳白色の光は最初よりも強くなっているように感じられた。ティキは右手で強くにぎり、何も表示されていない端末を凝視した。ティキの手は強くにぎりすぎて震えていた。

『結論。我は管理者の名の下にこの文明を破壊する』

図書館全体がどよめいた。大声を出す者、笑い出す者、壁に端末を投げつける者、さまざまな者がいた。張りつめていた空気がはじけるとともに静寂は破れ、あたりは緩やかな喧噪に包まれる。

ティキはにぎっていた手をゆるめた。手のひらに端末の重さを感じた。息を大きく吐きながらテーブルの上に端末を置く。テーブルとの距離の目測を誤ったからか、端末はテーブルとぶつかり音をたてた。音は喧噪の中ではあまり目立たなかった。ティキは胸に右手を当てて深呼吸をする。

冗談だったのか、とティキは思った。文明を破壊するというのは、誇大妄想の産物以外の何物でもない。一つの文明を破壊するのにどれだけのエネルギーが必要かをこいつは考えていない。最大級の核兵器を使用するとしても、材料を集めることは不可能に近いだろう。高濃度に濃縮したウランを個人が得ることはほぼ不可能だからだ。

惑星全ての電子機器を掌握できる技術を持っていることが仮に真実だとしても、だからと言っつて核兵器を所有しているとは限らない。もしかすると、この図書館内端末のみを掌握したのかもしれない。それならば高度なハッキング技術を持つていればできる、とティキは考えた。

ティキはあたりを見回した。大声を出していた者は深呼吸をし、壁に端末を投げつけていた者は壁にゆっくりと歩み寄り、落ちた端末を拾っていた。図書館は急激に元の状態へと戻っつていった。

ほとんど全員が、端末の乳白色の光に気にもとめず、端末は使えないのではなく、使わないのだ、という意思表示をしていた。電子端末をテーブルや床に置いて、まわりの

人たちは書籍へと向かっていった。

テイキは、ほとんどの人間が自分と同じ考えをしたということを理解した。ジーンズはいつの間にかテイキ達の方からいなくなっていた。ジーンズはすでにカウンターの方において、台車を押して遠ざかっているところだった。

静けさが最初の状態に戻った。喧噪は収束していた。

「まったく、何を考えてこいつはハッキングしているんだか。僕にはわかりません。さっさと端末の制御を返せって感じですね。」

テイキは笑いながらレヘナの方を見る。レヘナは相変わらず真剣な顔つきだった。

「テイキ、あなたは事の重大さをわかっていないみたいね。この図書館にいるすべての人間もそう。もしかすると、この惑星に住むすべての人間がそうなのかもしれない。」

「一ヶ月の猶予を与えよう。一ヶ月後、我は首都上空に浮かばせた白い球体から攻撃する。滅びの運命に逆らいたくば、我の使者たる白い球体を破壊せよ。球体の攻撃能力を削ぐことができたのなら、循環は断ち切られる。」

男の声が言った。だが、もうほとんどの人間が聞いていなかった。誰もその声に耳を傾けていなかった。傾けているのは、レヘナとテイキくらいだった。

男の声は続ける。

「我は知っている。最初にこのことを本気にしないということ。今までの文明のほとんどがそうだった。心のどこかでは本当にそんなことが起こりうるはずがないと思っている。そこで、我はこれが真実であり、現実であり、攻撃して球体を破壊することのみが、滅びを回避する道だということをお教える為に実力を使用する。今から十秒後に、ある一つの図書館に攻撃を仕掛ける。その図書館の崩壊の様子を眺め、滅びへの道を回避する手段を講じよ。」

レヘナが立ち上がった。テイキはその様子を顔を上げて眺めていた。レヘナは正八面体を顔を持っていき目をつぶっている。

「どうしたのですか？ どうせはったりですよ。僕たちの文明は武器の所持は認められていません。爆弾だって製造した瞬間に逮捕されます。核兵器は個人が用意できる代物ではありませんし。」

「テイキ、逃げるわよ。」レヘナはテーブルに身体を乗り出すようにして手を伸ばした。テイキの手をつかむ。そのまま引つ張り上げる。レヘナは走り出した。テイキは腕を引つ



張られて転びそうになりながら、テーブルの上に置いた個人端末を取ってあとに続いた。

ティキは体勢を立て直したあと、レヘナに併走した。レヘナの顔はまっすぐに図書館の出口に向けられている。前方は外の光が差し込み明るい。個人端末をポケットに入れる。

「どうしたんですか？ 急に走り出して」ティキは走りながら聞いた。図書館の出口は目の前だった。

「ふせて！」

レヘナが急に視界から消えた。腕が強い力で下に引つ張られる。ティキは膝を折って倒れた。視界に一瞬、レヘナの顔が映った。ティキはレヘナの顔を見ようと目を動かそうとした。

上の方で、腹に響くような大きな衝撃音。

低い衝撃音の次に、地鳴りに似た音。きしむような音。砕かれるような音。

図書館の静寂は完全に失われていた。人の叫び声も聞こえる。何かが落下して床にたたきつけられる音が聞こえる。硬い物や柔らかい物、さまざまな物が落ちる音だった。紙がめくれ上がる音が、怒号が、悲鳴が、いろいろな音が、ごちゃ混ぜになってあたりに満ちていた。音はティキの腹に響いた。

匂いも酷かった。埃の匂い、木の匂い、何かが焼ける匂い、本の匂い、ありとあらゆる匂いが混ざっている。そこには、嗅いだことが無い為に形容できない匂いも含まれた。ティキは顔を上げようとした。

「顔は上げないで」レヘナに頭を押さえつけられた。額が床に当たって痛い。ティキには何が起きているのかわからなかった。

レヘナは、うつぶせに倒れた状態で、ティキの頭を押さえつけていた。上半身をひねり図書館に起きている出来事を眺めた。

はげしい喧噪の中で、あらゆる物が崩壊していた。吹き抜けを通じていろいろな物が降っている。一階にさまざまな物が溜まりつつある。瓦礫、本、人間。血も降っていた。人々は逃げまどうことすらできず、ただ硬直していた。立つたまま瓦礫に頭をぶつけ、赤いものを散らしながら糸の切れたマリオネットのように倒れていく。倒れた人の上に埃や本が降り注ぐ。床を這うように埃が舞う。さらに血しぶ

きが降りかかる。ほこりっぽい匂いと生臭い匂いがたちこめている。建物全体から低い振動音がしていた。

右手でテイキの頭を押さえつけたまま、左手で背中のバックパックを探る。目的の物を探り当て、取り出す。それは銃のかたちをしている。左手がひんやりとする。

人間相手に使う状況じゃなくてよかった、とレヘナは思う。

左手の親指で銃の後ろの安全装置を弾くようにはずす。つめに少し痛みが走る。そのまま親指の腹で銃の側面をさすり、波数ベクトルを矯正しておく。

頬にばらばらと何かが当たるのを感じた。上を見上げる。両手を広げたくらいの瓦礫が落下してきていた。

肘を伸ばし、手首を返して銃口を上に向ける。いびつな瓦礫の中心部分を狙い、撃つ。刹那、瓦礫は消え、大量の粉が降ってくる。レヘナは目をつぶった。まぶたに霧雨のような感触。ある程度収まったところで目を開け、銃を持ったまま手の甲で顔を拭く。レヘナが手に持っている銃は、振動粉碎銃と呼ばれ、制御した音波を放って標的を粉々にする銃だった。物を発射するわけではないので、反動がない。音は空気の密度変化により伝わる。振動粉碎銃は、空気の密度をある程度変化させ、物体の気圧に抗する力を自壊する方向へと持っていく。それに加えて、音波の当たった物体を強制的に振動させ共鳴現象を利用して物体を粉々にする。

レヘナは右手をテイキの頭から離れた。立ち上がり、テイキの手をつかみ引つ張り上げる。テイキはずいぶんと重かった。膝に力が入っていないようにレヘナには思えた。テイキの青い服には塵と赤い点がついていた。手を引つ張って出口へと歩く。走った方が危険な気がしたからだ。走って不意の落下物の危険にあうよりも、注意深く歩いて確実に粉碎した方が安全性が高いようにレヘナには思われた。

「この惑星の人間は平和ぼけしすぎよ……」

レヘナはうんざりしながら呟いた。

テイキは黙ってついてきている。レヘナは首を横に振り、降りかかった瓦礫の粉を落とした。銃を持ったまま左手で髪をかき上げると、茶色や白の粉が床に降った。

レヘナは頬に風を感じた。レヘナのそばを一人の女性が走り抜けていった。血だらけの図書館の制服を着ていた。その女性は出口へと向かっていった。

ゆつくりと、スローモーションのように、その女性の上の天井が崩れた。ティキが何かを叫んだ。だが、まわりの轟音のせいでレヘナにはよく聞き取れなかった。ティキが走り出した。レヘナの手を振りきってその女性の方へ走っていく。出口からの光で逆光になった女性の影にティキの身体が重なっていく。間に合うはずがないとレヘナは思った。走っても無駄だとも思った。振動粉碎銃の射程圏外だった。レヘナも走り出した。

ティキに死んでもらうわけにはいかない。エズペルのように、何もしないまま死なせてはならない。

天井からの瓦礫は、走っている女性の頭へと落下していく。瓦礫はほんの少し回転しながら落ちていく。ティキが走りながら手を伸ばしている。レヘナは右手で銃の側面をさすり、波動のベクトルを調整する。左腕をまっすぐのばし、銃口をティキの背中に合わせる。

レヘナがティキの背中を撃ったとき、女性の頭に巨大な瓦礫が衝突したとき、図書館が崩れ落ちはじめた。

耳をつんざく轟音。図書館の一階を構成する全ての支柱が崩れ、天井がそのまま落ちてくる。調整された音波の塊を受けたティキは、出口の方へと吹き飛ばされていった。図書館の制服の女性は床に倒れていた。

一階が小さくなっていく。上の階が降りてくる。すべての音が混じり合い、一つの轟音になっている。無数の瓦礫、粉。煙。レヘナは銃の側面を右手でさすり波数ベクトルを調整し出力を最大に上げた。立ち止まる。出口までは普通に走っても十秒くらいかかる。崩れ落ちる天井を粉碎しつつ走るとさらにかかるだろう。図書館が崩壊して一階が消えて無くなる前に、出口に行けそうになかった。腕をまっすぐ上に伸ばし銃口を上に向ける。半径二メートルの物体を粉碎できる状態で、限界まで出力を高めた銃に右手を添える。上を見上げる。天井が迫ってきている。立ち膝になる。引き金をオートに切り替える。

できるかしら。

息を吸う。埃っぽかった。すべてが灰色の世界。口の中で砂の味がする。五階以上ある図書館の瓦礫が、スローモーションのように落下してくる。

レヘナは撃った。瓦礫はレヘナの頭上二メートルで粉に変わる。粉がレヘナの身体に降り注ぐ。次々と落ちてくる灰色の雨。砂が目に入り痛い。レヘナは顔を下げる。頭に当たった粉が流れ落ちて、レヘナのいる床に山を作っている。

た。膝から下は完全に埋まっている。レヘナは目をつぶる。手を真上に挙げたまま。エネルギーが尽きるまで銃は発射を続ける。

レヘナは下半身に圧迫感を感じていた。冷たい。体温を奪われるような冷たさ。砂が腰の近くにまで達したということだった。

砂は、どこまでも溜まっていく。

レヘナはただ銃を上に向け続ける。

「テキキは助かったかしら」レヘナは目をつぶって、小さく呟いた。

## 九

エプロフェンは、首都上空四キロに浮かぶ白い球体の各種センサーを利用し、人工衛星を中継して、第六図書館の崩壊を眺めていた。範囲をある程度収束させた重力波レーザーは図書館の四階付近に命中し、命中した箇所は潮汐力で粉々になった。

可燃性の物体が建物内部で爆発した。爆発は上の階へと次々と波及していった。四階が崩壊したことにより建物全体のバランスが崩れ、五階から十五階までが、四階があった場所に向かって落ちた。それらは四階の床、つまり三階の天井に衝突し、耐久力を失った建物は完全に崩れ落ちた。土砂があたりにまき散らされ、第六図書館のある都市では交通が麻痺していた。土砂があることに気づかずに進んでいた貨物車両は、土石流に巻き込まれて消えた。

その跡地に残ったのは、瓦礫だけ。瓦礫は文字通り山になっていた。山のまわりにはもうもうとした砂煙が立ちこめている。

『生きている人間はいないだろうな』

全部で八十七の図書館にいた人間のうち、警告を本気に受け取って逃げ出した人間は五人だった。やはり実力行使をある程度行わなければ信じることができないのだ、とエプロフェンは思う。

エプロフェンとしては、自分の球体を破壊してもらいたかった。今回の文明は『探究者』に対抗しうる文明ではないと認定したが、もしかするとその判定は間違っていたのかも知れない。間違っていれば、また五百年待たなくても済む。

観測機器が地平線から飛んでくる物体を捕捉した。エプ

ロフエンも注意をそちらへ向ける。

二十発のミサイルが、まっすぐに球体の方へと向かっていった。

エプロフエンは人工衛星を使って発射場所を特定する。首都から少し離れた郊外の軍の施設から発射されたものだった。飛んでくる速度から逆算したところ、図書館が攻撃を受けた数秒後に発射されたものだということが判明した。

『意外に行動は早いな』

撃つた人間は迷ったに違いない。正体不明の物体に対して闇雲に攻撃していいのかどうか。情報が集まるまで何もしない方がいいのかどうか。自分の指令一つで攻撃できる立場の人間は、一体どのような心境だったのだろうか。エプロフエンにはわからなかった。

『図書館の崩壊が一押しとなって発射ボタンを押したのだろう。最後には論理よりも感情が優先したのだ。人間とはそういうものだ』

エプロフエンはわからないなりに推測した。

ミサイルは見事な直線の軌道を描いて向かってきていた。ミサイルの轟音が近づくにつれ、球体の自動防衛装置が働き始める。球体の中心部で精製された重力波は、球体表面にある無数の微小突起を波源として広がっていき、ポテンシャルの壁を作る。

球体表面から五十センチメートルの場所に、重力場の不連続面を作り出す。全ての波長の光を反射する面に覆われた球体は、完全な鏡になった。ミサイルの姿が球面に映り込む。

最初に二発のミサイルが爆発した。その爆発が大きく広がる前に次々に後続のミサイルが爆発する。空に連続的な爆発音が響く。首都のビル群に影が落ちる。重力場の不連続面にぶつかって爆発したミサイルは、大量の運動エネルギーを持った破片をまき散らした。そのどの破片の運動エネルギーも、白い球体を作り出した重力場の不連続面を乗り越える為のポテンシャルエネルギーより低い。破片は不連続面で弾性衝突し、跳ね返る。爆発により生じた熱により融解し、燃え尽きた。

光と音が徐々に消えていく。青緑の空に波は吸収されていった。

『本気で来い。都市のひとつやふたつなくなるくらい、どつてことはない。考えられる最高の軍事技術を使い』

そう、エプロフェンは思った。

通常攻撃でこの球体を破壊できるのなら、太陽系での悲劇は起こらなかつたはずだ。核兵器でダメージを与えられるのなら、我々は太陽系を脱出する必要はなかつたはずだ。エプロフェンは球体から眺める。地平線の彼方まで首都は広がっている。緑や青を基調にした建物の為に、地平線付近で色は混じり合い、草原のように見えた。

どこまでも続く草原。

この文明が青や緑をベースにしている理由がエプロフェンはわかつたような気がした。

『都市を空から眺めたとき、いや、惑星を宇宙から眺めたとき、緑の惑星に見せる為ではないだろうか』

エプロフェンは銀色の部屋の中で、空間メモリーという巨大な正八面体の前で、正八面体が織りなすデータの光の乱舞を眺めながら考えた。光は空間メモリーの内側で何度も反射され、反射されるうちに位相が揃っていった。透明度溢れる光はエプロフェンの顔に照らしつけている。

テイキは目を覚ました瞬間、鼻をこすった。

鼻がかゆかつた為に目を覚ましたようなものだった。鼻にはほこりや砂やらが入り込んでかゆかつたのだ。気の済むまで鼻をこすった後、テイキは自分が仰向けに寝転がっていることに気づいた。自分の視線の先には空が広がっている。青緑色の空にはゆるやかに雲が動いている。空はやけに高かつた。

背中にじんじんする痛みを感じた。ゆっくりと上半身を起こす。

廃墟が広がっていた。

テイキは図書館の道路を挟んで向かい側のビルの角にいた。細長い道路標識がテイキの左に存在している。瓦礫はテイキのところまではない。だが、図書館があつたはずの場所には、瓦礫の山が築かれていた。

左腕は真っ赤に染まっていた。手の甲をざっくりと切つてしまつたらしい。もう血は止まっていたが、傷口は泥と灰で黒ずみ、触れば今にでも出血が起こりそうだ。

左手を地面につけて立とうとしたが、肘に痛みが走り体勢を崩す。頬に道路の冷たさを感じた。埃があたり一面に立ちこめ、テイキはむせた。首を振り、右手をついて起きあがる。

ゆっくりとした風がテイキの頬を撫でる。空気は何故か

爽やかで、気持ちよかった。

辺りは静まりかえっていた。崩壊時に舞い上がったはずの埃も、中にいる人間を焼き尽くしたはずの炎も見えない。きれいに空の向こうが見える。

十五階建ての図書館はビルの中では小さかった。だが、崩れたことでできあがった空間は巨大だった。

見えなかった物、建物の向こうにあるビルが見える。ビルは緑と青色のグラデーションがかかっている。

ジーンズの頭に何かがぶつかったのをティキは鮮明に覚えていた。ぶつかってジーンズは、ゆっくりと回転しながら、人形のように倒れた。手をいくら伸ばしても届かなかった。時間はものすごくのろかった。だが、ぶつかった瞬間に、せき止められていたものがあふれ出したかのように時間は急激に流れた。その時間の流れはあまりにも速すぎ、ティキの認識できる限界を超えた。

気が付けば、ここにいた。

直角に近い角度に折れ曲がった車両。いたる所に飛び散っているガラスの破片。なんだかわからない青い粉末の山。瓦礫を必死に取り除く女性、膝をついて頭を抱えている初老の男性。たくさんの悲しみを湛えた顔。

すすり泣きや泣き叫ぶ声が辺りに響いていた。

自分自身に何が起こったのかはよく分からない。背中を激しく押された感触はあったが、それが何の感触で何を意味していたのかなど皆自分からなかった。

ジーンズの頭に何かがぶつかったことだけが、鮮烈なイメージとして存在している。

瓦礫がぶつかり、その衝撃で頭蓋が陥没してゆくのでさえイメージできる。あれでは助からない、そのときはティキは変に冷静にそう考えたのだった。

それがただのイメージで、現実には存在しないことだとしても、目の前に広がる光景だけは真実だとティキは思った。ジーンズが勤めていた図書館は跡形もない。そこにあるのは無惨に押しつぶされた建物の残骸だけ。ジーンズがぶつかった時点で生きていたとしても、もう、死んでいる。

ティキは薄汚れた袖をまくり、顔を左腕で拭う。涙の跡が、泥と血だらけの左腕に伸びた。

こぶし大のコンクリート片が足下に転がっている。ティキはそれを右手でつかみ、腕を振り上げた。

ありったけの力を込めて地面に叩きつける。欠片は地面にぶつかり、鈍い音を立てた。道路のタイルが白く欠けた

だけで、欠片は割れなかった。

自分のせいかもしれない。ティキは再びコンクリート片をつかみながら思う。欠片は投げつける前よりも重かった。自分がレヘナと出会わなければ、あの図書館にレヘナと一緒に行かなければ、あの図書館は狙われなかったのかもしれない。ジーンズさんは死ななかったかもしれない。自分がレヘナへの好奇心を持っていなければ、こんなことにはならなかったのかもしれない。

欠片をゆっくりと持ち上げ、胸の前で抱える。

ジーンズさんは何も悪くない。

悪いのは……。

ティキは大きく振りかぶる。重さで少しよろけたが、足を踏み出して耐えた。

図書館の残骸めがけて投げる。手を離す瞬間、肘に痛みが走り、欠片は高くは飛ばなかった。

悪いのはレヘナだ。

欠片はゆっくりと回転しながら、五メートルほど飛び、落ちた。二つに割れ、それぞれ違う方向へと転がっていった。

そう言えば、レヘナはどうなったのだろう、とティキは思う。あの時、レヘナは自分よりも後ろにいた。逃げられたとは思えない。結局、何十光年もの距離を旅してきて、やったことはこの惑星に災いの種を蒔いただけだったのか。レヘナが来なければきつとこんな事は起こらなかった。ガス惑星フェンが消滅することもなかった。

いや、もしかすると星々の深淵を旅してきた、というのは嘘なのかもしれない。自分は騙されただけなのかもしれない。レヘナはただのほら吹きで、構って欲しかっただけだったのかもしれない。

瓦礫には動く物は何も無い。遠くからでも、死を連想させるのがあった先端があちこちに飛び出しているのが見える。『第六図書館』という金属のプレートが、大きくひしゃげて突き刺さっている。

ティキは目を背けた。

後ろには、いつもと全く同じ光景が広がっている。無数の無人車両が滑らかにビルの間を進んでいるのが見えた。完全に制御されていないければ、カーブを曲がるときに車間の調整がうまくいかず事故になるだろう。音波制御技術のおかげで、車両は無音で動き続ける。ランダムに発生する不協和音でさえうち消す技術がそこに使われている。



すべてが調和し、絶妙なバランスで成り立っている。

このまま何もなかったことにして、まっすぐに家に帰れば、また自分は全てが調和した世界に戻る。調和を破壊する側ではなく、享受する側にいられる。

片足を後ろへ一歩下げた。

このできごとを忘れることは決してできない。けれど、表面上何もなかったことにすることはできる。いつものように明日学校へ行き、他人事のようにニュースを眺めることができるはずだ。

今、ここで立ち去れば。

震動粉碎銃の威力はなかなかね。

レヘナは身動きできない状態で思う。アイレムの情報収集者用教練で、これは身を守るときにのみ使用を許されている銃だ、ということを聞いた事がひどく昔に感じられる。

身体が、熱い。

手を挙げ膝をついた状態でレヘナは埋まっていた。身体中を巨大な圧力が覆っている事を感じることができた。体内の環境適応ナノマシンが休みなく働いているおかげで、レヘナは常人なら押しつぶされるに違いない圧力に抗して生きていられた。ナノマシンはレヘナの皮膚の表面近くに集まり、圧力にほぼ等しい抗力を作り出している。抗力を作り出す過程で発生する熱は行き場が無くレヘナの体内にとどまっていた。

レヘナは、自分の周りに落ちてくるすべての物体をマイクロメートルオーダーの粉末に変え、衝撃を受けずに図書館崩壊をやり過ごすことができた。だが、埋まってしまった身体を掘り出す方法が思いつかない。生命維持ナノマシンが問題なく働いている為には何も問題はないが、エネルギー欠乏でナノマシンが作動しなくなるのは時間の問題と言えた。

何も見えず、何も聞こえない。

あらゆる情報から隔離されている。そう考えると、レヘナはとてつもない不安に襲われた。情報を発信することも、得ることもできない。情報収集者という自分の存在意義が薄れていくように感じる。自分を援護してくれる情報収集艦は存在しない。自分を導いてくれる上級情報収集者もない。

耳を澄ましていると、自分の音が聞こえる。

ざわざわという身体中の血管の流れる音。そして、心臓

の鼓動が聞こえる。心臓の音はレヘナの中で反響し増幅され、レヘナの不安をあおった。自分の鼓動が速いのはつきりと感じ、パニックになりかける。

レヘナは目をきつく閉じる。

胸に手を当てて、心臓を安心させたかった。

エズペルに最後に助けてもらったというのに、自分のこのざまは一体なんなのだろう。情報船団を作るまでは死ねない。記録した空間メモリーの情報を『ブレーヴ』の空間メモリーに転写するまでは、生きていなければならぬ。そうしなければ、アイレムの存在が無意味化するから。エズペルの存在も無意味化するから。

その後なら、いつ死んだって構わない。

レヘナの右手の親指は振動粉砕銃に触れている。振動粉砕銃にはまだエネルギーが残っているはずだった。波数ベクトルを修正し、引き金を引くことはなんとかできそうだが、指を動かすにはナノマシンの力を借りなければならぬ。指に過剰な抗力を発生させて砂を押しやらないといけない。その分、身体全体に作用させている抗力が減る。それは生命維持ナノマシンに多大な影響を与えるだろう。

どのくらいの出力で撃てばいいのかは、レヘナには皆目見当が付かなかった。出力が弱すぎれば上にある砂を押し上げることができず、ただの音波として拡散する。強すぎれば、砂を真上に押し上げてしまっただけで砂は再び元の場所に戻る。空中で飛び散るような軌道を砂に描かせる出力は、ごく狭い範囲だ。

レヘナは親指の腹で銃の冷たさを感じていた。身体の熱が銃へと移りつつある証拠だった。

ゆっくりと心を落ち着かせる。自分の心臓の鼓動を意識し、鼓動を減らそうと試みる。うち鳴らす回数を減らせば不安も減るかのようだ。

「情報を収集し、伝達しなければ情報収集者とは言わないんだから……」

レヘナの声は言葉にはならず、口の中だけで消えた。

瓦礫しかなかった。あちこちに様々な大きさの瓦礫の山があり、瓦礫の山は地震でもあれば一瞬で崩れおちそうな不安定なものだった。ある瓦礫の上に違う瓦礫が乗っかかり、その上にさらに違う瓦礫が引っかかっていた。泣き叫ぶ人がここそこに見える。救急隊は来ていなかった。泣き声叫び声が一体となって周囲の空間を震わせている。テキキに

はそれが自分に対する怨嗟の声のように思えた。

一体、図書館には何人の人間がいたのだろうか。そのうち何人の人間が脱出できたんだろうか。

声はうるさいほどではなかった。背景音のように静かに満ちている。静かであるからこそテイキにはその声がこたえた。早く救急隊のサイレンが辺りの音をかき乱して欲しいとテイキは思った。

テイキはポケットに入れて置いた個人端末を取り出した。薄汚れていてディスプレイが見づらくなっていたが、親指の腹でこするとある程度の汚れは取れた。テイキは二ユーアを見ようとテレビの周波数を探した。親指で選局する。

さあっという雑音が響く。どの周波数も沈黙しているようだ。文字放送も音声放送も聞こえない。自分の家があるような辺境なら放送は届かない。だが、都市部で放送が聞こえないのはありえなかった。テイキは端末の電源を落とす。雑音の切れ端がゆっくりと辺りに拡散していった。

ポケットに端末をしまい、手近な瓦礫に腰を下ろす。瓦礫はテイキの体重がかかるとふらついたが、テイキが完全に座ると固定された。

目の前には巨大な瓦礫の山がそびえている。後ろを振り返ると、自分が最初にいた角が見える。道路標識は小さい。さらに向こうには、無人車両の音無き群れが見える。

テイキは立ち去らなかった。

背後に日常が控えていたとしても、テイキは後ろへは二歩目を踏み出せなかった。安定への一歩だというのに、その一歩を後ろに向かわせることができなかった。後ろへ足を動かそうとすると何故か寒気が走った。しゃがみ込み、自分の腕で自分を抱いた。膝が震えていた。

レヘナの事が気になったのだ。

廃墟が広がるのを見ているうちに、本当にレヘナという人物がいたのかわからなくなっていた。数時間前に一緒にいたはずなのに、共有していた時間にはひどく現実感が無い。まるで夢のようで、ぼんやりとしていて、自分自身が作った幻のようにさえ思えた。

目の前の圧倒的な現実感の前で、レヘナという存在がかすんでいたのかもしれない。

テイキはしゃがみ込んだ後、目をつぶって立ち上がり、前へと一歩踏み出した。何も見えないのに、前への一歩は容易だった。振り上げられた足はしっかりと地面を押さええた。

「なんで私の娘が……」

初老の男性が膝をついて瓦礫を掘っている。その手の指先は血にまみれていて、腕を動かすたびに血が空中に弧を描いた。ほんの少し赤くなつた瓦礫が次々と男性の後方へと飛び、ぼとぼと地面に落ちる。男性の顔はティキからは見えなかったが、頬には涙がとめどなく伝い降りているのはわかった。

「返却期限が切れそうでも気にしなれば良かったのに

……」

恰幅の良い女性が手を地面につけたまま瓦礫の山を見上げている。口を半開きにし、目を赤くしている。両方の指先が激しく震えていた。

何も喋らずに抱き合っている幼い女の子と男の子がいる。姉弟だろうか。小さな弟は姉にしがみついて顔を上げない。姉は弟の頭をゆっくり撫でて弟を安心させようとしているが、その手つきはぎこちなく、視線は図書館があつたはずの場所をさまよっている。

その姉弟の近くに、スコップをつかつて瓦礫を掘り起こしている若者がいる。掘り起こせない瓦礫にスコップが当たり、若者の手からスコップが離れる。コンクリートにぶつかったスコップは鋭くて大きな音を立てる。姉弟の身体がびくつと震えた。

道路を渡り、図書館の残骸のなす小高い山にティキはやってきていた。

ティキはゆっくりとあのときの状況を思い出していた。ジーンズの頭に天井からの瓦礫がぶつかった。頭にぶつかった瓦礫は鋭利な尖端でジーンズの背中を斬りつけるようにして落下した。その瞬間にティキは背中に衝撃を受け出口方向へ吹き飛ばされた。スローモーションのように倒れ込むジーンズに肩から体当たりし、それでも後ろから押された勢いは減速されず、ティキは出口を出た後もしばらく飛ばされ続けた。

その後は覚えていない。

ティキは自分の左肩を見る。服は赤く染まっている。ジーンズに体当たりをしてしまったときに付いた血。血はすでに完全に乾き、色褪せている。

ジーンズの死には現実感が伴っている。その血の乾き具合が、ジーンズの死をティキに確信させた。

目の前が霞み、涙が一滴左腕に落ちる。赤が鮮やかさを取り戻して拡散した。

ティキは上を見上げる。

草原の中で見ているかのように、空は広がった。ゆっくりと雲が流れている他は、何も動きがない。風が地上から空へと吹き上がっている。埃や塵が匂いを吸い取ってしまったからか、空気はさすがに良かった。明るい空に、うっすらと一つ星が見える。ティキが眺めていると、星は瞬いた。

レヘナは、生きているのだろうか。

生きていて欲しい、とティキは切に願う。そうでなければ、もう二度と会えなければ、自分が本当にレヘナに会っていたのかわからなくなる。星々の深淵を渡って来られる技術を持ち、銀河系スケールで活動する集団に属する人。惑星エプロのどの人間も知らないことを知っている人。そんな人と本当に自分は会っていたのか？

ティキは図書館崩壊の時のレヘナの様子をゆっくりと回想する。図書館崩壊のときにレヘナは何をしていたのか。そのときのレヘナの行動から、現在生存の可能性があるのか否かを考える。生きていたとしたら、今どこにいるのだろうか。

頭に手を当てて考えるが、ティキは思い出せなかった。図書館崩壊時、ティキはジーンズの事しか考えていなかった。崩れ落ちる天井を回避させようと必死に走っていた。そのときにレヘナが何をしていたのかはわからない。

視線を下界へと降ろす。ティキは広がる瓦礫をぼんやりと眺めながら鼻の頭を掻いた。

視界の隅で、何かが動いた。

ティキは立ち上がる。何が動いたのか確かめようと瓦礫の高い方へと向かう。図書館の中心部と思われる箇所はひととき大きく瓦礫が積み上がっており、その積み上がった瓦礫の近くで何かが見えた。

変な角度で突き刺さった瓦礫やなにやらで足場が悪く、ティキは慎重に歩かねばならなかった。一度立ち止まり、動いた箇所がもう一度動くかどうかよく観察する。

瓦礫の山の中腹あたりに、砂ばかりの地点があった。その砂ばかりの場所の砂がゆっくりと動いている。風で動いている動きではなく、下から砂を動かしている動きだった。中心部では砂がへこみ、そのへこみの中に周りの砂が落ち込んでいる。ティキはその砂の動きをじっと眺めた。足場がぐらつくため、両手を広げて眺めた。

砂の動きが激しくなってくる。へこみ具合が大きくなり、

そこに入り込む砂の量も増えていた。へこみ具合は親指が埋まる程度の大きさから、こぶしが入る大きさへ、さらには頭一つ入る大きさになっていった。へこむたびに、砂がさらさらという小さな音を立てて落ちていく。ティキはへこみに何があるんだろうとのぞき込もうとした。

瞬間に、砂が爆発した。

ふっと砂が落ち込み、その後急激に砂がティキめがけて飛んできた。砂の圧力を顔面で受け、ティキは後ろへと飛ばされる。とっさに振り下ろした右手は地面を捉えずに空を切った。背中を強く打つ。脇腹に鋭い痛みが走る。今度こそ右手を地面に立てた。

数瞬後、辺り一面に砂の雨が降り注いだ。地面に当たり砂はばらばらと音を立てている。いびつな地面に当たる砂はあちこちへと跳ね、跳躍する小さな生き物のようにティキには見えた。ティキは鼻や口に飛び込んでくる砂で咳き込んだ。両手で顔を覆いながら立ち上がる。

へこんでいた場所から、間欠泉のように砂が吹き上がっていた。砂の柱は十数メートル伸び上がり、頂点で砕けていた。頂点から砂がこぼれ落ち、その砂の雨のせいで辺りは薄暗くなっている。星は見えなくなっていた。

ティキは一歩前に出た。砂の柱の根元ではへこみが拡大しており、周りの砂が渦を巻いてそこに吸い込まれている。ティキの足下も斜めになりつつあった。

今まで見たことがない現象がティキの目の前に存在した。しかし、未見のことばかり見てしまった為ティキは何とも思わなかった。

もう一歩進む。足場が悪く、後ろに体重をかけてバランスを保った。ティキは下を見る。自分の靴が砂と共に、へこみ中心部へと動き始めている。両足を二、三度交互に持ち上げ、靴を砂の上へと出した。それでもまた靴は沈み始め動き始める。

地面の下の轟音が連続的に足を伝わり脇腹に響いた。鈍い痛みが押し寄せ、ティキは脇腹を片手で押さえる。しめった感触。手のひらを見る。

真っ赤に染まっていた。ティキはめまいを覚えた。砂が次々と手のひらに降り注ぐ。赤い液体の粘性が砂を手に張り付かせた。砂が混じっても、色の鮮やかさは変わらない。

身体が前へと傾く。バランスを崩し、砂の柱の方向へ。手を上下左右に振り回すが体勢を立て直せない。ティキは両手を前につきだし目をつぶる。

音が消えた。

テイキは砂に倒れ込んだ。手のひらに砂が触れた瞬間、肘の力が抜けた。腕は身体を受け止めるクッションにはならなかった。砂が頬をこする。手のひらが痛い。すぐに起きあがることができない。砂の雨がテイキの全身を打つ。頭を振りながら目を見開く。

唐突に砂の雨は止んだ。テイキは空を見上げた。空の明るさはいつもと同じになっていた。視線を下に戻す。

へこみの直径は十メートル近くになっていた。へこみの中心に見える物を見て、テイキは息を呑んだ。

銃を握った人間の手。

テイキは立ち上がり、砂に足をとられながらも中心へと走り出した。脇腹の痛みは苦にはならなかった。ただまっすぐにその手に向かって走った。

中心部で立ち止まり、地面を見下ろす。

テイキは銃の实物を見たことがない。だが、その銃がかしな形をしているのはわかった。四角い銃口が四つあり、直角に曲がっていた。装飾は全くない。全体的に直線的な構造をしている。曲線を全く含まない構造の物体をテイキは初めて見た。曲線、特に円弧は人の心を和ませるといふ心理学的事実があり、どの物体にも必ず一つは円弧があるということ。テイキはどこかで聞いたことがある。この惑星由来の人工物体なら例外なく円弧が含まれている。

テイキは銃を手でつかんだ。つかんだ直後に反射的に手を引つ込める。手の皮が熱を持ち、赤くなっていた。

「レヘナ。あなたは……」

テイキは頬を両手で叩く。乾いた音が周囲の空間に響いた。どこかで反響し、音は何度も繰り返された。

深呼吸をし、今度は砂からほんの少し顔を出している手をつかんだ。

暖かった。

その手の指が動き、銃を離れた。銃は砂の上に無音で落ちた。テイキは両手でしっかりとその手をつかみ膝を折り曲げて、力を上へと加える。テイキの足は沈み始める。

なかなか持ち上がらない。手のひらに付いていた血のせいで滑ってうまく力が伝わらなかった。テイキは手を離し、地面の砂に手を突っ込み両手でこすりあわせる。そして再びつかむ。

徐々に引き上がり始めた。手首が見えるとテイキは手首を持った。

腕の回りの砂が腕に引きずられるように盛り上がっている。その腕は細い。

肘が出てきたあたりで、砂の抵抗が一気に減った。砂にまみれているが赤いことがわかる髪が現れ、そのまま首まで出てきた。服に引っかかっていた砂が肘あたりからこぼれ落ちて、赤い髪の毛の上を流れ落ちた。ティキは手を離す。

「ふう。どうもありがと。顔が出ればもう大丈夫だから」  
顔はティキを見上げる。何度も瞬きをしている。レヘナの顔は微笑んでいた。うつすらと目を細めて空を見ている。

「まぶしいわね。すごくきれいな青と緑の空……」  
首を振り、髪の毛の砂を落としている。肘を折り曲げ砂の地面に手をつける。華奢な手の筋肉がほんの少し盛り上がる。五指が震えていた。

「ん、まだ自力ではだめみたい。もう少し引っ張ってくれる？」

レヘナは手を挙げた。ティキはその手をつかむ。つかみ、全力で引っ張り上げる。

肩が全部出てきた。

「もう大丈夫。後はひとりできるわ」

レヘナは顔を下げた。赤い髪の毛がレヘナの顔を隠す。ティキは後ろへと少し下がり、そこで立ったまま眺めた。

「よいしょっと」

レヘナは両手を砂につける。ゆっくりとレヘナの身体は持ち上がっていく。細く美しい腕が震えていた。腰まで身体を引き上げると、レヘナは器用に身体を動かし一気に足を地面の上に投げ出した。顔を振りながらゆらりと立ち上がる。赤い髪が左右に躍る。

髪の毛からこぼれ落ちる砂は、恒星エプロフェンズの光を反射してきらきらと光っていた。

灰色のスーツの袖はまくり上がり、レヘナの華奢な腕が見えている。肌は砂と同じような白っぽい肌色で、レヘナが袖を元に戻そうとすると、腕が削れていくかのように砂がぼろぼろと落ちた。服は砂まみれだったが、それでもみっともない汚れ方ではなかった。

レヘナは身をかがめて足下に転がる銃を拾った。その後レヘナは数歩歩く。レヘナはティキに背を向け、へこみの中心方向へと足を伸ばして座る。背中に手を回し、リュックを目の前に持つてくる。リュックの上部を開け、銃を中に入れた。



「ふう、疲れたわ」

レヘナはおもむろに後ろを振り向いてティキに言った。その表情は明るかった。ティキもレヘナの隣に腰を下ろす。座るときの衝撃で脇腹が痛み、ティキは脇腹を押さえた。

「大丈夫？ かなり血が出てるみたいだけど」

レヘナが言う。ティキは大きく首を横に振った。首の動きのせいで脇腹にまた痛みが走ったが、ティキはそれを表には出さなかった。レヘナが心配そうな顔でティキを見ている。

「大丈夫です。もう血は止まっていますから。たいした傷じゃありません。ちよつと擦っただけです。それよりも、僕の事なんてどうでもいいんです」

ティキはレヘナを見た。砂まみれになっている他は、最初に会ったときと何も変わらなかった。痛がっているそばりはどこにもなく、傷を受けている場所はティキには見つけられなかった。

「レヘナ、何故あなたは生きてるんですか？ しかも無傷で」

レヘナはティキから目をそらした。ティキはその視線の先を追う。レヘナは指先で砂を弄びはじめた。

レヘナは助かっているかもしれない、とはティキは思っていた。レヘナはティキが想像もできないテクノロジーを持っていると思っていたからだ。図書館で調べていたとき、レヘナは正八面体に膨大な量のデータを記録した。同じデータを記録する為に、現在のこの惑星の技術で採算を度外視して記録媒体を作ったら、記憶媒体はあの大きさの百倍以上の大きさになるだろう。記録の原理そのものが異なっているはずだ、とティキは思う。一つそのような技術があるのなら、他にいくつもあってもおかしくはない。だが、無傷でやり過ぎせるほどの技術を持っているとはティキには思えなかった。それほどまで技術の差が開いているとは思えなかったのだ。

レヘナは答えない。レヘナは手のひらで砂を掬う。砂は指の合間からこぼれ落ちる。

「あなたが生きているなんて、僕には信じられません。図書館が崩壊して大量の土砂が上から降ってきたはずですよ。十五階分の土砂ですよ？ 傷一つ受けないで今ここにレヘナがいることが信じられないです。僕が最初に会ったレヘナと、今僕の目の前にいるレヘナは同じ人ですか？」

レヘナの指先が止まった。顔を上げてティキを見る。レ

ヘナは微笑んでいた。

「やあねえ。ま、テイキが私のことを疑うのは別に構わないよ。意識の同一性云々は人類がまだ単一の惑星に張り付いていた頃から考えられている事だし」

レヘナは掬った砂をばらばらと振りまいた。レヘナは話を続けた。

「昨日の自分と今の自分は果たして同じか？ とかね。けれど、そんなことを言い出したら、私にもテイキが前会ったテイキかわからないわよ。他人は自分よりも不確かなのだから。自分でその人物が前と同じ人物か確認するには、ずっと見張っていないければならない。一秒たりとも目をそらしてはいけない。いや、一秒も目をそらさなくても、まばたきの瞬間に変容しているかもしれない。意識の同一性を気にしていたら何もできないわ」

「もしかしたらあなたはクローンかもしれない。クローン製造には厳罰が下るけれど、誰かが作ったのかもしれない。意識の同一性という問題とは関係ないです」

自分がわけのわからないことを言っているということはわかっていた。レヘナが無傷で目の前にいることを説明できるならば、何にでもすがりたい気持ちだった。

口元をほころばせてレヘナは笑う。

「クローンだとしたら？ それを知る手段はあなたには無いわよ。それに、クローンを作る理由がわからない。私もテイキがクローンでないという証拠を持っていない。けれど、私はテイキはテイキだと言っことを信じている。結局の所、信じるしかないわ。君がここにいて、私もここにいて。それでいいじゃない」

レヘナはふとももの上においたリュックを開く。片手をつっこみ、探っている。リュックから取り出したのは正八面体だった。砂まみれのリュックとは対照的に、正八面体はまったく汚れていなかった。表面はつるつるとして、白い表面には汚れもシミも見あたらない。正八面体はほんやりとした乳白色の光を放っている。レヘナは両手でそれをつかみ、胸の前にもってきた。ゆっくりと動かす正八面体の表面に、太陽の光がほんの少し反射して、テイキは瞬間的に目を閉じた。レヘナは両手の指先で正八面体を小刻みに叩いている。目をつぶっている。正八面体がレヘナの手の中でゆれるたびに、白い反射光がテイキの目に飛び込んでくる。

テイキはちらちら光る正八面体から目をそらし、空を見

上げた。相変わらず快晴だった。露出している手に光が当たって暖かい。その暖かみの上を涼しい風が滑っていく。

響いてくる無数の声に耳をふさぎ、暖かさと快晴だけを感じていけば、自分が今どんな状況にいるかということも忘れることができた。自分の下にある地面をコンクリートだと考えれば、いつもと同じように、学校の帰りに、自分が草原の見えるコンクリートの端に座っているという感覚を得ることができた。だが、真上に広がる空から徐々に視線を落としていけば、空想は破れ、草原は存在せず、図書館にいた何百人の墓となってしまった瓦礫だけが見える。

テイキは何度も視線を上下させた。変わらない空と変わってしまった地上を交互に眺めた。

レヘナは助かって、ジーンズさんは死んだ。それに何か意味があるのだろうか？

光の当たり続けた手の甲は暑かった。急に風を生ぬるく感じ始めていた。

そもそも、何故僕は生き残っているんだ？

テイキのあごから汗がしたり落ちた。

遠くからサイレンが鳴り響き始めた。

十

正八面体から小型艇へと電波を発し、その電波に反応して小型艇は正八面体に向かってレーザー光を発射する。

レーザー光は正八面体で反射するときに正八面体の情報をすくい上げる。その時レーザー光の波長と位相は変化する。正八面体に入射したときは異なる位相、波長になることでレーザー光は情報を持つ。そしてそのレーザー光は小型艇へと届く。そこで解読処理が行われる。この通信方法は、最初の電波以外はすべて指向性の極めて高いレーザー光を利用する為、外部に情報が漏れることはほぼない。携帯型のデバイス側に大きな設備を必要としないのもメリットの一つだった。

レヘナは、小型艇にある空間メモリーと手元にある空間メモリーとの情報の同期を終えると、大きく息を吐いた。息を吐いた瞬間に力が抜けてしまい、正八面体を自分のふとももの上に落としてしまった。片手で拾い上げる。手元が微妙に狂ってまた落とした。正八面体はふとももを転がり地面に落ちてガラスのような音を立てた。今度は落とさないように両手でつかんで持ち上げる。

レヘナの両手はかすかに震えている。その震えの程度は、レヘナにしか解らない程度の小さなものだった。手を同じ形にしていると次第に震えてくる。

無傷であるわけないじゃない。

自己治癒能力を過信しすぎたのが原因だった、とレヘナは考える。長時間の無酸素状態は、体内の代謝能力を落として普段から余分に蓄えてある酸素を小出しにすることで対処できたが、上に積もった土砂による圧力は想像以上に身体にダメージを与えたらしい。ティキに助けられる直前、ナノマシンの一部は自己崩壊して他のナノマシンの動力源になり、環境適応ナノマシンは通常の三分の一になってしまった。

レヘナは立ち上がる。恒星の光がまぶしい。

「これで、アイレムを破壊した勢力がこの惑星にあることが判明したわ」

「そうですね。信じたくないことですが」

ティキも立ち上がっていた。喋りながら屈伸運動をしている。

「とりあえず、この後どうするか、というのが問題ね。一ヶ月の間に何らかの手を打たないと文明が滅びてしまうようだし」

「文明は滅びませんよ」ティキは背を伸ばしながら言う。

「どうして」

「政府がなんとかしてくれませよ。政府は核兵器を持っていませんし」

「核兵器でダメージを与えられなかったらどうするの？」

レヘナは第六図書館が重力波レーザーによって破壊された事を知っている。小型艇が一部始終を見ていたからだ。火災や爆発は二次被害であって、最初の第一撃には熱は存在していなかった。重力波レーザー以外の攻撃兵器のほとんどは熱と運動エネルギーを利用する。物理的兵器であれば、対象物を破壊する方法はどれも同じだ。速度を持つ物体は運動エネルギーを持つ。物体の運動エネルギーは対象物を破砕しうる。或いは、運動エネルギーは熱に転化して対象物を融解させたりする。だが、重力波レーザーは運動エネルギーを利用しない。重力波というものは空間を媒質無しで伝わる存在で、あらゆる場所に重力波は満ちている。重力波は質量を持つすべての物体から放出されているからだ。重力波を受けた物体は多少伸びたり縮んだりする。その重力波を束ねて指向性の高めたものを重力波レーザーと

いう。重力波レーザーを受けた物体は激しく伸び縮みし、自らの構造を壊してしまう。重力波レーザーはただの空間を伝わる波である為に音は発生せず、光と同じ速度で進み、攻撃を受けた時にしか攻撃を受けたことを察知できない。重力波レーザーを使用できるほどの技術をもつものが核兵器を防げないわけがない、とレヘナは思う。重力波レーザーは『探査者』の置き土産の一つで、『探査者』との情報交換が無ければ人類は発見するまでに数万年以上かかっただろうと言われた代物だ。

「そのときはそのときで、結局なんとかかりますよ」  
「ティキは微笑みながら言う。」

「楽観的だね」

「楽観的じゃないとやっていけないじゃないですか」

ティキはこわばった笑みを浮かべて言った。口調にはやるせなさのようなものが漂っていた。全身埃まみれで、肩のあたりを赤く染めて、ティキはまっすぐにレヘナを見つめていた。レヘナはしばらく目を合わせた後、歩き出した。

「ま、とりあえず、首都の方へ行きましょう。生きている交通機関を探るのが先決」

「そうですね。けれど首都まではすごく時間がかかりますよ」

「知ってるわ。空間メモリーにデータは入ってる。三日くらいかかるのよね」

そう言うってレヘナは笑う。一ヶ月しか時間が無いというのに、移動だけで三日も費やすことは馬鹿らしく感じた。けれども、交通機関が無いのだから仕方がない。

「ええ。あ、あと衣食住の心配は要りませんよ。僕がお金を払いますし、長距離地下鉄には食堂が備え付けられています。おいしいですよ」

ティキが笑う。レヘナには本当に心からの笑みに見えた。そういえば不時着してから食事は何もしていなかったな。そう思うと急におなかの辺りが寂しくなる。ティキも同じなのか、おなかに手を当てていた。

二人で思い切り笑った。

大小様々な瓦礫をよけたりその上に乗ったりしながら、足場の悪い場所をレヘナ達は歩いた。図書館以外はダメージを受けていないのだから、広範囲での交通障害は起きていないと考えられた。

毅然とした態度で歩くには意志の力が必要だった。ほんの少し気を抜くとティキに自分がかかり負傷しているとい

うことがばれてしまう。指の先が震えだしてしまうのだ。震え始めた右手を左手で包み、もみほぐす。それでも震えは止まらない。

レヘナは空間メモリーの情報の同期をとるとき、自分の健康状態を小型艇に診断させた。外側は損傷が見えないが、内臓のダメージは大きく、自己治癒能力が追いついていなかった。自己治癒能力を司るナノマシン群は、砂の下にいたときのオーバーワークで本来の五十パーセントの治癒力しか発揮できていない。ナノマシン群の治癒力が本来のレベルにまで回復するには二ヶ月近い時間が必要だということがわかっている。

今度同じような目に遭えば、自分は死ぬだろう。もう無理はできない。危険を最小にするような行動をしなければ、自分はいつだって死にうる。中級情報収集者の能力を超えた仕事だけども、やらなければならぬ。

レヘナは地面を見ながら歩いていた。だいぶ破片や瓦礫は少なくなってきたが、まだたくさん瓦礫はあった。一歩地面に足をつけるたびに埃が揺れている。レヘナは転ばないように慎重に歩いていた。

「レヘナ、あなたがこの惑星に来たことと、管理者とやらがこの文明を無に帰そうと行動を始めたことが同時期になったのは、偶然でしょうか、それとも必然……って、大丈夫ですか？」

テイキに声をかけられたときになって初めて、レヘナは自分の身体が傾いていることを意識した。空が左側に見えた。足の方を見ると、自分の左足の裏の半分だけが瓦礫に接していた。自由落下のように身体が傾いていく。右手を出して地面に手をつけようとしたが、手を出そうとしたときにはすでに地面が迫りすぎていた。

肘から地面に衝突した。ほんの少し肘に痛みが走る。埃が口と鼻に入りレヘナは咳き込んだ。テイキが近づき手を差しのばす。右肘を左手で押さえながらレヘナはテイキの手を取った。そのまま引き上げてもらう。肘の関節が引っぱられてほんの少し痛かった。

「ど、どうもありがと」  
「ちゃんと足下見てないと駄目ですよ。瓦礫沢山転がっていますから」

テイキの手を離す。右肘を押さえていた左手を離す。左手には血が付いていた。服の破れた右肘を見ると、肘の側面部に一センチほどの切り傷があった。埃にまみれている

傷口から血がにじみ出している。人差し指でゆつくりと拭くと、指の腹が真っ赤になった。

顔を上げると、ティキが笑っているのが見えた。腹を押さえて顔をゆつくりと上下させながら笑っている。

「なんで笑ってるの？」レヘナは聞く。

「あれだけの大惨事で血を流さなかったレヘナが、ただバランスを崩して、転んだだけで血を流しているのが、ちょっと、おかしくて。ごめんなさい」そう言いながらもティキはまだ笑っている。

「ちよっと、私だって怪我するわ。同じ人間なんだから」レヘナは歩き出した。まだ笑いながらティキも歩き出した。

「レヘナが、はじめて同じ人間だって、わかったような、気がします」

ティキの笑いはしばらく続いた。壊れた音響機械のようだとレヘナは思った。レヘナにはティキがなぜそこまで笑うのかよく理解できなかった。

また空が左に傾いた。

ティキ達は舗装された道路を歩いていった。後ろを振り返ればビル群の間にぼっかりと空いた空間を見ることができると、空いた空間は不自然だった。円を多用した構造物の中での、直方体の空間にティキは恐怖を感じた。あるべきところにもないという事がこれほどまでも自分の心を乱すとはティキは信じられなかった。直方体の何もない空間の外には、遠くのビルが見え、さらにその向こうには青緑色の空が見えた。

前を向くと地下鉄の入り口が見える。ティキ達の歩いている歩道の視線の先にその入り口はある。円を垂直に地面に立て下の部分を切ったような形をしている。深緑のカーブした屋根が太陽の光を浴びて鈍い光を放っていた。

「地下鉄は機能しているみたいですね。地下鉄に乗りますか？」

「乗る乗らないはともかく、交通機関の状況を見る為には駅に入った方がいいわね」

入り口よりも二十メートルほど手前でティキ達は立ち止まった。ティキは、じわりと額にじんできていた汗を手の甲で拭いた。ふと見ると、レヘナも汗を拭いている。前髪の一部がしっとり濡れていた。レヘナは濡れた先端を軽く手で弾いている。

ときおり人が入り口の中へと入っていく。ほとんどの人間が両手に荷物を持っていて。地下鉄の入り口から出てくる人間はいなかった。入り口は薄暗い。天井に照明が取り付けられているのだが、それ以上に外の方が明るかった。

「暑いですね、ほんとに」  
「そうですね」

テイキはポケットに入れていた端末を手に持っていた。ポケットに入れておくと皮膚と服が密着して暑苦しいからだ。手に持ったついでに、自動で端末にラジオやテレビの周波数を探らせたが、どの周波数も完全に沈黙しているようだった。このようなことはテイキが生きている間には一度もなかった。災害時には、ラジオやテレビがもつとも安定した情報供給源になる。過去に地震があったとき、テイキがもつとも信頼したのはラジオの情報だった。ネットワークと違い、デマが広がることのないのがラジオやテレビの利点だとテイキは思っている。

電波の使用が禁止されているのかもしれない。テイキはポケットに再びしまいながら考えた。

レヘナがゆっくりと歩き出す。テイキはその後ろをついて歩いた。埃まみれのテイキ達の姿を見てほとんどの人間が目丸くする。数秒凝視した後、何も見ていなかったかのように目をそらす。それは普通の反応だった。この惑星の文化では、他人に深い関心を持たないことが美德とされている。相手が求めていない限り、自分からは積極的に干渉しないというスタンスが、この惑星の文化がプライバシー関連の技術を発達させた。

テイキは入り口に入る前に一度立ち止まって、もう一度埃を落としたが、それでもテイキの格好は明らかに何らかの災害に巻き込まれた人間の格好だった。

入り口にはエスカレーターと階段があった。途中に踊り場があり、そこで階段とエスカレーターは方向転換している。ひんやりとした風が入り口から吹き上がってくる。

レヘナは階段を下りている。エスカレーターの存在には気づいていないかのようにつまづきに階段を下りていた。

テイキもそのあとに続く。エスカレーターよりもなんとなく階段の方がいい感じがしていた。なぜいい感じなのかは、テイキにはうまくわからなかった。直感ではないが直感に近い思考からその感覚は導き出されている。

二人の足音が入り口内に響いた。



長い階段を下りきると、大きな空間が開けた。円筒を縦に割ったようなアーチ型の空間がある。天井からぶら下がっている丸い掲示板には『シヨーヨー駅』と表示されている。その駅名の下には、左から右へと文字が流れている。「ただいま、緊急事態の為、政府関係者を優先的に乗車させています。一般の方、特に、首都と反対方向へ行く方は、政府の緊急事態宣言が撤回されるまで地下鉄をご利用できません、ご了承ください」

文字列と同じ内容を無指向性のスピーカーが喋っていた。駅構内の両側の壁に、たくさんの人が座っていた。ある者は足を大きく投げ出して座り、ある者はあぐらをかき腕を組んで座っている。横になって寝ている人間もいた。二メートル程度の間隔を空けてずらりと並んでいる。

テイキが壁に沿って視線を移動させていくと、しばしば、目線の先で座っている人と目が合った。瞬間的に目が合い、相手は目を見開き、しばらくして目を伏せる。

それはテイキが見たことのない光景だった。普段の地下鉄の駅は、地下鉄に乗る為の通過点であり、人が溜まっているということはありえない。テイキには、いつも人の流れのある場所に流れが無いと何か不自然な気がした。流れがせき止められ濁り、よどんでいる印象すら受けた。

レヘナはテイキの右隣を歩いている。レヘナは左手に正八面体をにぎった状態で、まっすぐに前を向いて歩いている。背筋を伸ばし、毅然とした態度だった。服が埃や泥にまみれていても、決してみすばらしくはない。テイキはレヘナと同じように背筋を伸ばした。

大勢座っている中で、立っている人間がいる。

青いつなぎのような服装だった。背の低い優男が駅の改札付近に立っている。改札を通り抜けるのを阻止する警備員のように見えた。だが、その男が警備員ではないことは、男の胸につけられている五角形の記章を見ればわかる。赤とオレンジの円が無数に重なり合ったデザインの記事はテイキにも見覚えがある。

「レヘナ、あの男には注意した方がいいです。あの男は警察……」

「あの、ちょっとそこのお二人さん」

青い服装の男がにこにこしながら歩いてきた。

「あなたたち、どこから来ましたか？」

男は両手をポケットに入れたまま、ゆらりとレヘナの前に立ちふさがった。規則的に響いていた足音が止まる。レ

ヘナが左手の正八面体を右手に持ち替えるのが、テイキには見えた。テイキも同じように立ち止まる。男は背が高く、テイキは上を見上げる形になった。

「答えないといけないのですか？ 私たち、急いでいるのですが」レヘナが言う。

「今は非常事態です。市民、いや、住民は警察に協力しなければなりません。私はここで地下鉄を利用していている人間の情報を収集しています。捜査にご協力ください」

「捜査ですか？」

テイキの出した声は本人の予想以上に大きなものだった。ほんのりとした喧噪が瞬間的に静寂に取って代わった。静寂はテイキが息を吐く程度の時間で喧噪に戻った。

この喧噪は作られた喧噪だとテイキは確信する。

ぼんやりとしているように見える人たちは、実は情報を得ることに最大限の関心を持っている。このよくわからない状況を鮮明にする材料がいつ現れても大丈夫なようにつねに聞き耳を立てているのだ。その証拠に、最初の喧噪と今の喧噪はほんの少し違っている。最初よりもやや空気に緊張が流れている。テイキはなんとなく見られているような気がした。

男はほんの少し間をおいてから口を開いた。それはまるでこの場にいる全員が自分の話に聞き耳を立てていることを確認しているかのような間だった。

「政府は、今回の第六図書館爆破事件が反体制グループの犯行によるものだとして断定しています。私にはそれ以上言えません。言えば捜査に支障をきたしますから」

男はポケットから右手を出した。その右手の親指と人差し指の間には、手のひらより一回り小さい四角い端末がある。赤とオレンジの円の小さな記事が取り付けられていた。「どこから来たのか、言わなくてもかまいません。個人識別コードをお願いします」

男は顔の前で端末を前後に振っている。あいかわらずにここにことしている。テイキはレヘナの顔を見た。レヘナはただまっすぐに揺れる端末を見ている。テイキは脇の下に冷たい汗が流れ落ちるのを感じた。

個人識別番号を要求することはよくある話だ。身分を確認するのに最も手っ取り早い。個人識別番号は惑星の住人全てに割り当てられていて、情報の利用者が持っている権限に応じて個人情報が開示される仕組みになっている。

額の汗を拭う。テイキはレヘナを見た。レヘナは全く動

じていないように見えた。冷静にただ男を見ている。

「R3928539221です」レヘナはよどみなく言った。

男は腕の振りを止め、親指で端末を操作した。男はレヘナの言った番号を慣れた親指さばきで入力している。男は入力を終わったのか、親指を止める。端末とレヘナの顔を交互に数回見た。その間、レヘナはただ男の端末を見ているように見えた。

「ジーンズさんですね。確認しました」

「は？」

テイキは大きな声を出した。再び喧噪がやむ。静かな構内にわずかなハウリングを伴ったテイキの声が反射していた。テイキは手のひらを口に当ててつくんだ。

レヘナがジーンズさんと会ったのはあの一瞬だけだ、とテイキは思った。あのときには自己紹介は名前しかしていない。個人識別番号なんて全く口にしていない。なぜレヘナがジーンズの番号を知っているのか、テイキにはさっぱりわからなかった。そもそも、顔が全く違はずなのに、何故認証が成功しているのだろうか。

「で、君は？」男はテイキの方を見ている。何の感情も見られない事務的な表情だった。あたりは静まりかえっている。

テイキはレヘナの方を見た。レヘナは微笑んでいた。口元が笑っている。それがなぜかテイキにはわからなかった。微笑んでいるが、瞳はまっすぐとテイキを見つめている。その瞳の真意をテイキは理解できなかった。『早く言いなさい』ともとれるし、『へましないでね』ともとれた。

テイキは男をまっすぐに見つめる。

「R117469837です」

うそをつこうとも考えたが、テイキはそのまま自分の個人識別コードを言った。

嘘の識別コードを言ってその場を逃れることができたとしても、自分はレヘナのように賢く立ち回れることはできないし、とテイキは思う。

テイキはすぐにレヘナの方を見る。レヘナは相変わらず微笑んでいた。だが、その微笑みは不敵な笑みのようにも見えた。テイキがぎこちなくも微笑み返すとレヘナはかすかにうなずいた。

男は親指で入力し、端末とテイキへと数回瞳を移動させる。

「テイキさんですね。確認しました。あつ」

男が小さく声を上げる。男の親指は止まっていた。男の視線は端末に固定されている。テイキは下を向いた男の虹彩を見ていた。男の黒い瞳がゆっくりと移動する。テイキと目が合うと男は目を見開いた。すぐに目をつぶり首を左右に振る。目を開きテイキの方を見る。親指を激しく動かし始める。男は端末に向かって喋り始めた。ひそひそとした声だったが、内容が容易に聞き取れる音量だった。男のひそひそ声よりも、静寂の方がはるかにポテンシャルが低かった。

「発見した。テイキ・RM10をシヨーヨー駅で発見したぞ。個人識別コードも確認した。本人に間違いない。今俺の目の前にいる。本当にこんな少年に賞金がかけられてるのか……」

男は再度テイキを見た。上から下へとゆっくりと視線を移動させている。男の黒い瞳がなめらかにゆっくりと動いている。テイキはその目を薄気味悪く感じた。男は下まで目を移動させると、最後ににゆるりとレハナの顔へと視線を向けた。にっこりと笑い、再びテイキの方を見る。表情はかしこまっていた。

「テイキさん、実はあなたに伝言があります」

レハナの方をテイキは見た。レハナはただテイキを見ていた。

「何ですか？」

テイキは頬に空気の流れを感じた。ふんわりと水平方向に風が生じている。男の前髪がさわさわとなびいている。地下鉄が近づいてくる音が満ちてきていた。音の推移から推測するに首都へ向かう地下鉄のようだった。

男は端末に視線を移動させる。

「元気にやっているか、テイキ。遅かれ早かれこうなることを父さんは知っていた。具体的に何が起こるかは父さんにもわからない。だが、はつきりと知っていることはある。この伝言がどこで読み上げられるかまったくわからないが、読み上げている人間は父さんの所属する陣営の人間だ。安心していい。真実が知りたければ、おまえに好奇心が存在するなら、父さんのところへ来い。しかし、自分のいまの生活を捨て去ることになるだろう。真実を知らぬまま過ごしたければ……」って、まじかよ」

男はそこで一旦しゃべるのをやめた。ゆっくりと首を動かす。あたりを見回す。テイキも同じように首を動かす。

数十の目がティキ達を眺めていた。

ティキは視線を男に戻す。

男は端末を持っている手を振り上げていた。握り拳は震えていた。すさまじい形相で床を見ている。男は手を勢いよく振り下ろした。振り下ろした肘は腰のあたりで止まる。少し遅れて空気の流れが生じた。

「あの、続きはどうなってますか？」

男は首を左右に振ってから拳を開く。親指と人差し指で端末を持った。

「『真実を知らぬまま過ぎたければ、家に引きこもっていなさい。ネットワークがついていないから、おまえは避けられることのできない星の終わりの実況中継を聞かなくとも済む。星の終わりは避けることはできない。父さんは何十年も歴史を研究してその結果を得た。父さんのところに来るか来ないかはおまえの自由だ。来るのなら歓迎する。父さんと一緒に星の終わりを観察しようではないか』だ、そうです。首都行きのに乗って『第六シテイ中央』で降りればいいそうです」

構内のざわめきは急激に最高潮に達した。ティキ達の方へ詰め寄ろうとしている人もいる。詰め寄ろうとしている人はまわりにいる人に制止されていた。地下鉄の出口方向へ走り出すものもいた。ざわめきを超える音量で『首都行き地下鉄はあと五分後に発車します』というアナウンスが流れている。

星の終わり……。なぜ父親がそのことを知っているのか。伝言を警察に頼めるほどの権力をどうして父親は持っているのか。ただの学者ではなかったのか。

ティキの中で消えていたはずの父親の存在が大きくなっていく。わからなさが加速度的に膨らんでいく。勝手に失踪して、勝手に自分の目の前から消え去って、そして現れて、何をしたいのだろう？ ざわめきがティキの心の内側にも発生していた。

「ティキ、お父さんに会いましょ」

レヘナが横を向いて言った。ティキの手に何かが触れる。ティキの目を見ながら、レヘナはぶらりと腰のあたりで揺れているティキの手をつかんでいた。

レヘナの顔が離れていく。ティキは腕を引っ張られるのを感じた。レヘナは改札口へと向かっていた。ティキはレヘナと男を交互に見た。男はティキの方を見ていなかった。男は流動的になった状況をただにやけながら見ているよう

だ。片足がリズムをとっている。

テイキの足が引きずられている。テイキは足を時々持ち上げて体勢を立て直さなければならなかった。

引つ張られている速さと同じくらいでテイキは歩き始めた。ほんの少し歩くのを速め、レヘナの隣に並ぶ。すぐ目の前には赤い改札口がある。二人が近づくと両開きのドアのように仕切り板が開いた。

レヘナは一度立ち止まる。下へと降りる階段からサイレンのような音が聞こえてくる。その音は地下鉄が出発間近であることを示していた。あと二分間経てば地下鉄が発車する、という合図だった。サイレンの音とアナウンスの音と周りの喧噪が混沌と混じり合っている。

レヘナがさつき通り抜けた改札口の方向を指さした。

テイキはその方向を見る。髪を振り乱した若者がこちらに向かつて走ってきていた。蛍光緑のジャンパーを身につけたその若者は、改札口を乗り越えようとしてジャンプした。改札口の真上に紫色の光が弾ける。若者は紫色に跳ね返されるように床にたたきつけられた。

腰を押さえて立ち上がるうとしていている若者に数人が駆け寄ってきた。

階段の方にレヘナの姿が見えた。頭の位置がどんどん下がっていく。

埃っぽい匂いが漂っている。テイキはもう一度、無茶なことをした若者の方を見た。腰をさすりながら笑っている。床をつま先で叩いて、テイキは階段の方へと走り出した。

レヘナは選択の自由を与えてくれなかった、とテイキは思う。

階段を駆け下りる。埃っぽい匂いが強くなっていく。レヘナは踊り場よりも下へと降りてしまっているらしく、テイキからは見えなかった。

自分が好きでついでにきているだけで、僕の意志ははじめから考慮されていない、とテイキは考える。レヘナは出発する前に一人でも大丈夫、と言った。レヘナにとって、自分はその情報の供給源にすぎないかもしれない。

テイキは首を横に振った。

情報供給源でも構わない。自分は自分の意志で今ここにいるのだから。崩壊した図書館を前にして、後ろではなく前に一歩踏み出した時に、たとえどんなことがあったとしても、自分は最後までレヘナにつきあうことに決めたのだ。レヘナにとっての自分の役割がどうであって構わない。

ジーンズさんを殺した奴に面と向かうまでは、自分はどんな手段を用いても生きなければならぬ。父親に会いたくなくても、情報を収集する為にはやむを得ないと考えるしかない。

走りながら踊り場で手すりにつかまり、円を描くようにカーブする。緑色のホームの床が見えた。階段が尽きたところにはレヘナが立ってテイキの方を見ている。レヘナはにこやかに微笑んでいるようだった。

サイレンが前以上に強く鳴り響いている。

十一

レヘナは左肘をpushしながら、どこまでも続くまっすぐな通路をテイキと案内の男と歩いていく。

地上で転んだときの左肘がじくじくと痛む。どうやら出血が止まらないらしい。傷口をpushしている右手には、いつもしめった感触がある。血のしみ出しの程度はほんの少しだった。そのまま何も処置せずに放っておいても大丈夫、とレヘナは思う。血が止まらなくても、体内での造血は順調に行われていたからだ。あと数十時間もすれば服が真っ赤に染まるだろうが、数十時間が経つ前に血は止まるはずだともレヘナは思う。

しかし、手の震えは止まりそうになかった。

寒さに凍えているときのようになり、自分の意志とは関係なく手先が震える。震えの大きさが大きくなっている。症状は悪化しているようだ。

テイキは少し前を歩いている。通路の両側には沢山の扉があり、テイキはその一つ一つに取り付けられているプレートを確認しながら歩いている。案内の男はテイキよりさらに二メートルほど先を歩いている。

首都行きの地下鉄は、一駅目で『第六シテイ中央』にいた。ホームには五角形の記章を胸につけた男が待っており、その男に案内されてレヘナ達は今歩いている。男は最初に「ついてこい」と一言言った以外は何も喋らなかつた。

通路の先は薄暗い。案内の男は青い服を着ており、目立たない。通路には照明がつけられていたが、なぜか先まで見通すことができなかった。現在位置を確認しようと小型艇に連絡をつけようとしたが、天井や壁の電磁波遮蔽性が高いのかまったく連絡をつけることができない。レヘナは左肘から手を離す。右手は赤く染まっていた。乾いた血の

上に真新しい血が重なり、出来損ないの絵画の色を思わせ  
た。

レヘナは歩きながら、手の上で固まった血の塊をひっか  
いてそぎ落とした。

前方でティキが立ち止まった。レヘナは両手を払って立  
ち止まる。ティキが振り返りレヘナを見た。ティキの隣に  
は案内の男が立ち、まっすぐに扉を指さしている。

「ここみたいですよ」

何の変哲もないドアだった。銀色のドアには窓がついて  
いない。中央に白いプレートがあり、そこには『シナルク・  
RL21』とだけ書かれていた。

「じゃ、入りましょ」

レヘナはドアに歩み寄った。左手を固め拳にする。

「あ、ちよつと待ってください」

その手をティキがつかんだ。ティキはレヘナの手首をつ  
かみゆっくりと降ろす。ティキの手は冷たかった。

「どうしたの？ 父さんに会っんでしょ？」

レヘナはティキを見る。ティキは自分の拳をドアに向  
かって振り上げた。

「僕がドアを開けます。一応僕の父さんなので」

ティキは拳を挙げたまま一度大きく深呼吸をした。目を  
つぶっているティキの顔がレヘナから見えた。ゆっくりと  
目を開く。重心を移動させたのか身体を後ろへ傾けている。

「いままでどこに行ってたんだ親父っ！」

今までのティキからは想像できないほど大きな声が通路  
に響く。ほぼ同時にドアが激しく叩かれた。鈍い音が鳴っ  
た。

レヘナは思わず耳を押さえた。肩をすくめて一歩後ろへ  
と下がった。

ティキは何度もドアを叩いた。そのたびに痛々しい音が  
ドアから聞こえる。今にもドアが叩き破られるのではない  
かとレヘナは思った。振りかぶっては叩き、振りかぶって  
は叩いている。叩くたびにドアが振動した。

「やっと思つたぞ馬鹿野郎っ！ さっさとドアを開けや  
がれっ」

「ティキ……？」

レヘナはティキに声をかけるが、ティキは全く気づかな  
かった。ものすごい形相で、顔を真っ赤にしてドアを叩い  
ている。

気がつくと案内の男はどこかへ消えていた。通路の奥に



行ったのか、引き返したのか、さっぱりわからなかった。  
「ほら、さっさと出てきやが……」

ドアが横にスライドした。ティキの拳は空を切った。レヘナはティキの後ろに回り込み、ドアの中をのぞき込む。目に見えたのは本の山だった。絶妙なバランスでレヘナの頭の上にも積み上がっている。純粋な紙の情報の山。図書館と同じ匂いがする。しかし、図書館よりも匂いはきつい。レヘナは本の古さと関係があるのだろうかと思った。  
「ほら、開けたよ。入ってきなさい」

本の山の奥から、男の声が聞こえてくる。男の声は透き通っていて静かで、そしてティキの声によく似ていた。

横へ少し移動し、ティキを見る。ティキの右手は赤くなっていた。

「ティキ……？」

レヘナはティキにもう一度声をかけた。怒鳴り声と叩く音が静まった今、レヘナの声は通路によく通った。

「え……。あ」

ティキはレヘナの方を見る。レヘナの視線がティキの拳に向いているのに気づいたのか、ティキは右の拳を左手でさすった。左手が拳に触れると、ティキの右拳はほんの少し跳ねた。

「どうしたの？ 大丈夫？ 気持ち収まった？」

「大丈夫です。少し取り乱しただけです。では、入りましよう」

ティキは右拳を押さえながら部屋への一步を踏み出した。レヘナもあとに続く。一步部屋に踏み入れると、さらに書物の匂いが強くなった。日に焼けた書物の匂いだ。足下には本が散らばっており、とんでもなく古そうな茶色の本も下に無造作に置かれていた。

ティキとレヘナは本を踏まないように、本の山を迂回しながら部屋の中を移動した。本の山に遮られて、なかなか男はレヘナの視界に入ってこなかった。本をめくる音が静かな部屋の中に響いている。

「あ」

歩いているティキは本の山の角に触れてしまった。山は不安定に左右に揺れる。ティキはつま先立ちをして本の頂上付近を押さえようとした。だが、その行為は山の不安定性を高めただけだった。大きくぐらりと揺れ、本の山は一冊一冊の本になる。ティキの足下に雪崩のように本が押し寄せた。レヘナは一步後じさってその様子を見ていた。

両開きになった本が多数。足の踏み場はない。進もうにも床が見える箇所はなかった。書物の匂いがさらに強くなる。部屋全体の明るさが増した。舞い上がる埃の中に、窓からの光の筋が見える。

山が崩れたことよって、部屋の奥に座っている男の姿が見えた。男は片方の肘をついて本を読んでいる。髪の毛は黒で、白髪が多少混じっている。

「親父っ」

ティキがまっすぐに男の方へと歩き始めた。ティキは器用に、つま先歩きで本と本の隙間を踏んで歩いていく。レヘナはティキが踏んだ場所を慎重にバランスを崩さないようにして歩いた。

机を挟んで男と正対する。男は顔を上げない。ただ本をめくっている。机には数冊の本と紙、ノートがある。コンピュータのような電子機器はない。丸い消しゴムと短くなつた鉛筆が男の肘のそばに転がっている。

「おいっ」

ティキが机に両手を叩きつけた。乾いた音が静かな部屋の中に響いた。鉛筆が転がり始め、床へと落ちた。

「やあ、早かったね、ティキ。意外とここに近い場所にいるんだ。てっきり家の中にいるものばかり思っていたよ」

男は本を閉じる。男はティキの方へと視線を走らせた。レヘナと目が合う。

「ジーンズさん、と言ったかね。私はシナルクという者だ。ティキの父親であり、今は政府の科学顧問をやっている。顧問と言っても、基本的に相談されたら答えるだけの役職だがね。研究に使える時間はたっぷりあるので今の生活には満足してるよ」

シナルクが手を差し出した。レヘナは自分の右手を見る。どうやら惑星エプロの文化は情報船団内における文化と同じようなものらしい。レヘナはゆっくりと手を差し出し、相手の手を握った。シナルクの手は大きく、角張っている。学者の手とは思えない手だった。レヘナは、ティキからシナルクが歴史学者であることを聞いている。歴史学者という職業柄、地面を掘ったりするのだろうか、とレヘナは思った。

「親父……」

レヘナはティキの方を見る。ティキはシナルクをにらみつけ、手を机に付いたまま、肘を小刻みに震わせていた。それを見てシナルクは微笑んだ。シナルクは閉じた本を机

の端の本の山に積み上げた。本の山はまったく揺れなかった。

「テイキ、ついに私の学説が認められたんだよ。疑いようのない事実としてね。これでもう私の事を笑う者はいない。よろこんでくれ」

「親父っ」

その声を上げると、テイキは机越しにシナルクにつかみかかった。レヘナはただその光景を眺めていた。レヘナは親子の諍いに口を挟むほどお人好しではない。テイキの肘が積み上がった本にぶつかると、本が次々と机から落ちる。落ちた本は違う本の山に当たり、その山も崩れた。テイキはシナルクの襟首をつかんでいる。シナルクは落ち着いていた。テイキの感情の対象が自分ではないかのようなようだ。醒めた目でテイキを見ている。

「息子を捨てて、勝手に失踪して、何が、『私の学説が認められた』だ。しかもそんなに嬉しそうな顔をして。僕がどれだけ心配したか、わかってるのか？ 僕の気持ちも考えろっ」

「だが、私はちゃんと養育費を仕送りしていたじゃないか。それで私が生きていることはわかっただろう？ 私とテイキしか知らない口座に入金したんだから。心配する必要なんてなかった」

シナルクは両手でテイキの腕をつかんだ。

「息が苦しいのだが。早く離してくれないかね」

「親に失踪された身になってみるよ。僕がどれだけ苦労したか、わかるのか？」

「わからないね。わかりたくもない。おまえはまだ未成年だ。何かさせてもらっている身の上で贅沢なんか言っな。別に養育費を振り込まなくても良かったんだぞ。私はあらゆるネットワークから隔離される必要があった。おまえへの送金が唯一の外界との接点になっていた。身元が割れるのを覚悟で毎回おまえの為に送金していたんだ。おまえの存在は私の中で邪魔だったんだよ」

「なっ」

テイキの腕の力が一瞬ゆるんだのがレヘナにも見て取れた。その隙を逃さず、シナルクはテイキの手を襟元から引きはがした。そしてそのまま両腕を伸ばし、テイキの胸ぐらをつかむ。シナルクは立ち上がった。テイキの足が床から離れる。テイキの足が床を求めてもがいた。机の側面につま先が何度も当たり、音を立てる。

「私は完全失踪できた。そうすればおまえはなんらかの公共の施設にでも入って孤児達と一緒に暮らすことになったんだろうな。私はそれを避けてやったのだよ。おまえが今の生活をそのまま続けられるように」

「詭弁だ」テイキは苦しい息を漏らしながら言う。

「詭弁でも結構。親の心子知らずだからな」

シナルクは手を離れた。テイキはうまく着地できずに後ろに転がった。テイキの背中に本が当たり、山が崩れる。

落ちてきた本はテイキの身体を埋めた。テイキは何もしなかった。埃が舞い、窓から照らし付ける光の筋を浮かび上がらせる。

「ジーンスさん、すまないね。みっともない親子のけんかを見せてしまつて。これは私たちの愛情表現の一つなんだ」

レヘナは視線をシナルクの方へと移動させる。シナルクは肩の前で手の平を上にして苦笑いをした。

本人が愛情表現と言っているのなら、別にいいか、とレヘナは思った。

同じジエスチャーが通じる文化だとしても、詳細が異なっていることはよくあることだとレヘナは教わっていた。

『自分から見て異質であるからといって拒否反応を示してはいけない。自分と同じである事にこそ警戒心を抱け。』

レヘナはエズベルと二人で、教官のその言葉を聞いたことを思い出した。「じゃあ、僕たちも警戒しないとイケないね。似てるから」と笑いながら言うエズベルに、「全然似てないわ。私は誰かにチョップされないもの」と言つてチョップしたのだった。

他の人から見れば、私のチョップも加害行為に見られるかもしれない。けれど、あのチョップは私とエズベルの間の暗黙の了解であり、愛情表現とも言えたのかもしれない。

シナルクは腰を下ろさずに、手の届く範囲で乱れた本の山を整頓した。一通り終わるとシナルクは指を指した。レヘナは指の先を目で追う。そこにはソファがあった。テーブルを挟んで二人がけの灰色のソファが二つ。テーブルの上にはやはり本が積み上がっている。

「とりあえず、そっちに座つて話でもしようか」

シナルクはそう言いながらソファの方へと向かう。転がっている本を手近な山に積み上げながらだった。シナルクはソファに座る。レヘナは反対側のソファに座った。座った時にソファは大きく凹んだが、音はまったくしなかった。シナルクの顔が見えない。テーブルに積み上がる本の山

は向こう側のソファを見通せないほど高かった。「すまんね」と言いながらシナルクはてきぱきと本をよけていく。レヘナはどれから触って良いのかわからず、ただその行為を眺めていた。

視線をティキのいるはずの方向へと向ける。ティキは腰をさすりながら立ち上がっているところだった。ティキもこちらへと歩いてくる。散らばった本を積み上がった山にそつと載せながらだった。つまんで軽く振り、置く。本を積む動きがシナルクと似ていた。

「隣座つてもいいですか？」

ティキが聞く。最初の深刻な顔ではなかった。いま起きた出来事が何もなかったかのように、いつもと同じ表情をしている。好奇心が瞳から覗いている顔だ。「いいよ」とレヘナが言つとティキはゆっくりと腰を下ろした。ソファのへこみでレヘナの身体が傾く。

視界が開けた。シナルクの顔が見える。この文明が老化抑止剤を持っていないとしたら、多分シナルクは五十代くらいだろう、とレヘナは推測した。黒い瞳はティキとそっくりで、好奇心が前面に押し出されている。ティキの瞳と違うところは、シナルクの瞳は憂いを帯びていることだ。その憂いは一朝一夕で出せるような代物ではないとレヘナは考えた。

「どこかぶついたりしてないか、ティキ」

「ん、あ、大丈夫」

そう言つてティキとシナルクは微笑む。レヘナにはティキの感情の推移が理解できなかった。あれだけ激しくやりあったのに、なぜティキはそんなにも穏和な表情ができるのだろう。レヘナが不思議そうな顔をして二人を交互に見ていると、それに気づいてティキは笑った。シナルクは真顔になる。

「ティキ、この人は本当に信用できるのか？ パニックになつて騒ぎを起こされると、奴に感づかれる危険性があるのだが」

「誰に感づかれるの、父さん」

レヘナは、ティキがシナルクのことを父さんと呼びかけたことを聞き逃さなかった。口調から呼び名まで変わるのには、一体なんなのだろう。全く訳が分からない。レヘナは正八面体からこの惑星の文化情報を手に入れていたが、その情報の中にはこのような事は載っていないかった。レヘナはリュックから正八面体を取り出し、胸の前に持ってきた。

包むように持ち、目をつぶり、正八面体へのアクセスを開始する。正八面体が乳白色の光を放ち始める。

「それは何だね」

両手に何かが触れて、レヘナは顔を上げた。シナルクがレヘナの両手を触っていた。レヘナはにっこりとシナルクに微笑みかけた。右手でやんわりとシナルクの手をどける。「私が信用できるかできないか、とおっしゃいましたね」

レヘナは空間メモリーを左手で握りしめたまま言った。指の間から乳白色の光がこぼれている。指を小刻みに動かして、レヘナはデータの検索を実行した。そのまま正八面体をテンプルの上に置く。右の肘をついて、レヘナはシナルクを見据える。シナルクの視線はレヘナを向いていない。視線は下の正八面体に注がれていた。

乳白色の光は部屋に漂う微小な塵によって浮かび上がり、テンプルの上に複雑な光模様を描いている。

シナルクは権力者だろう、とレヘナは考える。警察官に伝言を頼むことができる人間は一般人ではない。科学顧問というからには、かなり上の地位にいるはず。今この惑星の文明を滅亡させようとしている存在とコンタクトを取るには惑星の権力が必要だ。その意味でシナルクは役に立つかもしれない。最終的に情報船団をこの惑星で構築するには、この惑星の資源を総動員しなければならぬ。唯一のガス惑星が消滅してしまった為、あらゆる資源をこの惑星から取り出さなければならぬ。重力は地球の〇・九四倍であるから、惑星の重力井戸から物資を引き上げるのには膨大なエネルギーが必要になる。この惑星の文明に完全に協力してもらわなければ実現不可能だ。

レヘナは偶然に感謝した。テイキの父親が権力者であれば、働きかけにテイキを利用することができる。

「私が信用できるかできないかは、見てもらった方が早いでしょう」

レヘナは正八面体を手でつかみ、シナルクの方へ差し出した。シナルクは視線をレヘナと正八面体の間を激しく往復させながらも手に取った。

「包むように持つてください。そしてのぞき込んでください。乳白色の光の全てを浴びるくらいの勢いで近づいてください。そうすれば全てがわかります」

「これは何なんだ？ ティキ」

シナルクはレヘナではなくテイキに聞いた。包むように空間メモリーを持ったまま、上目遣いでテイキを見ている。

「のぞき込んでください、と言われてるんだから、のぞき込めばいいよ。危害を加える様な人じゃないことは僕が保証するから」

そう言いながら、テイキはレヘナを見る。テイキは片目だけまばたきをした。レヘナにはその意味はわからなかった。

「そうか」

シナルクは背中を反らせて正八面体を眺める。頂点を触り、表面をこすった。やはり学者なんだな、とレヘナは思う。謎があればそれを解明したくてたまらなくなる人種。情報収集者の中にも必ずそのような人間はいた。わからないことをわからないまま放っておけない人種だ。歴史の中で、その行動が時として悲惨な結果を招くことがある。だが、飛躍的進歩が起きることも確かだ。

シナルクは背筋を曲げた。両手で前髪を跳ね上げ、顔を徐々に近づける。正八面体は乳白色の光を増す。こぼれ出る光がシナルクの顔に陰影を付けた。レヘナ以外の人間が情報リンクをするのは初めてだった。基本的に人類という種属ならば情報リンクができるはずだ、とレヘナは思う。自分が話をするよりも、五感の伴った情報の方がシナルクは理解しやすいだろう。ここではつきりとした確信を植え付けることができれば、のちのちに情報船団を構築する時に有利になるに違いない。

「そのまままっすぐ中を覗いてください……」

どうやらスペースガードが攻撃した物体は『探査者』ではなかったらしい。

エプロフェンは空間メモリーのデータの海に漂っていた。肉体の感覚をすべて取り払い、意識の全てを空間メモリー内のデータマトリックスに注いでいる。肉体の束縛から解き放たれたエプロフェンの意識は、広大なデータの海のどこへでも瞬時に移動できた。データを視覚や聴覚などの二次情報に置き換えることなく、データをデータとして咀嚼できる為、すさまじい量の情報に身を任せても溺れる心配はなかった。

スペースガードが攻撃した物体は宇宙船だった。ガス惑星フェンがあつた空間には核融合のきらめきの残滓が漂っていた。その残滓の一部は惑星フェンに降り注いだ。『探査者』は核融合など使わない。対消滅すら利用しない。ガンマ線や中性子、ニュートリノなどの核融合の残滓が存在

すると言うことは、その宇宙船が人類が建造したということになる。人類は、『探査者』以外の知的生命に出会ったことは無かった。

エプロフェンは情報の海を潜っていく。データの渦や論理の波が、エプロフェンの身体にまとわりついては離れる。その抵抗がエプロフェンには心地よく感じられた。

情報の海の最下層へ。結晶構造を持つ数学公理や、浮き沈みながら反転を繰り返す拡張ラグランジアン、振動し回転するブラックホールの解等のデータが漂う情報空間をエプロフェンはすり抜けていく。エプロフェンはそれらを美しくと感じた。発見されはしたものの、何の役にも立たずに結局次々に送られてくるデータに埋没してしまった奇抜なデータは、その奇抜さ故にエプロフェンには心地よかった。人類が考案したあらゆる種類のデータがここには存在する。入力された情報は理論上無限に蓄えられるのだから。

やがて海の最下層へと辿り着く。そこには空間メモリーが記録を開始した初期のデータが存在している。

空間メモリーが記録を開始したのは、『探査者』が破壊の限りを尽くし、消失した時だ。人類はわずかに残ったデータをかき集め、すべての空間メモリーの最下層にデータを刻みつけた。

人類が決して『探査者』を忘れないように。

重力波レーザーを受けてフェンのそばにいた宇宙船は消滅した。もしかしたら、生き残りがいるかもしれない。生き残りがいるとしたら、それはエプロフェンが植民を開始してから初めて出会うエプロ住民以外の人間ということになる。

二万五千年前、エプロフェンはある権限を得た。それは植民船由来の人間にのみ行使できる権利だった。今現在惑星エプロに住む人間や動植物はすべて、植民船エプロフェンが胚の状態でこの惑星に持ち込んだ生命の系譜に属している。エプロフェンはそれらを管理できる。

だが、植民船由来ではない人類に関しては、どうだったのだろうか、とエプロフェンは考えた。あまりにも昔であるため、エプロフェン自身の記憶には曖昧にしか残っていないなかった。

エプロフェンは情報の海底に触れる。底を構成する情報が波打ち、データが流れ込んでくる。

『過去を思い出さないといけない。二万五千年前のことを。私が私として生きていた時代のことを……』



エプロフェンはデータの奔流に身を任せた。懐かしい感覚が自分に戻ってくるのを感じた。

エプロフェンは当時の自分へと戻っていく。

今から二万五千年前、西暦二七〇三年七月三日のことだ。

私は、軌道塔の展望室から外を眺めていた。眼下には細長い軌道塔が伸び、次第に細くなっている。細くなつた先には青く輝く惑星がある。半分のみが光っていて、真下が昼と夜との境界点であるということがわかる。夜の側には無数の光の点があり、それが大陸の形を浮かび上がらせていた。軌道塔は私と地球を結びつけている。

見上げると星々が見えた。星は瞬かない。まっすぐに私に光を浴びせかけている。星の密度の濃い場所が天の川なんだろうな、と思いながら私は見ていた。天の川のどこかに『探査者』がやってきた星があるんだよなあ、と平和な頭で考えていた。

私は恒星間植民船のシステム部分の管理を任されていた。この日はシステムの最終調整を終え、私はひさびさの休息を楽しんでいた。恒星間植民船『エプロフェン』は明日、軌道港から発進し、千人分の人間の凍結受精卵と五百種類の動植物の胚を携えて未知の航海へと旅立つ。『探査者』が提供してくれた空間メモリーという記憶媒体を搭載した植民船はエプロフェンで三十二番目だった。シリウスやタウセーティへと出発した初期の植民船達はすでに植民完了のメッセージを地球に送ってきていた。『探査者』が太陽系に侵入してから五十年が経っていた。

太陽系に侵入した時、『探査者』は無反動で減速した。電磁波も何も観測されなかった。質量が減っている様子もなかった。人類が侵入に気づいたのは、『探査者』が土星軌道付近にまでやってきた時だ。『探査者』は地球よりは遠く火星よりは近い円を描く軌道に乗った。『探査者』はほぼ完全な球形で、その球形自体が『探査者』であるらしかった。

その時を私はよく覚えている。恒星間の植民船の建造を夢見ていた若い頃の私は、『探査者』の軌道を見て心を躍らせた。人類は核融合よりも効率の良い機関を持っていなかった。人類とこの知的生命体が交流することで、人類は恒星間の深淵を容易に渡ることのできるテクノロジーを手に入れることができると思っていた。

実際、『探究者』は人類との交流を望んだ。様々な星系を旅し、情報を収集し続けるのが私の使命だ、と言った。すでに冥王星まで探索を終えていた人類はそれらの詳細なデータと引き替えに空間メモリーという技術を手に入れた。そして『探究者』は、人類のデータベースと引き替えに重力波レーザーという技術を提供する用意があると告げた。重力波レーザーというのは重力を操るものだった。人類は重力を操る技術を持っていなかった。重力を操作できるテクノロジーを手に入れば、人工重力も作り出すことができると考えられた。だが、重力波レーザーの本来の用途が兵器であることは『探究者』に言われなくてもわかる事だった。『探究者』が提供した重力波レーザーの『スペースク』は、重力波レーザーがいかに強力であるかを詳細なデータをもって主張していた。惑星ですら破壊できると謳われていた。

なぜ兵器を提供しようとするのか、『探究者』の意図は全く分からなかった。兵器よりも『探究者』の使用している無反動推進システムの技術を教えてくれと人類は交渉したが、『探究者』は拒否した。無反動推進システムの交渉は重力波レーザーの交渉が終わってからだと頑なだった。人類のデータベース、それはニューヨークのマンハッタン島のすべてを覆い尽くす記憶媒体の塊だった。人類が発見したあらゆる情報が詰め込まれている。それを提供してしまえば、人類が提供できる物が何も無くなってしまうと危惧する者もいた。だが、人類の大半は重力を操ることによって行われる技術革新の方が重要だと判断した。提供できる物が無くなっても、新しい物を発見し付け加えていけばいい、そう考えた。私も同じような考えだった。無反動推進システムがもし提供されれば、自分が習得した数々の技術が時代遅れになることがわかっていたから、こののもあったが。

データベースを『探究者』にアップデートするのに二十五年近くかかった。それほど人類の集めたデータは膨大だった。情報のアップデートには『探究者』からただ一つ与えられた重力波通信を利用して行われた。重力波は電磁波よりも根本的に波長が長かった為に、沢山の情報を載せることができなかった。

私は窓に手をつきながら、ある一点を眺める。そこには月の次に明るい場所がある。ここから見えるほどの大きさは無く、点のようにしか見えない。それは『探究者』だっ

た。『探究者』はほぼ完全にあらゆる波長の電磁波を反射する表面を持っている。その表面温度は限りなく宇宙背景放射の温度に近かった。十のマイナス一五乗の桁まで等しいという。すなわち、『探究者』の表面は宇宙自体の温度にほぼ等しいのだった。

人類のデータベースの受け渡しが無事完了すると、『探究者』は重力波レーザーの精密な設計図を人類に送りつけた。そこには重力理論は何も書かれておらず、ただその通りに作れば重力波レーザーができる、としか書かれていなかった。重力を操る技術自体を、『探究者』は明かさなかったのだ。

そして、『探究者』は沈黙した。

私は、明日『エプロフォン』に乗り込む。幸運にも、私は恒星間植民船『エプロフォン』船長に選ばれた。私の決断で、千人分の運命が決定されるのだ。私は何としても植民をやりとげなければならない。

目を細めながら、私はじつと『探究者』を眺めた。あれのおかげで、私は自分が生きている間に恒星間植民船の事業に参加できる。『探究者』が沈黙した為、無反動推進システムを植民船に搭載することは不可能になっていた。それが実在することがわかれば、人類は必ずや自らで作ることができるだろうと、誰かが言っていたが、無反動推進システムが実現するのは私が植民船で旅立った後のことだろう。

私には関係ない。

私は『探究者』を眺めながら思った。

突如、輝点の光の強さが増した。次第に光の強さは強力になっていく。あまりにもまぶしくて、私はそれ以上見ていられなかった。何が起こったのかよくわからなかったが、『探究者』がほぼ二十年ぶりに活動を開始したことだけは間違いないだろう。

私は胸騒ぎがして、『エプロフォン』が係留されてあるドッグへと向かった。強大な光はコントラストのはっきりした私の影を展望室に投げかけていた。

植民船は完全に準備ができていた。出発が明日なのは、式典の都合だった。核融合用燃料も積まれ、ラムジェットも調整も完了している。人間も動植物も積み込まれている。私は植民船に乗り込んだ。巨大な植民船の廊下を走り、艦橋に辿り着く。息を切らせながら親指で認証を済ませると、私の視野一杯に宇宙空間が現れた。片隅にはウィンドウが

次々に立ち上がっている。私はすぐに『探究者』の姿を探した。

さっきまでいた場所に『探究者』はいなかった。光点があった場所は他の宇宙空間と何も変わらないように見えたのっぺりとした黒だけが存在した。

音が溢れた。警告音が艦橋に鳴り響く。情報ウインドウが視界の真ん中に現れた。

私は息を呑んでそのウインドウを注視した。

『探究者』が突如人類に対して攻撃を開始したのだ。軌道塔の管制は混乱の極みに達している。『探究者』は重力波レーザーで月を攻撃し、十億の人間もろとも月を消失させたらしかった。

私は月が見えるはずの場所に目を向ける。だが、肉眼では月を確認できなかった。頭の中で無数の『なぜ』が増殖していくのを感じた。

無数の光点が宇宙空間の中で煌めいた。情報ウインドウが、煌めきの正体は木星から帰還しつつあった船が放ったミサイルだと報じている。私はそのミサイルの進行方向を目で追った。『探究者』が見えることを期待したのだ。一体何が起きているのか、私は知りたかった。

数え切れない光点が一つの大きな輝点に変わる。

戦争が始まっていた。人類が持つありとあらゆる武器が『探究者』に向けて使用されていることを情報ウインドウは示していた。

私は、宇宙空間に星よりも明るい光が瞬いては消えるのを横目に、植民船を動かした。軌道塔から『エプロフェン』はゆっくりと動きだし、核融合炉に火がつく。

私は生き残らなければならなかった。『探究者』の攻撃から植民船を守らなければならなかった。

そのためには何だっぺやろうと思っっている自分の心に私は驚いた。

船の速度が上がっていく。軌道塔の管制は私の船に対して何も言わない。管制は『探究者』の事で手が一杯らしい。ラムジェット用の電磁ネットを前方に徐々に展開しながら、私はただ様子を眺めていた。

「実のところ、本当にこれでいいのか、私にもわからない」  
シナルクが言った。ティキは飛行機の左手の窓から見え

る景色を眺めていた。コーヒーカップが何かに静かに当たる音が右側から聞こえた。

緑色に縁取られた海岸線が見えた。ゆるやかにカーブを描く海岸線よりも外側には濃紺色の海が見える。高度が高すぎて一つ一つの波を見分けることはできない。光が海面の上で揺らめいて、空の青と緑がちらちらと目に飛び込んでくる。青の中から、ときおり白い色が噴出していた。巨大な海獣かなとティキは思う。

ため息をつきながらティキは窓枠から目を離す。

四人乗りの飛行機の中は広すぎずも狭すぎずもなかった。前方には大きなガラスがあり、青緑の空と白い雲が見える。操縦席と呼ばれるものは存在していない。機体と繋がった手袋が一組フックにかけられているだけだ。機体は完全自動操縦で、あらかじめプログラムされた軌道を飛ぶことも、音声で場所を指示して飛ばすこともできる。もし自分の思うとおりに動かしなければ手袋をはめる。手袋は圧力を感知し、ごく自然な動きで機体を動かすことができる。

機体の真ん中には通路があり、両側に二つずつ、計四つの席があった。ティキとシナルクは左側の席、レヘナは右側の席にいる。レヘナは一人で窓の外を眺めていた。左の指先で正八面体を弄びながら、右手を窓につけている。ときおり正八面体の光がティキの目に飛び込んでくる。それはやはり乳白色だったが、ティキには光が前よりも鋭く感じられた。

機内は非常に静かだった。見える景色が違うだけでバスや地下鉄と変わらないな、とティキは思う。

エンジンの音や空気と機体が擦れ合って生じる音はすべて注意深く消音されている。音波を制御する技術はプライバシーの観念の発達から生じたものだったが、音波は結局の所空気の濃度変化だ。音波制御技術はすなわち空気制御技術だった。空気の流れを制御することにより、通常なら飛べないような小さな出力のエンジンを使用しても飛ぶことができる。出力の小さなエンジンは大きなエンジンよりも騒音が少ない。そのために消音する為の労力がより小さくて済む。

プライバシーの尊重という事に特化したことによって、自分たちの音声制御技術は極端に発達している、とティキは思う。レヘナが見てきた文明にだって負けていないはずだ。

「ティキ、聞いているか？」

膝を触られた感触で、ティキはシナルクに話しかけられている事に気づいた。シナルクの言葉は独り言ではなかったらしい。ティキは膝の上に置かれたシナルクの手をゆっくりと退かした。

「いや、すまなかったと思っている。許してくれ、ティキ」  
「まったく。吹っ飛ばされる身にもなっただけだよ」

ティキはレヘナの方を見た。やはり正八面体をいじりながら窓を見ている。シナルクもレヘナを見ていた。シナルクは椅子に備え付けられたボタンに指を這わせる。ティキの方を見、またレヘナを見る。そして再びティキを見た。顔つきは真面目だった。

「押すぞ」

「いいよ」

シナルクはボタンを押した。ティキは耳鳴りを感じた。周りの空気が何処かに吸い込まれていきそれに合わせて肺が膨張しているように感じた。ティキはシナルクの傍らの小さなテーブルに置かれたコーヒーカップを手に取り、叩いた。

音はしなかった。

指向性の高い消音装置はきつちりと仕事をしている、とティキは思った。二つの席において、シナルクとティキの声以外の音はすべて消音される。個室を用意できるほどのスペースの無い移動手段においてよく用いられる手法だった。他の乗客に知られたくない会話をする時に用いることができる。

ティキはカップを強く叩いた。カップを持っている手に鈍い衝撃が伝わる。だが音は周りには響かなかった。

レヘナを見る。何も気づいていないらしく、様子は何も変わっていない。

「で、わざわざ消音したんだから、何か言いたいことがあるんでしょ？」

ティキはシナルクをじろりとにらみつける。シナルクは軽く微笑んだ。

「ああ。レヘナに聞かれたくないから私は消音したのだよ。この機体は政府の所有のものだから、消音の程度は一般のレベルとは桁が違う」

「で、何」

ティキはまだシナルクを許していなかった。失踪された日のこの上もない喪失感、疎外感、見捨てられたという感情、すべてを克明に覚えている。胃を掴まれて押し上げら

れたような、地面に足がついていないような感覚を忘れる  
はずがなかった。

ティキにはシナルクが何を考えているのかさっぱりわからなかった。胸ぐらを掴まれ放り投げられた時も、その後  
に態度が一変した時も、シナルクの意図がわからなかった。  
愛情表現ではないことははっきりとわかっていた。だから  
こそ、なぜ「愛情表現だ」と言ったのがわからなかった。

ティキはシナルクを見る。鏡に映った自分の顔のよつだとティキは感じた。鏡の向こうだけ数十年の時が経ってしま  
ったかのような顔。

真つ黒な瞳はティキしか映していない。それが鏡との違  
いだった。

ティキはシナルクのように、他の様々な事を犠牲にして  
まで一つのことには打ち込むことはできない。どうしても周  
りを気にしてしまう。天文学に興味があったというのに、  
深く知ろうとはせずに子ども向けの本の情報で満足してし  
まっている。深く知るには他の人の協力を仰がねばならな  
い。だが、天文学という全く実用にならない学問に熱中し  
ている事が他の人に知られたら、と考えるとそのようなこ  
とはできなかった。「あの失踪した男の息子だからか」と  
言われるのが怖かった。

そもそもこの目の前にいる男がすべて悪い、とティキは  
はつきりと思っている。父さんが失踪さえしなければ、自  
分は好きなことに好きなだけ熱中できたかもしれないのだ。  
漆黒の瞳はまばたきをした。

「実際の所、彼女が惑星外の人間だということは本当なの  
か？ あの映像を見せられても、まだいまいち実感が無い  
のだが」

レヘナはシナルクに情報船団の概要と使命を視覚聴覚的  
イメージを使って見せた。ティキはその様子を横から眺め  
ていた。シナルクは正八面体をのぞき込みながら、激しく  
貧乏揺すりをしていた。額には汗が浮き上がり、目は見開  
かれていて、その目には乳白色の光が絶えず当たっていた。  
その様子をレヘナはテーブルに肘をつけながら微笑みなが  
ら眺めていた。ティキには異様な光景にしか見えなかった。  
その異様さがレヘナが惑星外から来た人間であることを証  
明するのもかもしれない、ともティキは思った。

ティキはコーヒーカーップを両手で弄ぶ。冷たいカップが  
手のひらの中でゆっくり暖まっていくのを感じた。

「あの正八面体を作る技術を僕たちが持っていないことは

明らかじゃないか」

「けれどそれは証拠としては充分ではない。そんな間接的証拠ではなく、本当に外部からやってきたという直接的証拠が欲しい。お前は何か知っていないか？ お前は彼女が上から降ってくるのを見たんだろう？ はっきりとした証拠になるようなものを知っているのではないか？」

「証拠なんて知らないよ。なんでそんなに証拠にこだわるんだ。すでに誰かが惑星外からやってきたことはわかっているんだろう？」

テイキは内臓が持ち上がるのを感じた。前方の窓を見る。さつきまでは見えていなかった地平線が見えていた。緑と青がごちゃ混ぜになったビル群による地平線だ。窓の上部に水平線が固定されている。機体が徐々に高度を下げていく証拠だ、とテイキは考えた。

手を引つ張られる感触でテイキは手元を見た。シナルクがカップをテイキの手から奪い取っていた。カップの端に口をつけて飲み干す仕草をしている。逆さまにしても何も出てこなかった。もう完全に飲み干されていたからだ。シナルクの喉が動く。それは何かを飲み込んでいる様子に見えた。

「ああ、わかつている。政府は地球を周回している小型艇の存在も把握している。だが、レヘナがその小型艇に乗ってきたということは断言できない」

コーヒーカップを荒っぽくテーブルに置いてシナルクは言った。音は立たない。テーブルは微小に揺れた。

「私は政府の代表だ。明白な証拠がない限りレヘナが惑星外から来たということを認めることはできない。今はあの球体、通称『管理者』を何とかするのが先決だ。だからおまえに聞いている。レヘナの処遇はその後だ。どっちみち彼女には個人識別番号はない。調べるには興味深い対象だろう。もう一度聞く。本当に証拠を知らないか？ 何でもいい。私が納得できるようなものなら何でも構わない」

「知らないよ」  
ぶつきらぼつにテイキはつぶやく。シナルクから目を離し、下を向く。椅子の側面の『プレイバシーモード解除』のボタンを押した。途端に静寂のレベルが下がる。空気の緊張が解けた。

テイキには本当に文明が崩壊するということが信じられなかった。図書館は確かに崩れ落ちて、確かにジーンスは死んだが、それらはとんでもなく運が悪かったこと、ただ



の偶然のように思えた。とてもそれが惑星規模の崩壊と繋がっているとは思えなかった。

今ティキ達は首都に向かっていた。

惑星の唯一の大陸には九つの都市があり、中央の都市が首都と呼ばれている。都市間は地下鉄で結ばれていたが、より早い移動手段をということで、シナルクが政府の飛行機の利用許可を得たのだった。飛行機は五時間ほどでティキの所属している第六都市と首都間を移動する。もうすでに三時間近く経っていた。

前方の窓にはやはり地平線が見えた。さっき見た時よりも若干高度が下がっているとティキは思った。首都はビル集合体で、円や球が様々に組み合わさって、一つの生き物のように見えた。動きは見られないが、確実に何かがいる、そんな印象をティキは受けた。青や緑の配色は非常に空の色に似ている。空に似ている事は上空から見ないとわからないだろうなとティキは思う。恒星エプロフェンズが空の中天にかかっている、若干眩しかった。

この飛行機が向かっているのは首都の中心だった。首都の中心はまだこの距離からは見ることができなかった。今広がっている景色はすでにティキの所属している都市の中心部に到達していたが、首都の中心ではない。

首都の中心にはシナルクが『管理者』と呼ぶ物体が宙に浮いている。その物体が浮いている為に、首都の中心部は無人数化されていた。半径二十キロメートルが避難区域にされている。

浮いているということがティキには信じられなかった。空に浮き続けるということは、絶えず重力に抗し続けるということ、それには莫大なエネルギーが必要な筈だった。ヘリコプターのように回転する翼があるわけでもない完全な球が、どのようにして飛び続けているのか、さっぱりわからなかった。

ティキ達は首都中心から三十キロメートル離れた政府の臨時対策本部に向かおうとしている。そこにはティキが映像でしか見たことがないアスツールという大統領がいる。シナルクが正八面体の映像を大統領に見せなければいけないと言ったからだ。レヘナは権力者に会うことを欲していた為、大統領に正八面体の映像を見せることに同意した。

ティキは椅子から立ち上がる。ひさびさに立ち上がったのでめまいを起こした。目の前がほんのりと白くなりながらも、背もたれに手を掴んで体勢を保つ。一息を吐いてレ

ヘナの席へと向かった。ティキがシナルクの前を通り過ぎる時、シナルクは無言でティキを見つめていた。ティキはシナルクの視線を外しレヘナを見た。

相変わらず窓の外を眺めている。飛行機に乗る前に着替えたネイビーブルーのダブルスーツがよく似合っている。クリーム色のブラウスの襟の近く、赤い髪の間から時折うなじが顔を見せている。

「何を見てるんです？」

ティキがそう言うと、レヘナは振り返った。その表情は物憂げだった。ティキはレヘナの隣の席に腰を下ろす。レヘナは正八面体をリュックに入れた。

「外の景色。空間メモリーに記録させておこうかな、と思っ  
て。小型艇からの映像も記録してあるけど、なるべくいろいろなデータがあつた方がいいから」

リュックを足下に置きながらレヘナは言う。

ティキはレヘナの席の隣、アームレストの側面に備え付けられたボタンを押した。ティキとレヘナの周りに静寂な空間が広がる。レヘナはすさまじい勢いでティキを見た。口を閉じ、両手を耳に添えて目を見開いている。黒目の下へ移動し、アームレストに置かれたティキの手を見て止まった。

「プレイバシー空間に設定しました。これで僕とレヘナの会話を聞ける人はいないです」

レヘナはアームレストを指先で叩いた。音はしない。

「すごいわね。音波制御技術がここまで来ると。空間メモリーのデータベースにもこのレベルの音波制御技術は存在してないわ」

レヘナは微笑む。ティキもまるで自分のことが褒められたかのように顔が綻ぶ。両手で頬を軽く叩いて、ティキはレヘナを見つめた。

「ふと思ったんですけど、空間メモリーにはどのくらいの情報を蓄えることが出来るんですか？ 今現在、この正八面体のデータベースにはどの程度の量の情報が入っているんですか？ どんな原理で蓄えているんですか？」

図書館とネットワークの有意な情報全部というのがどのくらいの量の情報なのか、ティキには想像がつかなかった。だが、ものすごい量であることは確かだ。ティキの知っているどの記憶媒体をその極限にまで理想化しても、絶対にこのサイズに収めて蓄えることは出来ない。

「この正八面体の内部の空間に、情報を直接パターンとし

て刻み込んでいるんじゃないかな。詳しいことはよくわからないけど、量子化による限界を突破しているのは確かね」

世界は、プランクスケールと呼ばれるものすごい小さな領域ではデジタルだ。エネルギーは連続的な値をとることができず、とびとびの値しかとれない。エネルギーの最小単位というものがあって、それが何個あるかでその物体のエネルギーが決まる。その最小単位が小さすぎる為に、一見すると世界はアナログに見える。それらのことをテイキは何かの科学読み物で読んで知っていた。その読み物には、「情報の記述方法をいくら工夫しても、その最小単位よりも小さい領域に情報を収めることができない。情報の記述される間隔をプランクスケールにまで狭くした記憶媒体は、理論上情報密度最大の記憶媒体である」と書いてあった。これが量子化による限界と呼ばれるものだった。

テイキが額に手を当てて考えていると、レヘナは笑う。「空間メモリーの原理を人類は知らないわ。いくら考えても想像もつかない。人類は作り方だけを『探査者』に教えてもらったのだから。蓄えられる情報に制限はない、と『探査者』は言ったわ。今現在これに蓄えられている情報の具体的な量は、私にはわからない。情報船団が二万五千年かけて集めた無数の恒星系の情報や、新しく情報船団を作り出す為に必要な知識やデータが入ってる」

テイキはめまいがした。制限がないということは、無限大ということになる。そんな夢のような記憶媒体が存在するなんて、テイキには信じられなかった。けれど、それが目の前にあるのは確かだった。量子化による限界を超えていなければ、とても図書館の情報等を収めることが出来ないのだから。

「じゃあ、蓄えられる情報が無限なら、もっと小さくしてもいいんじゃないんですか？ 首にかけられる程小さい方が、いろいろと便利ではないのですか？」

レヘナが苦笑する。

「ほんと、テイキは情報収集者に向いているわね。すぐに疑問点が浮かぶところがすばらしいよ。情報密度を理論上では無限大にまで高めることができるけど、その情報を処理する速度は無限大ではないの。情報を処理する速度は、空間メモリーの体積が大きくなるほど速くなる。だから、小さすぎると実用にならない」

レヘナは正八面体をこつこつと叩きながら言った。もち

るん音はしない。

「もし、それを壊したらどうなるんですか？ 周囲の空間は無限大近い情報を蓄える事ができませんよね。もしかして、周囲の空間が崩壊したりとか」

「テイキ」

レヘナは真面目な顔をしてテイキを見つめていた。鮮やかな青の瞳がテイキの顔をのぞき込んでいる。テイキは汗が引いていくのを感じた。

「いいかげん、本題に入ったらどうなの？ あなたが本題に入るのを先延ばしにしているの、わかるよ？」

レヘナはやや詰問口調で言った。テイキはその青い瞳を恐ろしいと感じた。何もかも知っているかのような瞳のつペリとした青。テイキは顔を若干俯かせてレヘナの瞳から一旦目をそらす。軽く息を吐いて、ゆっくりと顔を上げる。

レヘナは微笑んでいた。もう瞳は恐ろしくなかった。

「これからどうするんですか？ 僕たちは何をすればいいのでしょうか」

大統領に会った後、レヘナがどうするのかテイキにはよくわからなかった。政府が状況のかんりのことを把握しているのだから、自分たちがすることは何も無いように思えた。政府がレヘナ達情報船団について考えるのは、シナルクの言ったとおりこの状況を何とかした後であることはつきりとわかっていた。

「どうするって、その『管理者』に会うしかないでしょう。

この惑星にある政府は、残念だけど当てにならないわ」

レヘナはそう言いながら席や窓を軽く叩いていた。音が出不いことを確認しているらしい。

「本当にそうでしょうか。政府はきつと何とかしてくれませよ。今だって攻撃の準備をしているはずですし。政府は五百年間で開発したすべての兵器を所持しているんです。球体を落とす事くらいわけないです」

図書館を崩壊させた『管理者』と名乗る存在は、惑星工プロの全ネットワークを掌握していた。ネットワークを使用できないので、人々は大混乱に陥っているということ、シナルクから聞かされた。ネットワークが使えなくても、空中波を使った通信はできるので文明が無秩序化されるということはなかった。だが、普段ほとんどをネットワークに拠っている社会の情報の流れは太く、空中波で伝えられる容量の限界を超えていた。電離層が薄い為、反射できる周波数帯が限られていたのだ。そのために政府は空中波に

よる通信の制限を行っていた。

テイキは首をひねってシナルクを見た。シナルクはテイキが座っていた席に移動して窓からの景色を眺めていた。丸みを帯びた背中には灰色のよれよれのスーツがくっついてる。

自分が失踪したのは、政府にスカウトされたからだった、とシナルクは出発前にテイキ達に言った。『管理者』が常日頃からネットワークの情報の流れを監視していた可能性がある為、政府は自分と表立って接触することができなかったんだ、とも言った。

シナルクが歴史循環説を唱えた時、実は政府はその理論に注目していた。自分たちが行っていることに何者かが微かな修正を加えているという危惧を政府は持っていた。

歴史循環説というのは、約五百年周期で文明の滅びが繰り返されている、というものだった。五百年前のデータは現存していない。それはどこにもなかった。しかし、四百年前にはすでに人間は電子ネットワークを構築できるレベルにあった。それは極めて不自然なことだ。五百年前に歴史が始まったとすると、その発展の歴史は急すぎた。

それはあらかじめ知識があり、その知識を活かせるように技術が追いつくことよって文明が発展したからだ。とシナルクは結論付けている。つまり、五百年以上前にも文明が存在し、それが何らかの原因で破壊され、今に至っているのではないか、という事だった。さらに、五百年前の地層が放射能汚染されている事と関連性があるとシナルクは考えている。シナルクは五百年以上前の地層を調べていた。

地層は破壊され層状にはなっておらず土は混沌としていたが、地下二十メートル以下の場所に微量な放射性元素の反応があった。半減期から逆算すると、それは間違いなくちょうど千年前の土だった。地下四十メートルの場所には、二十メートルの箇所よりもさらに百分の一の量の放射性元素があった。それは非常に微量で、半減期を推定する事もままならないほどだったが、長期広範囲にわたる作業の結果、その辺りの土が千五百年前のものだということがわかった。それ以上深い箇所にも放射性元素が存在するとシナルクは確信した。だが、その量は検出できる程の量では無いこともわかっていた。自然の岩石が通常帯びている放射性元素の量よりも多いのか、それとも単なる装置の検出誤差なのかかわからない程度の量であると推定されたという。シナルクはその事に意図的な介入が含まれていると結論づけた。

つまり、何者かが周期的に文明を滅ぼしている、という事だった。

植民が行われたのは遙か過去の筈なのに、植民が行われたという情報がどこにもないというのも政府が危惧を感じた理由の一つだった。それから政府は従来のネットワークから完全に切り離された活動を行うようになった。そこで『管理者』の情報を収集し、現れた時に対処できるように作戦を練っておくことにしたのだ。

百年ほど前に惑星全土が一つの政府になってから争いが無くなったというのに兵器開発を続けていたのはそのような理由からだった。

そして、今、『管理者』の球体を攻撃しようと準備が進められている。

テイキにとって、政府というのは地面のようなものだった。決して揺らぐことがないものだ。これまでも存在し、これからも存在する。『管理者』が何者であろうとも、政府には敵わないと思っていた。驚異的なハッキング能力を持つているとしても、ただそれだけだ。

「レヘナ、政府を甘く見ない方がいいですよ」  
レヘナの眉が上がった。

「ねえ、結局それを言いたいが為にわざわざ消音モードにしたの？ シナルクに聞かれたらまずいことでも何でもないじゃない。私はシナルクが政府の代表であろうと何であろうと、政府は当てにならない、と言っわ。この飛行機に乗る前にも言ったし」

レヘナはテイキの手の上に自分の手を重ねた。テイキは暖かい手の感触が手の甲を通って頭に流れ込んでくるように感じた。心臓の鼓動が早まった。上目遣いでレヘナを見る。レヘナは無表情にテイキを見ていた。

「早く消音モード解除してくれないかな。ほら、君の手の下にボタンがあるんでしょ？ 私とテイキの声以外の音が聞こえない状態って、なんか気持ち悪いの」

そう言っレヘナはテイキの手から手を離れた。テイキは慌ててボタンを押す。かちりという音がしてボタンが押し込まれる。空気の緊張がゆるんだ。レヘナがリュックを手にとって立ち上がる。右手をリュックに入れて中をあらさっていた。

「そろそろでしょう？ シナルク」

シナルクが振り向く。腕時計を確認した。そして頷いて立ち上がった。

「ああ。そろそろだ。前へ行ってみよう」

ティキは二人が前へ行くのを座ったまま眺めていた。二人は手袋が二つある前方へと向かっていった。ティキはあえて前に行こうとは思わなかった。軽く腰を上げて、レヘナが座っていた席へと移動する。席はまだ暖かい。窓に手をつけて外の景色を眺める。景色はあまり変わっていない。先ほど見た時よりもややビル群の密度が増しただけだった。ゆっくりと機体が傾いた。ティキはやや前のめりになり、窓についた手に力がかかる。機体は右に旋回を開始しようとしていた。臨時対策本部への着陸が近づいていたのだった。だが、ティキの目からは臨時対策本部らしき建物は見えない。ティキはその建物を見たことがなかったが、他の建物とは違うと思っていた。見えるのはティキの所属する都市によくある円形と球が複雑に絡み合った建物群だ。目を凝らすと、重力に逆らっているかのような形の建物もある。ティキはどつやってあんなところで生活するのだろうか、と思った。

「リンクが繋がったぞ、ティキ」

前方でシナルクの声がした。それと共に、さっきまで無かった音が溢れた。あわただしい音だ、とティキは思った。沢山の人の声が一緒くたになつて聞こえてきている。

ティキは窓から手を離し、立ち上がる。シナルクとレヘナがいる飛行機前方へと向かった。

真正面のガラスは今は半透明化しており、その半透明なガラスの上にある男が映っていた。ライトグレーの髪の毛は縮れ、中心から離れようとする植物のように見えた。真ん中にはしかめ面の顔がある。何度も見たことがある顔だ。だが、いつも映像で見る顔よりもその顔は老けて見えた。

ティキ達の乗る機体と臨時作戦本部は空中で直線を描けるほど接近し、そのために電離層での反射ができない振動数の高い電磁波によるリンクが確立した。振動数が高いということは一秒間に振動する回数が多いということであり、振動する回数が多いということはそれだけ情報を沢山載せられるということだった。

ティキはこの男が政府そのものであることが信じられなかった。いつもの底なしの自信はどこへ消えたのだろうか。満身創痍のように見える。

男は喋り始めた。

まったくあいつはやっかいなものを持ち込んでくれたものだ。

パイプ椅子に座っているアスツールの前の壁には、複数のスクリーンがある。一辺が三メートル以上の巨大なスクリーンが壁中央付近に二枚、あとは上下左右に八枚ほどが壁に貼られてある。急ごしらえで作られた為に、左隅の上にあるスクリーンは角が少しめくり上がっていた。有機分子ディスプレイは柔らかすぎるのが問題だ、とアスツールはいつも思っている。

臨時対策本部というのはその名の通り臨時のもので、民間の高等教育施設を政府権限で利用している。生徒が使うような粗末な机が六つ並べて置かれてあり、その上に首相室から持ってきた執務執行用の操作機器が置いてある。部屋はかなり広く、他にも机は様々な配置で置かれ、その机の間やスクリーンの前を忙しく人が動き回っている。ヘッドホンを耳に付け、ひたすらに操作卓と格闘している人間もいる。ネットワークが使えない為に、直結されていた人工知能群が役に立たず、人海戦術のように人間があらゆる事を行わなければならなくなっていた。

ネットワークを乗っ取られたのはアスツールにとって予想外の事態だった。ネットワーク経由では絶対に『管理者』関連の情報を流さないように箱口令を敷き、ネットワーク利用には細心の注意を払ってどんな異変も逃さないように指示していたのだが、全然効果がなかった。一瞬で各都市に三つずつあるサーバー群がすべて乗っ取られ、サーバーに搭載されていた高度セキュリティ対策用人工知能はあらゆる暗証番号を強制的に書き換えてしまった。サーバー群を物理的に切断して住民の生活に直接の悪影響が起きることを防いだが、住民のほとんどはネットに依った生活をしていた為、結局甚大な経済的被害が出ている。

この日の為に用意した限定核ミサイル三十発はネットワークと繋がっていない。純粹に電気信号を伝えるスイッチを押せば発射でき、その後はミサイルの先頭に搭載された限定人工知能が目標までミサイルを誘導する。

限定核ミサイルは、爆発時に全方向に広がるエネルギーを上下方向のベクトルを加えて修正し、爆発の影響を広範囲に広げられないようにしたミサイルだった。これを使えば爆発の被害半径を任意の長さに制限することができる。半径を制限した分、垂直方向には従来の核兵器の数十倍のエネルギーを解放させることができる。『管理者』の



球体の半径は四百メートルほどだったので、爆発半径は五百メートルに設定してあった。

そのミサイルのスイッチの収められた箱は、アスツールの執務執行機器の隣に置いてある。透明なフタの中に丸い赤いボタンが見える。赤いボタンは真新しく、光沢を放っていた。箱には小動物の尻尾のようなコードが伸び、他の無数のケーブルと共に束ねられて床を這って壁に消えている。

アスツールは透明なフタを撫でる。フタは冷たかった。指先で叩くと乾いた音がした。アスツールは小刻みにフタを叩き続ける。

中央のスクリーンにシナルクの顔が映る。その顔には微かに微笑みが浮かんでいた。アスツールはその笑みを不快に感じて眉をひそめる。

「シナルク、例の情報過多なヴァーチャルリアリティ発生装置の事は直接会った時に話す。まもなく攻撃を開始する為におまえと話している余裕はあまりない」

スクリーンの端、シナルクの顔の左隣に赤い髪の女がいたことにアスツールは気づいた。あの女がシナルクの言っていた例の女であることは容易に想像がついた。髪の毛の色を赤く染める人間は惑星エプロにはほとんどいない。シナルクの言うとおりあの女が惑星エプロの人間ではないとしたら赤い色の髪の毛に納得がいく。だが、ただ染めている可能性もあるため一概には言えなかった。女はシナルクと一緒にアスツールを見ていた。瞳は青い。あり得ないほど濃い青だった。アスツールは長年の政治家生活の経験により、瞳が単一の色に染まっている人間はある一つの物事にこだわっている場合が多いことを知っていた。シナルクの瞳の色も、自分の瞳の色も単色の黒だった。

シナルクの右隣にはシナルクを若くしたような顔の青年がいる。きっとシナルクの息子だろう。シナルクにかなり似ていたが、瞳の色は単一ではなく黒色の他に茶色も含まれている。

アスツールはまっすぐにシナルクを見た。

「おまえが歴史循環説を発表してくれたおかげで、政府は『管理者』が出現する十年以上前から対策を練ることができた。感謝している」

「光栄です」

シナルクが小さく頭を下げる。アスツールにはその行為にシナルクの気持ちは何も入っていないことを知っている。

シナルクという男は自分の欲に純粹な男だ。自分の欲の為に息子ですらためらい無く捨てた男だ。政府に忠誠を誓わせることなどできないとアスツールは思っている。権力欲と知識欲が人よりも格段に強く、猜疑心の塊で、人間的にどこか欠けた部分がある。それでもシナルクは優秀な男だ。政府の存亡の危機においてはどんな人間も有効活用しなければならぬ。

アスツールは赤い髪の子を見た。今の危機を乗り越える為に、この子の言っていることが必要かどうか。最終的な判断はその映像とやらを見てからになるが、今のところアスツールにはこの子に利用価値を見いだせなかった。

「シナルク、その隣にいる女性に代わってくれ」

「了解しました」

シナルクが席を立つ。ゆっくりとした動作にアスツールはいらついた。指先でミサイルのスイッチを前より激しく叩き始める。入れ替わりに女が席に座る。女の髪の毛がふわりと一度左右に揺れた。

「君が星系外から来たと言う人だね。はじめまして、私は大統領のアスツール・M20だ」

女が微笑む。アスツールの指の動きが止まる。その微笑みにアスツールは何故か身の危険を感じた。身体中によくわからない焦燥感が広がっていくのがわかった。その焦燥感の原因がわからず、さらに焦燥感の広がりが加速していく。アスツールはまばたきをして大きく首を横に振って気持ちを切り替えようとした。

「はじめまして、私は……」

「いや、君の自己紹介を聞いている時間は実はないのだよ」アスツールは女の声を遮って言った。この女の声を聞いていると、自分が程度の低い人間のように思えてしまう。確固とした決意、信念が崩れていくような気がした。

手探りで片手でミサイル発射ボタンのフタを開ける。途端に静けさが同心円状に広がっていく。アスツールは目をつぶり小さく息を吸い、吐いた。そして目を開ける。

「君が何者なのかは私はわからない。だが、君が客人であることは認めよう。私が演出するシヨールを楽しんでくれたまえ」

アスツールは親指で目一杯ボタンを押した。かちりという音がした。シナルク達が映っていたスクリーンが真っ青になる。次々にスクリーンが青く変わっていく。

壁にかかっている全てのスクリーンが青くなった後、す

ぐにスクリーンに映像が現れた。

アスツールは喉を押さえた。息が苦しかった。脈が速くなっていくのが喉を掴んだ手からわかった。荒い呼吸が止まらない。その部屋にいた全員が立ち上がって、スクリーンに現れた映像を眺めている。どのスクリーンの中央にも『管理者』の球体が映し出されている。

アスツールの肩に手が置かれる。アスツールは振り返った。副大統領でもあるアスツールの妻が心配そうにアスツールの顔を見ていた。金色の髪に青い瞳、端正な顔立ちの妻を見ているとアスツールの心は安らいだ。

「大丈夫だ。ただ、ちよつと息切れしただけだ」

「そう、ならいいんだけど」

妻がアスツールの首に手を回す。ミントが香った。

「あなたは間違つてないわ。絶対に間違つてない。あなたはこの惑星のすべての人間の代表なんだから、堂々としていなければいけないわよ」

妻がアスツールにしか聞こえないような小さな声でささやいた。

「わかってるさ」

ボタンを押しているアスツールの指先は赤い。すべての指が赤く腫れ上がり、無数の細かい傷が付いている。瓦礫を手でかき分けたせいだ。ボタンから親指を離すと、指先から血が滴った。傷口が開いていた。

赤いボタンは、さらに赤くなった。

#### 十四

レヘナの顔を見た後の大統領はおびえていた、とテイキは思った。

三人はもとの席に座っている。飛行機は上昇を始めていた。シートに身体が押しつけられるのを感じる。テイキは窓から景色を眺めていた。

地平線が傾いている。ビルの群れがどこまでも続いて、太陽の光が複雑な経路を描いて反射している。煌めく場所もあれば、まったく光らない場所もある。青や緑の影が高低差をなして立体感を増幅させていた。

大統領がミサイル発射スイッチを押した為に、臨時対策本部に降りることができなくなっていた。最優先事項は『管理者』であるから、レヘナの事を大統領が構っていられなくなったのだった。限定核ミサイルは首都郊外に位置する

発射基地からすでに発射されている。首都中心から半径五十キロメートルに避難区域が拡大された。ティキ達は高度を上げて旋回し続け、ミサイルをやり過ぎることになっていた。臨時対策本部からのデータ送信により、攻撃が終わった後に臨時対策本部に着陸するように飛行機はプログラムし直されている。

飛行機が高度を上げようと上へ傾く。上昇するにつれて地平線の向こうから建物が現れてくる。ティキの見える窓の方向は首都中心の方向だった。現れてくる建物は周辺部分よりもより複雑な建物で、本当に人間が住めるのかわからないような建物もあった。三日月型の物体が細長い支柱の上の球形の物体に複数ぶら下がっている建造物もある。

飛行機が横に傾いた。旋回が始まり、景色が変化する。首都中心方向が視界の隅から消えていき、次第にビル群の密度が減っていく。そしてまた増えていく。螺旋を描いて飛行機は上昇していた。横方向の押しつけが何故かティキには心地よかった。

ティキは反対の窓側に座っているレヘナを見た。レヘナは正八面体を片手で握りしめて窓に手をつけている。正八面体からは乳白色の光がこぼれ落ちるように光っていた。出てくる光は重力に引かれていくかのように下へと落ちていた。液体のようだと思っただけでティキは思った。なぜそのような現象が起こるのかまったく謎だった。こぼれ落ちる光はレヘナの手を伝って肘へ向かい、肘の先から消えていた。したたつた光はレヘナの膝の上で跳ねて消えている。

ティキは立ち上がる。床は旋回の為に傾き緩い上り坂になっていた。ティキはときどきバランスを崩しながらもレヘナの席へと向かった。

「これ、なんですか？」

ティキは正八面体の光を指さしながら言った。レヘナは窓から顔を離し、ティキを見る。窓から顔を離れた瞬間に光は消えた。レヘナは不思議そうな顔で「なんのこと？」と聞いた。正八面体はすでに光を発しておらず、ただの透明な物体になっていた。

「今、光が変じゃなかったですか？ 水みたいにごぼれていました」

「そ、そんなことないわよ。ただ景色を記録していただけ」  
レヘナはティキから少し目をそらして言う。ティキは視線の先を追ったが、そこには天井に備え付けられた電灯があるだけだった。太陽がまだ空にある為、電灯は光ってい

ない。

「どうしたんですか？ 何か様子がおかしいですよ。具合が悪いんですか？」

ティキはレヘナの顔を見た。なんとなく顔色が悪いような気がした。ほんの少し頬に青みがかっているようにティキには見えた。ティキが見つめるとレヘナは再び目をそらした。

「だ、大丈夫よ。気のせい。ほら、そろそろミサイル攻撃が見られるんじゃないかしら」

レヘナは立ち上がった。指の間から正八面体が落ちる。ティキはとつさに手を伸ばしてそれを掴んだ。

「あ、ごめん。ありがと」

ティキはレヘナに正八面体を渡す。ティキはレヘナの手を見て息を呑んだ。レヘナの手は激しく小刻みに震えていた。ティキが手を離せばすぐにまた正八面体を落としてしまいそうなくらい不安定に震えていた。ティキはレヘナの顔を見る。レヘナは微笑んでいるが、その微笑みはどこか無理をしているようにも見えた。

「本当に、大丈夫ですか？ 手が震えていますよ」

「大丈夫。ちよつと寒かっただけ。さあ、前へ行きましょう。前からならきつとミサイル攻撃の様子が綺麗に見られるはず」

レヘナはティキの手を掴んだ。レヘナの手は非常に冷たかった。外に置かれていた金属の冷たさのようだ。ティキは思った。レヘナはティキの手を引つ張って前へと向かう。ティキにはレヘナの背中がほんの少し丸まっているように見えた。

アスツールはぼんやりと中央のスクリーンを眺めていた。中心にある二枚のスクリーンは今一つは共通な映像を映し出している。アスツールの妻は彼の両肩に手を置いて眺めている。ぎゅつと握られているのをアスツールは感じていた。

スクリーンには『管理者』の球体が浮かんでいる。その映像は首都中心から八キロメートルのところにあるタワーから送られてきていた。タワーは本来放送用空中波の送信用だが、今は全ての機能をこの攻撃の為に使われている。

球体表面は鏡のようになっていて、下半分に都市の風景を映り込ませている。何故そのような表面になっているのかはアスツールには不明だった。完全に反射してしまう為

にあらゆる検査を受け付けけないのだ。唯一わかつているのは、あの鏡面が通常ミサイルの攻撃をすべて跳ね返したということだけだった。

「第一派ミサイル群、目標到達まであと三〇秒」

声が左斜め前から聞こえ、アスツールはその方向を見た。斜め前にいる男が自分のヘッドセットに向けて喋っていた。部屋の隅にあるスピーカーから声が聞こえてくるが、男はアスツールのすぐ近くにいる為に肉声そのまま聞こえた。男の机にあるモニターには同心円状グラフが表示されており、その中心には大きな輝点があった。輝点に向かって八方向から小さな輝点が近づいている。

再び視線を中央スクリーンに戻す。そこに浮かぶ球体には何の変化もなかった。上下左右の八面のスクリーンには、球体をさまざまな角度から捉えた映像が映っている。偵察用無人垂直上昇機が都市を真上から見下ろしている映像が一枚、有人偵察機による距離二十キロメートル、高度一万メートルから望遠で捉えた映像が一枚。中央のスクリーンと同じ場所から撮られているが赤外線とエックス線とガンマ線により処理された映像が壁の左右に一枚ずつある。球体に対してはどの波長も反射され、特に有意な情報を表示していないかった。赤外線による映像では、球体の下にある都市には青や黄、赤色などが見られる。青、緑、赤、黄の順で、物体が多く熱を発していることを示していた。球体は完全な黒で、何も熱を発していないことを示していた。

「目標到達まで、あと十秒。九、八、七、六……」

アスツールは机に身を乗り出してスクリーンを凝視した。机の上に置いた手は力を入れすぎて指先から血が滲み出している。それに気づきアスツールは指先を屈伸させる。掌がぬるぬるとしている。その両手を妻が柔らかく包み込んだ。アスツールに向かって微笑みかける。その微笑みは、あの女とは違って非常に暖かく柔らかかった。

「目標到達」

一発目のミサイルが側面から球体に衝突した。刹那、スクリーンから光が満ち、部屋に細長い影を作る。眩しすぎて何も見えなかった。それでもアスツールは目を閉じずに凝視した。

「切り替えます」

垂直上昇機からの映像が拡大され中央スクリーンに映し出された。目に残った残像を追い払おうとアスツールはまばたきする。

垂直な光の柱が三本立ち上がった。光の柱は正三角形の配置で伸び上がっている。すぐにスクリーンが切り替わる。有人偵察機の映像では、光の柱の頂上部がどす黒く赤いのがわかった。熱と光を受けたビル群は跡形もないようだ。光の柱下部では赤い泥状の物質が流れ出している。高温を持っているらしく中心部が黄色く光っている。

アスツールは赤外線による映像が映し出されている右上のスクリーンを見た。球体の周りには黄色い色があるが、球体表面は相変わらず黒だった。青に変わったところすらない。

赤外線映像に新しい白い柱が現れた。白い柱は上下に伸びていき、先端部分は徐々に黄色へと変わっていく。それでも球体は黒いままだった。

再び可視光映像を見る。煙が新しい光の柱に巻き付くように上昇している。

「第一波ミサイル四基、全て球体の側面において爆発。球体の真上で爆発した物はありません。球体は依然として首都上空に存在中。第二波ミサイル群目標到達まであと五十秒」

「何故だ。おい、マジュニコフ軍事顧問、何故あの球体はびくともしない」

アスツールは叫んだ。アスツールの右斜め前方にいる男が、きびきびとした動作で立ち上がりアスツールの方へと身体の向きを変えた。短く刈り込んだ金髪で青い瞳をしている青年だ。眉はきりりと傾いていて目つきが鋭かったが、頬にいくつかのニキビが見える。胸にはいくつもの記章がつけられている。アスツールはマジュニコフが現在もっとも優秀な軍事技術評論家だということを知っていたが、その幼さの残る顔を改めて見ると不安を感じた。

「理由の確定はできません。推論ならできます」

「推論してくれ」

「あの球体には何らかのエネルギー場が働いていると思われま。性質的には我々のサイレントフィールドと似たような物でしょう。我々のサイレントフィールドは外部からの音波を遮断しますが、あのエネルギー場はあらゆる波動現象を遮断しているのではないかと……」

「目標到達まであと二十秒……」

マジュニコフを遮ってオペレーターが言った。アスツールはマジュニコフに向かって座るように手で合図した。マジュニコフは微かに顔をゆがめ、前に向き座った。

マジユニコフの説明しすぎる性癖は緊急事態には向かないな、と思いつながら、アスツールはスクリーンに集中した。中央スクリーンには有人偵察機による俯瞰視点からの映像が表示されていた。球体の側面の真下に沿って溶岩状の物質が外側に向かって流れている。それはまるで赤いドーナツが球体の下に置かれたかのようなようだった。球体の真下の建物はもとの形状を保ち、核爆発の影響を何も受けていない。第一派のミサイル群が作り出した細長い光の柱はすでに結合の緩やかな煙の柱に変わっている。大部分を煙に包まれた球体に向かって、八本のミサイルが白煙を引いて飛んでいく。

「目標到達まで、あと五秒……」

唐突に一つのミサイルが光を放つ。まだ十分に球体に近づいていない。球体の手前二キロメートルで突如爆発し、光の柱を作り出していった。赤と黄色の混じる光柱はビルごと地面をえぐり、円形にえぐられた地面からは溶岩状物質が吹き出した。飛び散った赤い物質は周囲のビルに降りかかる。完全な円だったビルの構造物はゆがみ、楕円に変わり、燃え上がった。それと同時に、向かっていた残りの七つのミサイルも爆発した。

どれもまだ球体に接近しきっていなかった。

生じた光の柱は垂直ではなく、都市を斜めに切り裂いていった。融解した物質がその線に沿って高く舞い上がった。光の柱の先は地平線の先へと勢いよく向かっていき、無数の爆発と爆炎が一拍子遅れて光の柱についていく。二つの光の柱が交差した箇所では真上にやせたキノコ雲が上がる。煙を内巻きにしてキノコは高く発展する。

アスツールは口を開けてただ眺めることしかできなかった。首都は巨大な赤ん坊が適当にナイフで遊んだかのような状態になっている。曲線美を追求した美しい首都が、乱雑な直線に蹂躪されていく。

「第三波、第四波、それぞれ目標到達まであと十秒と三十秒……」

オペレーターの声は悲鳴に近かった。球体がミサイルを迎撃していた。どの波長で見ても、球体に変化は無いように見えた。それなのにミサイルは次々と爆破されていく。高々度からの急降下を開始した第三波ミサイル群もすでに爆破され始めている。

一つのスクリーンが真っ黒になる。部屋の中にとよめきが満ちる。上空で待機していた無人偵察機の映像が途絶え



たのだ。アスツールの方を眺め救いを求める目をする者が何人もいた。

「ま、まだ。ミサイルは全部で三十発あるのだ。第五波のミサイルが爆発し終わるまできちんと業務に集中しろ」

アスツールは誰かに肩を掴まれた。細く暖かい感触は妻のものだった。妻に握られた両肩をアスツールは強く意識した。妻の手は肩に食い込んでいる。アスツールは振り向きはしなかった。首都を放棄する決断をしたのは自分なのだ。住民は『管理者』の危険性を十分に認識しておらず、避難に協力的な住民は少なかった。アスツールは軍隊を出動させて強制的に退去させた。無人となった街の最後を見届ける責任があるとアスツールは信じた。

床が揺れる。机に固定されていなかった書類や器具が跳ね飛んだ。アスツールは机の端を掴み揺れに耐える。アスツールの妻は彼を後ろから抱きしめていた。部屋の明かりがちらつく。四つのスクリーンが真っ黒になった。

「被害状況はっ」

アスツールは断続的に続く揺れに身体を翻弄されながら叫んだ。机を掴んでいてもその机ごと揺れていた。飛び跳ねる机と床がぶつかりけたたましい騒音が満ちている。

ヘッドセットの片方の耳が外れている男はアスツールの方を見て叫び返した。

「首都のタワーが融解消失しましたっ。相手の攻撃でミサイルのエネルギーベクトル制御が乱され、我々は我々の核兵器で首都を破壊してしまっています。どうすればいいんですか、大統領っ」

アスツールにもどうすればいいのかわからなかった。ミサイルは純粹な電気信号で発射された為、もうすでに、ミサイルに搭載された人工知能に核爆発プロセスを中止させることはできない。放たれたミサイルは当初の計画をこなす為に球体へと一直線に向かっている。三十キロメートル離れた箇所にある臨時対策本部ですら危うくなっている。光の柱が直接にアスツール達を襲わなくても、アスツール達を放射能汚染することができる。

アスツールはゆるる机を掴みながら大きく首を横に振った。

「第五波ミサイル群の状況は」

努めて冷静な声を出す。感情を封じ込めたせいで声は少し震えていた。

オペレーターは書類と器具が散乱した床から立ち上がった。

た。片手を赤く染めて額を押さえている。ふらふらと机に向かい、端末をのぞき込もうとしていた。アスツールからは端末の様子はわからなかった。

「第五波ミサイル群、接近中。し、しかし……。このままでは勝ち目はありませんっ。どうすればいいんですか？ 私はどうしたらいいんですか？」

オペレーターがアスツールの方を向いて叫んだ。額と、それを押さえている手は赤くぬめぬめと光っていた。瞳だけがぎろりとアスツールを見ている。それを見てアスツールは口を押さえた。

「君は業務に集中しろっ。一人一人が自分の役割をこなせば……」

アスツールは最後まで言うことができなかった。轟音が声をかき消した。硬い物がすりつぶされたような音だった。スクリーンの像が歪む。壁に大きな亀裂が入る。天井がずれた。

耳をつんざく崩壊音が辺りを満たした。ずれた天井が砕けた。亀裂から粉が吹き出す。粉塵は舞い上がり、アスツールの視界を覆い尽くす。

アスツールは背中から抱きしめられた。彼はただ呆然と周囲の状況を見ていた。

閃光が見える。電子機器が爆ぜる。流血していたオペレーターは机の上に突っ伏していた。その隣には天井の欠片が机を凹ませている。

すでに、外の状況を映している筈のスクリーンには光はなかった。スクリーンは崩れつつある壁に引っかかるようにして丸まっている。

「私が何をしたっていうんだ……」

アスツールはぼそりと呟いた。その言葉は炸裂音にかき消された。

目の前が真っ白になった。

アスツールは痙攣を起こしたかのように起きあがった。彼の周りで瓦礫がこすれる音がした。

上を向いて目を開ける。陽光が眩しい。アスツールは青空の下にいた。

背中 of 激痛で我に戻る。

アスツールは辺りを見回した。建物の天井は抜け、空が見えている。視線を下に移せば、所々に穴の空いた壁や、散乱した瓦礫が見える。左腕は瓦礫に圧迫されているらし

く、感覚がなかった。両足も同様だった。繋がっているというのはわかるのに、それらは自分の身体の一部とは感じられなかった。

アスツールは後ろを振り返る。首を回すと背中になんか突き抜けるような痛みが走り、うめき声を漏らした。

妻が瓦礫に埋もれてぐったりとしていた。瓦礫から伸びた右手はアスツールの背中を触れている。右手にはペンが握られており、そのペンは先がひしゃげていた。

痛みをこらえながらアスツールは身体を回す。なかなか回らない。右腕を振り、その勢いで身体をひねろうとした。だが、身体は瓦礫に固定されてしまっていてほとんど動かない。

息を吸い、右腕を青空に掲げる。一気に振り下ろす。身体はなんとか回転した。アスツールの右腕に妻の腕があたり、妻の手からペンが跳ね飛ばされる。どこか遠くでそれが瓦礫に当たる音が聞こえた。

アスツールは妻の様子を見ることが出来る姿勢になった。妻はうつぶせるような格好で、アスツールを見上げていた。ぼんやりと目を開いている。青色の瞳はきちんと焦点が合っていない。アスツールの視線に気づいたのか、妻は力無く微笑んだ。

「やっと、振り向いてくれた……。私はずっと動けないまま君の背中ばかり見ていたんだからね」

アスツールは妻の長い髪の毛に手で触れた。軽くすくい上げ、自分の顔の近くに持ってくる。埃まみれだったが、それでも妻の髪の毛はサザンカの甘い香りがした。

「私たちが、何をしたいというんでしょうね。私たちは何か悪いことをしたんでしょうか」妻はアスツールから目をそらした。さらに上を見ているようだった。アスツールがその様子をぼんやりと眺めていると、妻は右手で自分の視点の方向を指した。アスツールはさらに身体をひねってその方向を見る。骨がこすれて起こる身体の悲鳴は無視した。「ほら、地平線ぎりぎりのところに、見えるでしょう？」

アスツールは目の前に広がる都市を見た。都市はほとんど無傷だった。ただ一本のラインを除いては。

地平線からアスツールのところまで、幅五十メートルほどのラインがある。それは都市を蹂躪したエネルギーの跡だった。ライン付近では建物は崩れ、融解している。正確に作られたミニチュア都市を思い切りひっかいたような惨状だった。地平線付近のほうがりより被害が酷かった。アス

ツールのところに近づくとつれて、融解よりも崩壊した建物が多くなっている。

右手で口を押さえる。胃がねじられるような感触を覚えた。

ラインの向こうに、地平線付近に、『それ』は見えた。

『管理者』がいた。それはとてつもなく巨大で、地平線からほんの少し顔を出している。真っ白い球だった。肉眼で初めて見る。

「あれ、一体何のために私たちの文明を消そうとしているのかしら」

背後で妻の声が聞こえる。その問いは何十回も口にされ続けた問いだった。だが、その問いに答えられるものは一人もいなかった。アスツールも考えたが、結局わからなかった。

首を横に振って目をつぶる。目の前にあるものが現実ではないというように。

「あ」

妻が言った。アスツールは目を開ける。

「ねえ、あれ、ミサイルよね。第六波のミサイル群」

アスツールは空を見た。白い尾を引く物体が空を横切っていく。数拍遅れて辺りの空気が震え、音が響き始める。

「あれで最後か」アスツールは呟く。

「そうね」

ミサイルは真っ直ぐに、真っ白い直線を描いて飛んでいく。直線は全く乱れない。様々な方角からミサイルは球体のある地平線へと飛んでいた。第六波のミサイル群は高々度からの爆撃をするのではなく、低空から侵入して爆発するように設定されていた。

轟音が辺りの空気を震わせ、アスツールは腹に低い振動を感じる。

「十、九、八……」

アスツールはミサイルを見ながらカウントした。『管理者』がまた衝突前にミサイルを爆発させることをアスツールは確信できた。たとえエネルギーの奔流の直撃を受けなくても、自分が致死量の放射線を浴びることも確信できた。

「五、四、三……」

アスツールの妻が彼の首筋に手を回した。アスツールは妻の腕をやさしく掴んだ。

「二、一……」

「これで娘も寂しくないわね」

空は光で満たされる。それは太陽よりも明るい。網膜を焼き焦がされても、アスツールは目を開き続けた。

## 十五

エプロフェンは空間メモリーから顔を上げ、情報の海の底から浮き上がった。

二万五千年前の記憶は今も鮮明にエプロフェンの中に存在している。自分が何故このような存在になったかという根本的事件を、エプロフェンは二万五千年ぶりに再確認した。それとともに、外部の人間にどのような態度をとればいいのかも理解した。

『私は千人の人間を新しい惑星に送り届けるのが任務だった。無事に送り届け、繁栄させるのが任務だった。その延長線上に私の管理者権限は存在する。私のこの惑星上における強大な権力を、植民船由来ではない存在に行使してはいけない』

エプロフェンは空間メモリーに相對する形で椅子に座る。空間メモリーはエプロフェンと同じくらいの大きさがあった。

空間メモリーの記憶容量は無量大だったが、処理速度は有限だった。形が大きくても小さくても記憶容量が無限なのは、無限に何を足しても無限だということと同じ理屈だった。最低限度の大きささえ確保されていれば、そこに詰め込む事のできる情報量が無限になる。それが空間メモリーだった。だが、処理速度は体積の三乗に比例していた。それは体積が有限であるが故の制約だった。情報密度が上がるほど処理速度が落ちる。

エプロフェンは椅子の上で首を回す。

外界とのリンクを復活させ、新しい情報がないか検索させる。エプロフェンの視界の右上に『攻撃を受けた』という文字が現れた。エプロフェンはその場で手首をひねる。目の前に小さなウィンドウが現れた。頭の中ですべてを処理できたが、自分が人間だったという事を記憶に留めておく為にあえてそのインターフェイスを使ったのだった。エプロフェンは自分の懐古趣味に軽く笑う。

エプロフェンはウィンドウを凝視する。球体の自動防衛機能が働き、『管理システムに損害を与えうる』物体を事前に破壊したとそれは述べていた。

エプロフェンは醒めた目で破壊尽くされた都市を見た。

遅かれ早かれ文明は作り直されるべきなのだ。エプロフェンは思った。ただ、攻撃してきた順番が逆になったにすぎず、結果は必ず同じになる。自分が手を下さなかっただけだ。

『爆発のベクトルを制御した核兵器か……。攻撃対象への単位面積当たりのエネルギー密度も上がって、なかなか良い技術だ。音波制御に使われる空気の振動ベクトル制御を利用しているのだろうか』

エプロフェンは指先を動かして、その兵器の特性を空間メモリーに記録した。滅亡する文明が最後の最後に繰り出した兵器を記録することにより、集めた兵器を利用して『探究者』に対抗できる新しい兵器を開発できるかもしれない。来るべき『探究者』を撃破し、恒久的な繁栄を手に入れることがエプロフェンの目的だった。

作業が終わったあと、見落としていないかどうか、改めてエプロフェンはウインドウを見る。

ウインドウの左隅に『来訪者と思われる存在発見』という文字が現れていた。それはたった今現れたに違いない。エプロフェンは思った。見逃すはずがないからだ。

『ソースを表示しろ』  
ウインドウに向かってエプロフェンは呟いた。呟きながら、空間メモリーの正八面体の上の側面に手を触れる。正確な情報を利用するために、頭の中に映像空間を構築する。球体から少し離れたところ、都市の被害がそれほどでもない箇所の上空に、飛行機が旋回運動をしていた。映像を拡大し、解像度を上げる。

三人の人間がいた。前方を見ている。中年の男と十代後半と思われる少年と二十代前半に見える女がいた。エプロフェンはDNA情報を映像に重ねて表示させた。二重螺旋が二つ出現し、くるくると回り始める。男と少年のDNA情報は表示されたが、女のDNA情報は表示されなかった。植民船由来の生物であればDNA螺旋にマーキングが施されている。それは二万五千年前にエプロフェンが生物の惑星への拡散状況を調べるために胚に施した処理だった。一万年前、遺伝子改変に優れた文明が自らのマーキングを除去しエプロフェンの目を欺こうとしたことがある。エプロフェンは事前にその情報を察知し、除去される前にその文明を滅ぼした。自らを植民船由来ではないと証明すれば、エプロフェンの権力が及ばなくなることその時の文明は知っていたのだ。

その後は、エプロフェンはマーキングのみでは判断しない事になっている。

マーキングが施されておれば、DNA情報を閲覧できる。それは、マーキングにエプロフェンのみを利用できるような形式で圧縮されたその生物のDNA情報が含まれているからだった。

DNA情報が閲覧できないということは、初めからマーキングが存在していないか、それとも改変で除去されているかのどちらかだ、とエプロフェンは思う。だが、文明は一つのことの特化することが多く、ここ数千年遺伝子改変に優れた文明が現れていないということを見ると、除去されているとは考えがたい。

エプロフェンは女の容姿に目を向ける。

鮮やかな赤い髪が女の身体のラインを強調するように背中に流れていた。赤茶けた髪というのは生まれつきで発生することがある形質だが、真紅の髪という形質は発生し得ない。最初の千人の中に、髪質を遺伝子改変された人間はいなかったからだ。

エプロフェンは映像を回転させ、顔の見える位置に視点を移動させる。女の瞳は濃い青だった。それは赤い髪の毛とは似合っていないとエプロフェンは思った。濃すぎる青に濃すぎる赤、それは作られたイメージを喚起する。エプロフェンはその組み合わせに生き物としての不自然さを感じた。

『この女が植民船由来ではないことは間違いない』

エプロフェンは女を真正面から眺めた。女と向き合う形になる。

のっぺりとした青。瞳の中で、光をすべて同じ方向へと反射しているように見えた。

青い瞳は、エプロフェンを睨んだ。

「！」

エプロフェンはとっさに映像を終了させ、視点を自らの部屋へと移した。胸に手を当てて、深呼吸する。エプロフェンにとって深呼吸とは身体的には無意味な行為だったが、それでもせざるを得なかった。

不安がなだれ込んでくる。

エプロフェンは頭を抱えた。頭の上で指を動かし、自分の精神状況を平静に保つように再プログラムする。再プログラムによりすぐに精神状態は平静へと戻ったが、それでも不安は完全に消えなかった。頭を抱えたまま、首を左右

に何度も振る。

『私に気づいているはずはない。たまたま女の視線の先に私の視点があっただけだ。私を睨んだのではない……』

エプロフェンは呟いた。呟くと共に、自分の人間的反応に驚く。それは間違いなく過去への回想を行った事が原因だとエプロフェンは思った。自分は純粹に『探究者』に対抗しうる文明を作り出そうとしているだけで、その過程において悩みや不安などはいらぬ。頭を抱えるという行動は人間的な態度を示すものであって、自分の精神状態をモニターし続けることのできる自分にとっては意味がない。

不安が大きく膨らんでいく。自分は正しいことをしていないのではないか、という不安が。エプロフェンは何度も指を小刻みに震わせた。指で何度も精神状態の書き換えを命じても、不安は消え去らない。状態を再構築しても再構築しても、平静な状態は一瞬で破られる。

女の瞳は、自分を責めているように見えたのだった。大間違いを二万五千年も放っておいた事に対する怒りのようなものが女の瞳から感じられた。

エプロフェンは顔を上げて、目をつぶり、大きく首を左右に振る。目を開けると、自分の両手が震えている事に気が付いた。右手首を左手で握る。だが、震えは止まらない。振幅がより大きくなった。

『私は、正しいのか？』

自分が正しいかどうか判断するには、実際に『探究者』がやってきた時にしかわからない、と思っていた。結果を出すことでしか、自らが正しいとは証明できないと思っていた。自分の計画を分かり合う存在はいないのだから。

エプロフェンは空間メモリーの正八面体の一番上の頂点を両手で掴んだ。宙に浮き上がっている空間メモリーは全く揺れなかった。エプロフェンは頭の中に、スペースガード装置が破壊した宇宙船のデータを展開させた。宇宙船が恒星系に侵入したときの速度や加速度、放出した粒子や精製された場がエプロフェンの頭の中に理解できる形で展開される。それは、数値でもグラフィカルなものでもなく、頭で直接理解できる形のもだった。

だが、宇宙船の外部の情報のみで、その恒星間宇宙船がどのような目的で、どのような設備を持ってこの恒星系にやってきたかという内部的な情報は展開されなかった。

『わざわざ亜光速でやってきているということは、何か重大な目的、目標があったに違いない。それは何なんだ……』



エプロフェンは立ち上がり、正八面体を揺らそつとした。だが、やはり空間メモリーはびくともしない。

エプロフェンは空間メモリーから手を離れた。顔を上げて、真っ白い天井を見る。

『もしかすると、私がやっていることはすべて無駄だと言いに来たのか？』

染み一つ無い天井を見ながら首を横に振る。そんなことはあり得ないことだとはわかっていた。二万五千年前の時点で、外部からの連絡は一切無かったのだから。

手を上へとかざす。両手は相変わらず震えていた。ぼんやりと明るい天井から放たれる光が、震える指の隙間からこぼれてきている。エプロフェンはまばたきをせずに眺め続けた。

『あの瞳が私を断罪しようとしていたはずはない。きっと私の勘違いに違いない……』

呟いても、不安は消えない。

精神を矯正することはすでに不可能だった。平衡状態が完全に崩れてしまい、平穏な状態には一瞬たりともどまることができなかった。

エプロフェンは両拳を握る。頭を下げると共に手も下ろす。

正八面体を両腕で殴った。鈍い音が部屋に響く。

それでもやはり、空間メモリーは動かない。

もちろん、痛みは全く感じなかった。

## 十六

ティキは片手で胸を押さえた。口を半開きにして、息をゆつくりと吐きながら眼下の光景を眺め続ける。飛行機は旋回しており、ティキの視線は一点にとどまらなかった。

上空から見ると、都市の惨状がはつきりと認識できた。都市は様々な直線に蹂躪されている。円と曲線の建物は直線に斬りつけられ歪んでいた。球体に近い箇所ほど、ラインは融解物により滑らかになっている。外側になるにつれて、破壊はむごたらしく、荒々しかった。

飛行機は下りるべき場所を失って、ただ旋回を続けている。下りるはずだった臨時対策本部は第四波の直線核爆発の通過により壊滅的ダメージを受け、第五波により建物が崩壊、第六波で微かに残った瓦礫が真っ平らにならされた。それは爆発が意志を持っているかのようなピンポイントさ

だった。三回はすべて同じ直線を描いていた。

ティキは、第六波が来る直前の臨時対策本部の様子に心臓に焼き付いて離れない。瓦礫から顔を出した人間が、真っ直ぐに球体を見つめながら第六波の光に焼かれたのだ。その瞬間は光が溢れたために見えなかった。光が消え去ったあとには、何も残らなかった。

ティキは何度もまばたきする。だが、その光景は消えなかった。まぶたの裏にじんわりと残っている。

「結局、こうなってしまうたわね」

ティキのとなりでレヘナが言う。その口調には諦めが含まれていた。

「どういう事さ……」

ティキはレヘナの方を向いて呟いた。レヘナは小さくため息をつき、目をつぶった。

「これで、私たちの選択肢は一つになってしまったという事」

ティキは自分の胸を手で押さえつけた。心臓の鼓動が激しいことは容易に感じ取れた。鼓動の動きを抑えようとさらに強く押さえる。服越しに胸の皮膚が凹んだ。大きく息を吸う。軽く吐いてまた息を吸う。吐く量よりも吸う量の方が多かった。肺が膨れていくのを感じた。

視界が歪む。ティキはめまいに襲われていた。空を彷徨っていた手を額に強く押し当てる。親指と人差し指で眼の直ぐ上を押さえる。視界に白い発光がちらちらと現れては消える。

「大丈夫？」とティキの耳元でレヘナが言う。だが、それはティキには遠いところで囁かれている声のように聞こえた。

両足に力が入らず、ティキは床に座り込んだ。膝が冷たい金属の床に当たり、硬い音をたてる。胸を押さえたまま背中を丸める。目を閉じることができなかった。汗が頬を伝わりあごからしたり落ちるのが見えた。汗は灰色の床に円を広げていた。

目の前で起きている事は、すべて現実だった。都市は間違いない壊滅状態になり、臨時対策本部は間違いない消え去り、大統領は間違いない死んだのだ。その事実がティキの心をナイフで抉っていた。

「図書館が崩壊したのも間違いない真実。ジーンズさんが死んだのも間違いない真実。図書館は偶然に崩壊したんじゃない。図書館は崩壊させられたという事でさえも真実

……」

小さな声でティキは呟き続けた。

レヘナに両肩を掴まれたのを感じた。激しく揺さぶられ、視界がゆらゆらと揺れる。焦点が定まっていないため、何も変わらなかつた。

さっきまでティキは、心の底ではこの状況がフィクションであると信じていた。結局自分たちが見ているものは大したものではないと思っていた。いくつかの偶然が作り出したつかの間の劇のようなものだと思っていた。幕が下りればまたいつもの生活に戻れるという根拠のない確信があつた。

その確信は、完全に消えて無くなつた。第六波のミサイルによる閃光によつて、瓦礫にいた人間と共に消失していった。今日の前に起こっている事が、自分と関わりのある事であり、昔と同じ日々は二度と戻つてこない事を悟つた。

レヘナの手を振り払うようにして立ち上がる。飛行機の前方の窓の下付近にある赤い手袋を見る。その手袋をはめれば、機体は自動操縦から手動へと切り替わる。

「ティキ、大丈夫？」

気遣うようにレヘナがティキの顔を前方からのぞき込んだ。視界が遮られ手袋が見えなくなる。

「レヘナ、このあと、どうするつもり？」

ティキは顔を下げ、上目遣いにレヘナを見て言った。

「選択肢が一つしかないのだから、どうするもこうするもないわ。私たちは『管理者』とやらに会いに行かないといけない」

レヘナはにべもなく言う。ティキは苦笑いをした。レヘナは初めからこれが現実であるというを理解しているのだから当然のことだ。彼女の頭の中には選択肢は一つしかないのだ。ティキには二つあるというのに。

ティキは手袋をはめたかつた。すべてに目を背けて、どこかへと隠れたかつた。手袋で操つて、飛行機を自分の家の前の草原に着陸させたかつた。家に帰つて、ただ身体を丸めて眠っていたかつた。

心臓が縮こまるような気持ちだつた。初めから自分がどうこうできる規模の話ではなかつたのだ。世界規模のものは恒星系外からやってきた人間に任せていれば良かったのだ。

額に両手を当てて、ティキは身体を丸めた。そのまま膝を折つて崩れ落ちる。

「どうしたの」とレヘナが言ったが、テイキは何も言わなかった。

飛行機は緩やかに弧を描いて旋回している。その遠心力はテイキの心臓をわしづかみにしていた。

レヘナの手が背中に置かれているのを感じていた。

「帰る。もうここには用は無い」

「何をしてるのっ」

シナルクとレヘナの声が前の方から聞こえた。

どのくらいの時間が経ったのか、テイキにはわからなかった。それは数時間とも、数分とも思えた。身体を起し、前を見る。

シナルクが手袋をはめようとしていた。それをレヘナが制止しようとしている。シナルクの服はよれよれだった。左手にはすでに手袋を着けている。レヘナは右の手袋を両手で抱え、左の手袋から伸びたコードを懸命に引っ張っていた。赤い髪がコードと絡まっている。

「何をしているの」

テイキはそう言い、立ち上がった。シナルクとレヘナの動きが止まる。

立ち上がるとめまいを起こし、目の前が白くなる。近くのシートに手をかけてふらつく身体を支えた。頭を軽く振り、前をしっかりと見る。

シナルクとレヘナの動きが止まったのは一瞬だった。

テイキが前を見たときには再び手袋をめぐって争っていた。テイキは二人の所へ行こうと足を踏み出した。

「臨時対策本部がやられたのだ。ここにいる必要性は全く無い。『管理者』は文明を破壊することが目的だ。文明から離れた場所にいれば命の危険は無い。私は文明の崩壊に巻き込まれたくはない。歴史循環説の完全なる証明をするまでは、死ねない」

語尾を強く発音して、シナルクはレヘナの身体を強く押した。レヘナの身体は傾いだ。右手袋がレヘナから離れて宙を舞う。シナルクは体勢の崩れたレヘナを蹴る。そして手を伸ばして右手袋を手に入れた。レヘナの眼が見開いたのがテイキには見えた。

シナルクはすぐに手袋をはめる。両手を前に突き出して、シナルクは手を左にひねった。

機体が大きく傾く。

それがシナルクの手の動きに対応しているのは容易にわ

かる。

テイキの視界の隅で、レヘナが立ち上がるのが見えた。テイキはその方向を向く。

「あつ」テイキは思わず声を上げる。レヘナは髪を振り乱したまま、銃を構えていたからだ。四つの銃口を備えた、直線的な銃。レヘナは歯を食いしばっていた。複数の銃口が向いている先にはシナルクがいる。テイキの上げた声に気づいたのか、シナルクは素早くレヘナの方を見た。

銃声が轟く。

数秒遅れて、床に金属が落ちる音がする。

テイキの足下に、レヘナが持っていた銃が転がってきていた。

「私の邪魔をするな」

シナルクは黒光りする拳銃を手に持っている。レヘナは右肩を押さえて膝をついている。その顔は苦痛に歪んでいた。瞳はシナルクを見据えている。

テイキは足下に転がる銃を手にとった。銃は恐ろしいくらい軽い。小型の端末程度の重さだった。銃口が四つあること以外は普通の銃と変わらない。トリガーを引けば発射されるのだろう。

「テイキ」

レヘナが言った。テイキはレヘナの方を見る。ネイビーブルーのダブルスーツの肩口は血で染まり、紫色になっていた。

かちやり、という音がした。テイキはその音の出所を探す。シナルクの拳銃の銃口はテイキに向けられていた。テイキは呼吸をするのも忘れてその銃口を見つめる。銃口は一つしかない。だが、それは間違いなく殺傷能力がある。

テイキは視線を落とし、自分の手の中の銃を見た。非常に軽く、図書館での一件を見ていなければとても本物の銃とは思えない代物だった。

「妙な気を起こすなよ、テイキ。私たちは一刻も早くここから立ち去るべきなのだ。交通が麻痺し、移動手段が徒歩だけになるまえに、私たちは遠くへ行かねばならん」

そう言っつて、シナルクはテイキに背を向けた。機体が揺れ始める。レヘナがシナルクの方へと一歩足を踏み出した。シナルクは前を向いたまま片手で銃をレヘナへと向ける。

「片方の手だけでも操縦できる。それ以上怪我をしたくなければ、動くな」

シナルクは低く冷静な声で言う。テイキはドスのきいた

低すぎる声に鳥肌が立つ。右手に銃を握ったまま、ただシナルクとレヘナを交互に見ることしかできなかった。

僕は、一体、何をすればいいのだろう。僕は何を求められているのだろうか。僕は何をしたいんだろう？

ティキは右腕をゆっくりと上げた。四つの銃口をシナルクへと向ける。シナルクはレヘナを牽制しているのか、ティキを見ている気配はなかった。

トリガーに指をかける。人差し指が小刻みに震え始める。このまま父さんが操縦しているのを見守っていれば、僕は安全で平穏な場所へと戻ることが出来る。

「……それなのに、何故僕は父さんに銃を向けているんだ？」

ティキは呟いた。シナルクはその声に反応してティキを一瞥する。

「何をしているんだ、ティキ。もう茶番は終わったんだ。」

その銃を床に投げなさい。暴発されたらたまらん」

「父さん……」

ティキは、腕を下ろすことが出来なかった。指先どころか右腕全体が震え始めていた。手に持った銃の重さが増したような感じがする。シナルクが持つ拳銃と同じ重さであるような気がする。

浅く速い呼吸を繰り返す。ティキの息づかいが静かな機内に響いた。

「ティキ」

レヘナが言った。

目を動かして、レヘナを見た。レヘナは微笑んでいる。それは自分がいつまでも見ていたいと思っていた微笑みだった。

「まかせるわ」

レヘナは、跳んだ。

シナルクに向かって。歯を食いしばり、両手を真っ直ぐに伸ばしている。

シナルクの目が見開く。跳んでくるレヘナに向かって両手で銃を構える。銃の射撃軸の上には、レヘナの額があった。

「うああ」シナルクが叫び声を上げる。

「うわあ」ティキも叫んだ。無我夢中でトリガーを引く。

トリガーは全く固くない。

耳をつんざく破裂音。あまりの音の大きさに、ティキは銃を放り投げて両手で耳をふさいだ。目をつぶり、床にう

ずくまる。

残響が、ゆっくりと引いていく。

「う、うう」シナルクのうめく声が聞こえる。

ティキは目を開いた。

シナルクは真正面のガラスにうつぶせで寄りかかっていた。両腕はだらりと下がり、手袋のコードは途中でちぎれている。拳銃はどこかへ消えていた。

「レヘナ？」

ティキは必死に見回した。

「！」  
ティキは駆け出した。すぐにレヘナの所へ辿り着き、しゃがみ込む。

レヘナは床に仰向けで倒れていた。両腕を大きく広げている。ダブルスーツは胸の辺りで濃い紫になっていた。ブラウスは元の色が分からないほど赤い。金属製の床には血だまりが出来ている。血の円はゆっくりだが徐々に広がっている。

「レヘナ………？」

ティキが声をかけると、レヘナは緩慢に目を開けた。ティキの顔を確認したのか、微笑んだ。その微笑みは弱々しかった。

「大丈夫よ。今全力でナノマシンが修復作業をしているから………」

レヘナの声は小さかった。とても大丈夫には思えない。レヘナは右の胸付近を撃たれている。ティキにはそう思えた。そこがもつとも血の色が濃かったからだ。ブラウスのボタンはブラウスと一緒に血で固められている。血は徐々に粘りけを増しているらしい。血はすでに服の上での侵攻をやめており、床の血だまりは拡散を停止していた。

ティキは医療品は無いかとあたりを見回した。だが、機内はあまりにも殺風景で、何も見当たらない。

突然、機体が前へと大きく傾く。ティキは大きくよろけ、前方の窓ガラスに手をついた。窓からは都市が大きく広がっているのが見えた。縮尺は徐々に大きくなっている。

「ティキ、この飛行機をさっさと体勢を立て直して。音声で指示っ」

レヘナがゆらりと立ち上がっていた。足をかくかくと震わせて、窓ガラスに手をつけて姿勢を保っている。スーツの裾からはみ出たレヘナの手は血の筋を何本も走らせていた。指と指の間を通り抜けガラスへと伝わり、血の筋はガ

ラスにも線を描いていた。

「レヘナ、立ち上がるなんて無茶だ。銃で撃たれた事をわかってるんですか？」

「大丈夫って、言っているでしょう？ 私にはナノマシンがあるんだから……。最初に出会ったときだって、私は血だらけだったでしょう……」

そう言いながら、レヘナは身体のバランスを崩した。ガラスから手が離れる。手はガラスに糸をひいた。テイキの方へと倒れてくる。テイキは二歩足を踏み出し両腕でレヘナを抱き留めた。濃厚な血の匂いがむっと漂う。

「大丈夫なんかじゃ、ないじゃないですか。無理しないでください。そこに座っていてください。僕に任せてください」

テイキはゆっくりとレヘナを前の壁に寄りかからせた。そしてすぐに前方の窓を見る。地平線の傾き具合から判断して、まだそれほど傾いていない事がわかった。飛行機は失速しているわけではなかった。手動操縦になっているというのに誰も操縦していない為に傾いていた。

手袋では複雑な姿勢制御ができるが、音声では大きっぱなことしかできない。だが、目的地を設定したり体勢を立て直したりすることは可能なはずだった。

テイキは左を見た。シナルクは相変わらずうつぶせで寄りかかっている。もううめき声を上げておらず、気を失っているようだった。外傷があるようには見えない。反動が無かったことから考えて、テイキが撃った銃は弾丸以外の物を出したらしい。

前を向き直る。テイキの前には小さな受音機があった。

「自動操縦に切替」

機体が持ち上がる。床が水平に戻った。

すぐに機体は横に傾き、旋回を始める。最初の設定に戻ったらしい。

「行き先を設定、行き先は……」

言いながらテイキは考える。一体どこへ行ったらいいのだろう。

「球体の真下に潜り込んで、そこに着陸してほしい」

レヘナの声が下から聞こえた。レヘナは胸に左手を当ててテイキのことを見上げていた。右手は腰の位置にあり、手の中では正八面体が光り輝いている。乳白色の光が手のひらにこぼれ落ちていた。

テイキは考える。自分は一体どうしたいのだろうか。と。



「レヘナ、一つだけ聞いておきたいことがあります」

「なに？」

「テイキは息を大きく吸い、吐いた。」

「あなたは、なぜ、そこまで一生懸命になれるのですか？あなたの住んでいた場所はもう既に無い。わざわざ命の危険を冒してまで、そんなに血まみれになってまで、あなたはなぜこの惑星に関わるのですか？あなたとこの惑星とは何の関わりもないのに」

「一つじゃないわね……。まあ、いいけど」

レヘナはテイキから顔をそらした。自分の手の中の空間メモリーを眺めているようにテイキには見えた。手でくるくると正八面体を弄んでいる。

「任務だから」レヘナは言った。

「任務を与えた人たちは数十光年彼方なのですよね。二度と会うことは出来ないはずですよ。そして、あなたの乗ってきた情報収集艦アイレムは破壊されてしまった。あなたが任務をきちんとこなしたとしても、それを知る人間は誰もいない。あなたと面識のある人間はいないでしょう。それでも、レヘナ、あなたは命を賭けて任務をこなすのですか？」

「ええ、そうよ。任務は任務だから」

「なんで、平和に暮らそう、とか思わないのですか？自分の命が惜しくないのですか？」

テイキは怒鳴った。レヘナはテイキを見上げた。レヘナは微笑んでいる。テイキにはその微笑みの意図が分からなかった。

「思わないわ。私が送信するデータはきちんと情報船団が受け取ってくれるはずだから。私の任務は無駄にならない。任務さえこなせば、私は死んだって構わない。任務をこなすことが私の存在意義なのだから」

「そんなこと言わないでくださいよっ！」

テイキはレヘナの前に回り込み、しゃがんだ。レヘナの両肩を掴む。レヘナの顔が苦痛に歪む。

「ごめんなさい」テイキは手を離れた。「けど、死んだって構わないなんて、おかしいです。死ぬつもりで生きないでください。死にたくなくても死んでしまう人がいるんです……」

レヘナは右腕を上げた。その手には正八面体は握られていない。空間メモリーはレヘナの膝もとに転がっている。

レヘナはテイキの首筋へと手を伸ばした。テイキはただそ

の手の動きを眺めていた。

レヘナの手がティキの首筋に触れる。何か暖かいものが流れ込んでくる。それは首を通って全身へと運ばれているようだ。全身が火照りはじめている。

数秒後、レヘナは手を離れた。それでも全身を巡る暖かみは残っていた。レヘナは真面目な顔でティキを見ている。「まあ、確かに、任務で死ぬのは、おかしいかもしれないわね」

レヘナはにっこりと笑う。そして言葉を継いだ。

「正確には、任務だからという理由で、一生懸命になれているわけじゃないの。それも理由の一つだけど、他にも理由はある」

「それは……、なんですか？」

「私は、いろいろな人の責任を負っているから……」  
そう言って、レヘナは上を向いた。膝を折り、両腕で抱える。

「私は、中級情報収集者よ。本来は惑星の事に深く関われる権利を持っていない。私は情報を収集してある程度の解釈を試みる。そしてそのデータを上級情報収集者が処理する。けれど、アイレムは破壊され、上級情報収集者はいなくなってしまった」

言葉を句切り、レヘナはティキを見た。ティキはその瞳の単色さに引き込まれた。

「飛行技術者もいなくなってしまった。アイレムが行おうとしたこと全てを私が行わなければならぬ。やり遂げなければならぬ。そうしないと、何十年何十光年に及ぶ私たちの旅が無駄になるから。彼らの死が無駄になるから」  
そしてレヘナはにこやかに微笑み、「これが理由かな」と言った。

死が無駄になる……。

ティキの中で、何かが弾けた。もやもやとしたものが形を成した。

僕は、ジーンズさんの死を無駄にしたくない。大統領の死を無駄にしたくない。この惑星上に生きる、すべての人間の死を無駄にしたくない。文明を消滅させるといふのは、それらの死を無駄にするということだ。

ティキは立ち上がり、受音機の前に正対した。

「行き先は、首都中心部。低空からの着陸」

『了解しました』

飛行機は旋回をやめた。ティキは浮き上がるような感覚

を得る。飛行機が降下を始めていた。

「環境適応ナノマシンをあなたに注入したわ。これで放射線に耐えられる。球体の真下は融解してはいけないけれど、周囲の物体は放射能を帯びているだろうから」

後ろを振り向くと、レヘナが立っていた。ブラウスは相変わらず真っ赤だったが、その色はくすんでいて、乾いていた。レヘナはテイキの肩に手を乗せた。

「よし、もう少しなんだから、がんばろうよ」

## 十七

扉を開けると、生暖かい空気がテイキの頬をかすめた。

テイキは慎重にタラップを下りる。地面は緑色と白が入り交じったマーブル模様で、雲と恒星エプロフェンズを鮮明に映すほど反射率が高かった。熱により建物が融解した結果なのだろう。

磨き上げられたかのようなつるつるの地面に足を下ろす。膝を軽く曲げて、滑らない事を確認してから歩き始めた。

レヘナは前方にいて、テイキのことを気に掛けずに真っ直ぐに歩いている。ときどき足がふらついているが、転ぶ心配はしなくても良さそうだった。

顔を真上近くまで上げると、巨大な球体が目に入る。それは真っ白で、空よりも明るい。恒星エプロフェンズのある側の縁はさらに白く光っていて、長時間見ると網膜が焼き付きそうな程だった。テイキは両手を挙げる。手のひらでそれを覆い隠そうとしたが、球体はほんの少しはみ出してしまった。

数メートル歩いてから、テイキは後ろを振り返った。双発のプロペラ機が緑と白の模様の上に鎮座している。地面には空が映り込んで、それがさらに飛行機に投影されていた。白い機体は緑と青の光に覆われている。

飛行機は融解により平らに均された場所を滑走路代わりにして着陸した。着陸は殆ど揺れなかった。

シナルクは機内にいる。レヘナが言っていたとおり、都市には放射能が満ちていたからだ。被爆を抑える為には、すなわち、ヘリウム原子核による皮膚の損傷を最小限にする為にはレヘナのナノマシンの必要だったが、それは一人分しかなかった。シナルクは逃げないことをテイキに約束した。それがどの程度信用できるのかわからなかったが、テイキは信じることにした。二度も息子を捨てることはし

ないと考えたのだ。シナルクは膝を抱えてうずくまったまま、テイキに「行け」とだけ言った。

レヘナに追いつくために、しばらく走った。レヘナは数十メートル先で立ち止まってテイキを見ている。下げた右腕を左手で押さえている。

レヘナのいるところでは、地面の様子が変わっていた。

普通のコンクリートの道がそこに存在している。レヘナのいるところよりも前方は、何も変わらない都市だった。核兵器の影響を何もうけていないように見えた。円形の看板や、二次曲線の縁と持ったビルディング等がある。

二人の足音が、風の流れるコンクリートの回廊に響く。

「球体の真下だけコンクリートジャングルが残っているなんて、ばればれもいいところ」

レヘナが歩きながら言った。顔はまっすぐ前を向いていた。テイキには、頬がほんの少し青いように見えた。けれどそれは気のせいかもしれないくらいの微かな青みだった為、あえてテイキはレヘナに尋ねようとは思わなかった。

レヘナは『管理者』の本体が首都の真下にあると言っていた。それは球体の真下だけが融解していないからだという。

「どこまで行けばいいんでしょうね。入り口はあるのでしょうか」

「わからないわ。けれど、球体の真下に『管理者』の本体があるのは間違いないんだから。攻撃されずに着陸できたということは、相手はコンタクトの意志があるはず」

「それとも、僕たちに全く興味がないだけかもしれない」

テイキは辺りを見回しながら歩いた。都市には動きがなかった。自動車などはどこにも存在しない。交差点にあるディスプレイは何も映っておらず、黒く沈黙している。信号は通電していなかった。形は都市でも、機能は完全に停止していた。人間は、臨時対策本部が非常事態宣言をしたときに回避させられている。動くものはレヘナとテイキだけだった。

空気は生暖かい。ぬるい風が横から吹き付けている。道路は前方で直角に右に曲がっていた。突き当たりにある建物にはショーウィンドウがあり、マネキン達がさまざまな緑系統の服を着ているのが見える。マネキンの手の先のハンドバックは左右に揺れていた。テイキ達は右側の歩道を慎重に歩く。

角にさしかかると、水の匂いがした。一步を大きくとり、

レヘナよりも先に角を曲がる。

広場があり、噴水が見える。中央には巨大な赤褐色の球体が鎮座しており、その球体の側面近くから、五本の水柱が吹き上がっている。水はやや外側に向かって吹き上がっていて、十メートルほどの高さで落下し始めていた。

細長い五本の放物線の下端は水中に没している。白い水しぶきがちらちらと舞い、小さな虹が三つ見えた。

テイキは広場に近づくとつれて、違和感を持った。初めはそれがどのような違和感なのかかわからなかった。赤褐色という色が、首都の中央部にあるという事に違和感を持ったのかと思った。だが、それは違っていた。

テイキは噴水の縁に腰掛ける。歩いてくるレヘナを眺めた。レヘナは視線をずらさずに真っ直ぐに噴水のことを見ているようだった。

冷たい水しぶきがちらちらとテイキの首筋に当たる。

「変なところでシSTEMは生きているのね」

レヘナが噴水の縁に歩み寄りながら言った。テイキの目の前に立ち止まり、空を見上げた。

「そうですね」

テイキも同じように空を見上げる。真上には球体が浮かんでいる。それはやはり伸ばした両手で隠せないほど大きく見えた。テイキには何故浮かんでいられるのかさっぱりわからなかった。

空を見上げると、噴水は匂いと微かな感触以外を感じさせない。青と緑が入り交じった空の中央にある真っ白な球体だけが存在感を放っていた。

噴水は音が全くしなかった。なぜか嚴重な消音が施されていた。水が水面を打つ音も、水が水面から飛び出す音もしない。テイキはそれを実現するには大量のエネルギーが必要だということを理解していた。消音対象の音波発生源がより不規則だとより多くのエネルギーが必要となるからだ。水しぶきのようなランダム性の高い現象の消音は、人間の声の消音とは比べものにならない。

空には雲はない。浮かんでいるのは、球体だけだった。

視線を戻し、噴水の中央へと顔を向ける。赤褐色の球体はテイキが両腕を広げたよりも巨大で、微少な無数の突起が生えている。その突起はよく見ないと分からない程度のもので、遠くから見ると、表面がざらざらしているようにしか見えなかった。

耳の血管に血が流れる音すら聞こえてくるような静けさ

だった。

レヘナを見る。レヘナは正八面体を手の中で回している。面に太陽光が反射して、上面の正三角形の白い輪郭が瞬間的に浮かび上がる。

自分は何が出来るのか、とティキは灰色の地面を見ながら思う。他の人たちの努力を無駄にしない為に、自分ができることはあるのだろうか。

自分が『管理者』の真下にいることに何の意味があるのか。自分よりも父の方が交渉に適任ではないのか。道案内の役目は図書館が崩壊したときにすでに終わっている。死を無駄にしない、と意気込んでみても、自分にできることなんてないのではないか。自分がここにいる意味などないんじゃないか。

ティキは頭を抱えて、ただのつペリとした灰色の地面を見つめ続けた。

「ねえ、ティキ……」

レヘナが言う。ティキは顔を上げて、思わず息を呑む。

レヘナの顔は青ざめていた。左手で右手首を掴んでいる。その右手には正八面体が握られていたが、それは今にも落ちそうに見える。ティキの位置からでもわかるほど、レヘナの手は震えていた。身体はゆっくりと左右に揺れている。同じ状態で立ち続けるのが困難なのか、足を時折動かして、バランスをとっている。

「大丈夫ですかっ？」

ティキは立ち上がって、レヘナの元へと歩む。レヘナは右腕を伸ばし、正八面体をティキの前に突きつけた。

「持っていて」

ティキはレヘナの顔を見た。青という単色の瞳がティキを見据えている。顔色は悪いが、瞳の鮮やかさは失われていなかった。

ティキはゆっくりと自分の手を前へと差し出した。レヘナの手の下に差し入れる形で、手のひらを上にする。

「ありがと」と言い、レヘナは手を開いた。

正八面体の角が軽くティキの手のひらに刺さる。それはちくりとする程度の痛みだった。ティキの手の中で、正八面体が横になる。

レヘナは微笑んでいる。その微笑みは痛々しかった。

ティキの汗が、一瞬でひいた。

目の前が突如晴れ渡る。頭の中が再構築されたかのように、自分の疑念が解消する。頭がこの上なく明晰に回転し始め

る。

僕はただ、「なぜ」と聞きたい。

それはごく単純な欲求だった。人を救うとか文明を救うというのは本質的な理由ではなかった。そのような理由で、自分がここに在るわけではなかった。初めから自分は、「なぜ」が聞きたいが為にレヘナについて来ている。ここまでやってきている。

「ごちゃごちゃした思考は全て消え失せていく。ティキは、自分がやらねばならないことをはつきりと認識できていた。『管理者』に会うまでは、全てをレヘナに任せればいい。

手伝うだけでいい。僕は『管理者』に会ったときに「なぜ」と聞くことが目的なのだから。惑星上の全ての生きているひと、かつて生きていたひとの代弁をするのが目的なのだから。それはレヘナにはできないことだ。

ティキは正八面体をしっかりと握り、胸の前へと引き寄せた。正八面体は乳白色光を内側からこぼれさせている。

## 十八

エプロフェンは顔を上げる。顔を覆っていた両手を離し、正八面体の表面に置く。

正八面体は冷たい。乳白色の光が絶えずこぼれている。エプロフェンは自らを一度低速稼働状態にして、徹底的に精神矯正を施したが、それでも不安は消えなかった。生じた不安は、エプロフェンが完全に別の人間になるほどの人格矯正を行わないと除去できそうになかった。

エプロフェンの目の前には、白い球体の真下の映像が展開されている。そこには、少年と女がいた。少年は噴水の縁に腰をかけている。女は少年の目の前に立っている。エプロフェンは拡大して表示することはしなかった。あの瞳をもう一度見ることは精神衛生上良くないと考えた。あの瞳と対峙するのは、直接会ったときでいい。

球体の真下、球体の中心から地面に降ろした垂線上に、エプロフェンの実体は存在する。空間メモリーは首都の真下千メートルの地点に鎮座している。

不安を拭う為には、直接対峙しなければならぬ。完全に対等な立場で、はつきりと議論しなければならぬ。

どんなに優れたインターフェイスを使っても、それは直接会うということよりは劣る。物理的に同じ場所に存在するということは、同じ環境にさらされているということこ

とであり、それはその瞬間においてはお互いに影響を及ぼし合うことが出来るということだ。つまり、それは両者が運命を共にしているということでもある。

インターフェイスを介すると、そのインターフェイスが相互干渉に対する障壁になる。本当に議論する為には、会わねばならない。安全な場所から言うようではだめだとエプロフェンは思う。

不安は取り除かれなければならない。

『人間の感覚を呼び起こしてしまっただけなのか……』  
エプロフェンはちょこちょこ映像の中で動く少年の手を見ながら言った。

今すぐに、人間としての感覚を消去してしまうこともエプロフェンには可能だった。不安というのは人間の感覚によるものであり、非人間化すればそれはただのパラメータ異常に過ぎなくなり、それは容易に克服できるバグになる。エプロフェンは頭を抱えた。

自分のしていることが、正しいのか正しくないのかということは、自分が人間か非人間かによらず重要なことだとエプロフェンは思う。植民を成功させることが自分の目的であり存在意義であり、今までやってきたことが正しくないとすれば、方針転換をしなければならない。

判断を自己判断によることは出来ない。ゲーテルの不完全性定理、『いかなる論理体系でも無矛盾であるとき、その無矛盾性をその体系の公理系だけでは証明できない』というものがある。つまり、エプロフェンの論理はそれが本当に正しいのかどうか、エプロフェン自身の論理では証明できない。その為、エプロフェンは外部と接触しなければならぬ。正常なコミュニケーションを行うには、人間の性質が必要になる。人間性を削除することは、根本的な解決にはならない。

エプロフェンは顔を上げ、ウィンドウを凝視した。

二人は噴水の縁に腰掛けて、なにやら話している。

感情の振幅を最小限に抑えるように、エプロフェンは頭を整理し直す。深呼吸に相当するパラメータをいじる。

二万五千年の間に、住民と会話をする機会は数度あった。その時はいつも、エプロフェンは可能な限り非人間的な人間の態度で接した。人間だと判別できるぎりぎりの非人間さがもつとも効率がよいと思ったからだ。

今日はただでさえ不安という人間の感情にさいなまれてる。だから、同じようにやるのが最適に思えた。



特別なことは何も無い、とエプロフェンは自分に言い聞かせる。いつものように住民に接しているのだと考えればいい。

球体の音声インターフェイスを起動させる。音波をベクトル制御し球体の真下にのみ音波が届くように設定する。他の人間に聞かれるとまずいからだ。首都の下にエプロフェンがいるということが伝えられてしまうと、次の文明サイクルに対策を講じられる危険性がある。

エプロフェンは空間メモリーを包み込むように両腕を広げた。

『我、この大地の管理者……』

突然、ティキは空気のかたまりを頭に受けた。クツションで頭を叩かれるような衝撃だった。すぐに真上を見る。だが、真上には白い球体しかない。何も変わったところはない。

「今のは、なんですか？」

ティキは隣に座っているレヘナに聞いた。レヘナは顔を上に向けている。レヘナにも原因がわかっていないようだった。

空気が微妙に振動している。気圧が高まっているようにティキには感じられた。耳が少し痛み、つばを飲み込む。

「我、この大地の管理者。中央噴水広場にいる二人に告ぐ」低い声だった。その声は真上から降ってきていた。噴水のアーチが圧力に負けて小さくなっている。腹に直接響くような、自らを楽器と化した時に出る共鳴音のような声が響く。ティキは真上を見る。空気は揺らぎ、白い球体はぼんやりと滲んでいる。

「中央のオブジェのドアを開ける。そこに入れ。そうすれば私の元へと辿り着ける」

オゾンの匂いがした。ティキは思わず鼻と口を押さえた。空気は上から抑えつけられているかのように息苦しい。

水の音が聞こえ始めた。ティキは後ろを振り返る。噴水の巨大な球体の中央に、四角い穴が空いている。それは二人が並んで歩いて通り抜けられるほどの幅だった。穴の中は見えない。真っ黒だった。周囲には、水がわき出る音が絶え間ない。

空気が濃かった。鼻と口から離れた手は、ぬめりとした空気の粘性を感じ取っていた。ティキはその空気を大きく吸う。むせかえりそうになりながらも、球体を見上げる。

目に涙がにじんだが、すぐに指でぬぐい取る。

「首を洗って待ってるよっ」

ティキは精一杯叫んだ。言葉が上空にまで届くとは思えなかった。それでも言わずにはいられなかった。球体の返事を待たずに、ティキは噴水中央を見る。大きな穴は狭く暗く、一度入ると二度と戻ってこられなくなるような気がした。

足が震えている。震えを球体に悟られないように、ティキはわざと動作を大きくした。噴水の中に思い切り足を入れる。水しぶきが周囲に飛び散った。水中に膝下まで没する。締め付けるように水は冷たい。しっかりと正八面体を右手で握り、水をかき分けて中央へと向かう。

半分まで行ったところで、ティキは振り返った。レヘナは両手を広げてゆつくりと水の中へ片足を入れている最中だった。軸足がふらついている。

ティキはレヘナの元へと走った。

水の粘性に足を取られ、バランスを崩す。右手を高く挙げて、ティキはつんのめるような形で水の中に倒れ込んだ。鼻と口の中に勢いよく水が流れ込み、ティキは水中で咽せる。それでも右手を真上に挙げて、正八面体が水に浸からないようにする。左手をがむしゃらに動かして、床を探す。薬指を突き指しながら床を探し当て、手のひらで床を思い切り押す。両足を前へと繰り出し、勢いよく立ち上がった。

レヘナが目の前にいる。すでに両膝を水の中に入れていた。ダブルスーツとブラウスはびしょびしょに濡れている。付着した赤い血はほんの少し流れ、流線を描いていた。長い赤い髪の毛は先まで濡れそぼっている。水滴がぼたりぼたりと滴り落ちていく。

「大丈夫？」と、レヘナは笑いながら言う。

「大丈夫ですよ」

ティキはレヘナに笑いかけた。

## 十九

噴水の中央にあった球体は、エレベーターだった。びしょぬれのティキ達が乗り込んだ瞬間に、入り口は勢いよく閉まり、急激に落下し始めた。

入り口は狭かったが、球体の中はティキの想像以上に広かった。二人が足を伸ばして座っても狭くないほど充分に床は広い。エレベーターが動き始めると内部の壁がぼんや

りと光を放ち、屋内程度の明るさで球体は満たされた。

自由落下ではないが、体重が軽くなったのがはつきりとわかる程度には急激な落下だった。ティキは胃が持ち上がるような感触を気持ち悪く感じた。

レヘナは壁により掛かって、足を伸ばして座っている。右手で胸を押さえて、苦しそうに顔を歪ませている。ティキはその隣に腰を下ろしていた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわ。もうなんか、死にそう」

そう言っつて、レヘナはティキに微笑みかけた。前髪を指先で掴み、くるくると回す。レヘナの指先に雫が伝う。

「ごめんなさい」

「いや、別に気にしていないから」

レヘナは首を軽く振る。水滴がちらちらと飛び散った。

「そんなことより、これからどうするかが問題ね。相手はアイレムを破壊できる規模の武力を持っている」

「なぜ、わざわざ自分の懐に僕たちを招待したのでしょ。僕たちと話し合いたいのなら、さっきの噴水でも充分目的は達せられるというのに」

「わからないわ。しかし、何か意味があるのは間違いない。きつと推測しても無駄でしょう。相手の素性が一切割れていないのだから」

「父さんの歴史循環説が正しいのだったら、今会つ『管理者』はもつ何十回も文明を滅ぼしていることになりますね。僕には、その理由が皆目見当がつかない。好きなように文明を滅ぼして、何が楽しいのか僕にはわからない」

ティキは歴史循環説を完全に知っているわけではなかった。シナルクから概要だけを聞かされていただけだった。ようするに、『管理者』は何度も何度も文明を滅ぼしているという事だ。ティキにはそれが、気に入らないおもちゃを作り直している神のようで気に食わなかった。何の権限でそのような暴挙が出来るのか、ティキにはわからなかった。

レヘナはため息をついた。

「私にもわからない。重力波レーザーを持っているということは、太陽系が『探究者』にめっちゃめっちゃにされた頃の技術を持っているということになる。通常は、植民船がある恒星系に根を下ろした後、光の速さで数年以上かかる距離で孤立してしまうから、重力波レーザーという兵器の開発技術は使う機会がない為に忘れ去られてしまうのよ。」

情報船団が情報収集したどの恒星系の文明も、重力波レーザーの事など全く知らなかった。知っているのは情報船団の人間だけだった。まあ、ただ一つ、居住可能惑星が四つある二重星系では知られていたの。惑星間規模の戦争が四六時中行われていて、抑止力として持っていたみたい。最後にそれぞれが重力波レーザーを使用して、結局四つともすべてが小さな無数の岩のかたまりになっていたわ」

ティキはその光景を想像しようとした。だが、できなかった。二重星系の中の四つの居住可能惑星というのは想像の範囲外だった。そしてそれらが互いに重力波レーザーという武器を使って破壊しあうという構図も全く理解不能だった。

それでも、重力波レーザーというものが恐ろしい兵器だと言つことはわかる。そんなものを持っている『管理者』は、一体何者なのか。

エレベーターは振動している。内側の歪曲した壁には突起物はなかった。のっぺりとした壁はクリーム色に光っている。この振動は一体いつまで続くのか。落下の感覚から、現在少なくとも地下百メートルよりも下にいることはティキにもわかった。

「レヘナは、『管理者』に会ったらどうしますか？」

「本当は、私が収集した情報が『ブレーヴ』に送り届けられるとしたら、この文明が滅びようが滅びまいが関係ないのだけれど……」レヘナは言葉を切り、ティキを見た。悲しそうな、慈しむような目つきだった。何を慈しむ目つきなんだろう、とティキは思った。

「それだとあまりにも無責任だと、今、私は思っている。大なり小なり、私がこの場所にいることで生じたことはあると思う。少なくとも、私はティキの運命を変えた」

レヘナはティキに向かって微笑み、続ける。

「もし私がここにやってこなければ、君は何も知らずに死んだのかもしれない。『管理者』は私が来ようが来まいが文明を滅ぼしたはずだから。私と出会ったことで、君は知ってしまった。知らなくてもいいことを知ってしまった」

レヘナはティキの方を向き、ティキの両肩を掴んだ。その手の力は弱々しい。

単一の青の瞳が、見続けると深みへと吸い込まれてしまうような青が、ティキを見つめている。

「ジーンズという子はある意味幸せだったのかもしれない。自分が何故死んだのかわからないくらい一瞬で死んだのだ

から。知らなくていいことを知らずにすんだのだから。無力感にうちひしがれて死ぬよりも、何もわからずに死んだ方がいい……」

レヘナの手の力が抜けた。重力に逆らわずに、レヘナの手のひらはテイキの身体を滑っていく。そして、レヘナはテイキの胸にもたれた。ふんわりとした甘い花の香りが漂う。

「レヘナ……？」

テイキはどうすればいいのかわからなかった。両手を挙げて、ただレヘナを見ることしかできなかった。レヘナの小さな頭の重みを感じた。赤い髪の毛がふわっと広がっている。レヘナは顔を上げようとしない。

「君を絶対に殺させない。すべてを知ったのだから、生き延びてもらおう。君だけは殺させない。君だけは……」

レヘナは俯いたまま呟いた。

ゆっくりとレヘナは顔を上げる。目には涙を浮かべていた。瞳の端から、次から次へと涙が溢れている。涙は頬を伝い、顎から滴り落ちる。

テイキがその瞳を眺め続けていると、レヘナは大きく目を見開いた。弾かれたように身体を起こす。

「ごめん、ちよっと取り乱したただだから。心配しないでいいから。より多くの情報を手に入れることが情報収集者の存在意義なのに、何言ってるんだろう、私」

両手で涙を拭いながらレヘナは言う。そして、大きく首を横に振る。

「ねえ、空間メモリー、大事に持っているよね？」

「うん」

「絶対に落とさないでよ。肌身離さずもっていてよ。どんなことがあっても持ち続けてよ」

レヘナは真剣な口調で言う。何故自分に持たせるのかテイキにはわからなかった。レヘナ自身が持っていた方が安全なように思えたからだ。

「わかってるよ」

テイキは強くはつきりと言った。

エレベータのドアが横にスライドする。

緑色に照らされた薄暗い通路が真っ直ぐに伸びている。

テイキはレヘナに肩を貸して、立ち上がった。レヘナの身

体は軽かった。ティキは足で床をつついてから歩き出す。レヘナの容態は悪化していた。エレベータに乗る前は、ふらつきながらも歩くことができたが、今ではティキの肩を借りないと歩けない。かろうじて立っていることはできるらしい。

エレベータと同じように、通路全体が発光している。左右の壁や床と天井は、溶解でできた地上の地面のように反射率が高かった。上下左右の合わせ鏡のように、無数の二人で満ちている。その姿はどれも弱々しく、今から何かに挑戦する人間には見えなかった。

ティキは右手に空間メモリーを持ち、左腕でレヘナの身体を支えている。空間メモリーは乳白色の光を放っていた。その光がレヘナを白く照らし、苦しそうな顔をより鮮明に浮かび上がらせている。

「大丈夫ですか？」

「ん。大丈夫。ごめんね。こんなに急速に体調が悪化するとは思わなかったの。ちょっととした計算違い」

「計算違い？」

ティキがそう言うと、レヘナは弱々しく笑った。

「人体へのナノマシンの影響力についてのね。あ、ほら、あれはドアなんじゃないかな」

レヘナは左腕をゆっくりと挙げて、前方を指し示した。

前には、二人がいた。レヘナとティキが見える。それは壁があるということだった。鏡のように光を反射している。

ティキは一步一步を慎重に歩き、壁の前へと近づく。

滑るように壁が横にスライドする。音は全くしなかった。壁の向こうにはまた壁がある。緑色の壁にはティキとレヘナの顔が映っている。いま開いた壁とその壁との間隔は、人がちょうど二人入れる程だ。

一步を踏みだし、さらに前へと進む。二人はその間隔の中に入った。

空気の流れが変わる。ティキは後ろを向いた。すでに後ろの扉は閉まっていた。

「狭いですね」

「そうね」

ティキは正八面体を持ったまま、胸に手を当てる。前方の壁に正対した。壁には不安に怯えた自分の顔が映っている。

目をつぶる。大きく深呼吸をする。

目を開く。壁に映っているのは、もはや不安に怯えた顔

ではなかった。ティキはまっすぐに自分をにらみつけた。顔はやつれている。意志だけはしっかりと持っている、とティキは自分に言い聞かせた。

壁が、ゆっくりと上へスライドした。足下から強烈な光が射し込まれてくる。その光は正八面体と同じ乳白色だった。

目の前に、若い男がいた。

両手を広げて、ティキ達の方を見ている。

髪の毛は額付近で二つに分けられている。瞳の色は茶色。肌の色は濃い褐色で、黒と言っても差し支えない色だった。長身で優男のように見える。真っ黒のスーツを着ている。

男には乳白色の後光が射していた。

「ようこそ」

男は微笑んで言う。全てを見透かしているかのような瞳に射すくめられて、ティキは背筋が凍り付くような感覚を覚えた。右手に握った正八面体を強く握る。角が手のひらに刺さる。痛みがティキを視線の呪縛から逃れさせた。ティキは男をにらみつける。男は微笑みを崩さない。

「こんにちは」

レヘナがふらつきながらも一歩前へ歩く。側面の壁に手をつけて身体を支えている。ティキも一歩前へと進んだ。背後でドアが閉まった。ティキはそのドアに背をつける。ドアは非常に冷たかった。

部屋全体に乳白色の光が満ちていた。光は部屋の中心から放たれている。後光の原因はその光だった。何がその光を出しているのかは、ティキの位置からだと言えられて見えない。全体的に壁に金属的な鈍い光沢がある。奥の壁には何かを操作する為のパネルのようなものが備え付けられている。ティキから見て斜め前には、回転しそうな銀色の椅子が部屋の歪んだ情景を表面に映している。

ティキは右手に寒気を感じた。男がティキの右手を見ている。ティキは背中の後ろへと手を隠す。

「空間メモリーを持っているのか。やはり、おまえは植民船由来の人間ではないというわけだ」と、男はレヘナの方へ目を向けて言った。

「やはり空間メモリーの事を知っているのね。重力波レザーを利用できるのだからそうじゃないかとは思っただけだ」レヘナが言う。

「ほう、重力波レザーの事を知っているのか。なら話が早いな。おまえは『探査者』の事も知っているのだから？」

男は横に一歩移動した。

光に目が眩む。乳白色の光を放つ巨大な正八面体が部屋の中央に鎮座していた。高さは一メートル五十センチほど、幅は七十センチくらい。ティキは自分の手の空間メモリーを見た。色もつやも同じだった。目の前にある物と完全な相似形をなしている。内部で複雑に光を反射し、極めて透明度のある乳白色の光が放出されている。

男はその巨大な正八面体の側面に右手を置く。手のひらを上にして、左手はティキとレヘナの方へと向けられている。

「ようこそ。私はエプロフェン。かれこれ二万五千年ほどこの星の管理をしている。文明の興亡をすべて記録している」

二万五千年。ティキはこの言葉をここで聞くとは全く思っていなかった。二万五千年と言えば、レヘナ達情報船団が旅してきた年数に等しい。

こいつは何者なのだろう。文明が五百年以上前にも存在していたということは何となく予想がついていた。けれどもまさか二万五千年とは。歴史は一体何回繰り返されたのだろうか？ そしてこいつはどのような事を行っていたのだろうか？

ティキはエプロフェンの手を見た。指先はいびつで、角張っているように見える。つめが四角い。人間としては不自然のようにティキには思えた。けれど、人間ではないのなら、一体こいつはどのような存在なのか。それはティキにはわからなかった。

視線に気づいたのか、エプロフェンはティキを見る。その目つきは冷たい。冷笑しているように見えた。まるで自分が見たのはとるに足らない虫か何かであるというような目つきだった。

エプロフェンはレヘナを見る。レヘナに向かっては微笑みを絶やさない。

「私はここで、独自の『探査者』対策に取り組んでいる。私はこの対策が順調に進んでいると確信している。だが、おまえは私の対策を止めにここまでやってきた。わざわざ恒星間の深淵を渡って」

「アイレムの事も知っているようね」レヘナが言う。語気は鋭い。

「ああ、もちろん。私はこの恒星系に侵入する全ての物を監視している。『探査者』かどうか確かめる為に。おまえ



の船は残念だった。スペースガード装置が『探査者』が来襲したと勘違いしたのだ。スペースガード装置は、ある一定水準以上の瞬間エネルギーを発生させられる存在を『探査者』と認識するようにプログラムされていたのでね。おまえ達が『探査者』水準に近い技術力を持っていることが災いしたわけだ」

「重力波レーザーじゃ『探査者』にダメージを与えられないことくらい、知っているんじゃないの？」

「知っている。スペースガード装置は単なる足止めに過ぎない。注意をそらすことが目的だ。そこで時間稼ぎをすることによって、やってきた『探査者』への対策を練る時間を得ることができるのかもしれないのだから」

レヘナは足をよろめかせながら一歩前へと進んだ。壁という支えを失って、レヘナはいまにも倒れそうにティキには思えた。ティキが駆け寄ろうとすると、レヘナは手のひらをティキに向ける。ティキは動きを止めた。

「で、アイレムを消滅させたことに対する責任は、結局すべてあなたにあるわけね。故意にしる過失にしろ」

「ああ。悪かったとは思っている。勘違いだったわけだから。だが、通常すでに植民している恒星系には植民船を送らないはずだ。送ってきたおまえ達にも非はある」

「私達は植民する為にこの恒星系へと来たわけではないわけだから非はない。あなたが全て悪い」

レヘナはリュックに手をつ込み、四つの銃口を持つ震動粉碎銃を取り出した。両手で持ち、エプロフェンに向かって構える。エプロフェンは全く動じていなかった。ティキは手の中の正八面体を強く握る。自分が口を出せる機会は無かった。ティキは話を部分的にしか理解することが出来なかった。今はレヘナがやることを見守ることしかできない。

「私はあなたがこれ以上大量殺戮をするのを見ていられない」

レヘナが怒気を込めて言うと、エプロフェンは冷笑した。「おまえも、ただの感情論を用いる事で私の対策が間違っていると言うのか。感情論じゃ『探査者』から身を守れないというのに。大量殺戮であることは否定しない。だが、これは必要があることだ。より高度な文明を発展させる為に、やらねばならないことだ」

ティキには、エプロフェンが言っていることがよくわからなかった。文明を発展させる為に文明を滅ぼすというの

はどういうことか。やらねばならないとはどういふことか。何様のつもりで物を言っているのか。

「おい。僕たちを殺すことが、ジーンズさんや大統領を殺すことが、どう文明の発展に繋がるんだ」

エプロフェンはちらりとテイキの方を見た。だが、すぐにレハナの方へと視線を戻す。

「無視するなよ」

テイキは低く大きな声で言った。怒りを込めたが、怒鳴り声ではない。

エプロフェンは再びテイキに目を向ける。その目はテイキをまともに見ていないように見えた。エプロフェンはまたレハナの方へと視線を移す。

「おまえが私を止めたいのなら、私の対策が間違っていることを証明せよ。私の対策は少なくとも二万五千年、五百回の文明の興亡に渡って正常に機能してきた。私の狙い通りの効果をあげている」

「対策って何。それは大量殺戮を正当化するに足る理由だと言っの？」

レハナは銃を構えたまま言う。

「私の対策の正確な内容を知らない限り、感情論になってしまうのかもしれない。私の説明不足なのかもしれない」

「私たちも『探究者』対策を行っている。『探究者』対策の為に私たちはこの恒星系を訪れた。私たちのとった対策は、人間を大量殺戮しない。大量殺戮をしなくても『探究者』に対策することは可能よ」

「私はおまえ達の対策の事を知らない。おまえは私の対策を知らない」

エプロフェンは正八面体から手を離し、両腕を大きく広げた。

「私は二万五千年の間、外部の者と接触する機会を持たなかった。おまえは二万五千年ぶりの論客だ。私とは異なる思考をする存在だ。議論しようではないか」

テイキはエプロフェンの言動に虫酸が走った。こいつは僕たちの運命をゲームか何かに思っている。大量殺戮は必要な手段だと信じている。

「議論？ 馬鹿を言うな。おまえが間違っているのは明らかだろ？ 大量殺戮をする対策よりも大量殺戮をしない対策の方が正しい」

テイキがそう言うと、エプロフェンは冷徹な微笑みを見せた。

「そう考えるのはおまえが土着の生命だからだ。植民船由来の生命だからだ。おまえの正しいという感覚は主観的なものに過ぎない。おまえは自らが生き残れる対策を正しいと判断しているのだ。私たちはそのような低俗なレベルでの議論をするのではない。人類という種の存亡において正しいか正しくないかを議論するのだ」

「おまえは自分が何をやっているのか」

「土着民は引っ込んでろ」

エプロフェンは目を見開き、ティキの言葉を遮って言った。それは有無を言わさない権力者の顔だった。相手に対して絶対的な力を持つ者が見せる表情。ティキは金縛りにあったように、口が動かなくなった。

「では、議論しよう。その銃はしまった方がいい。私は銃を恐れない。おまえの腕が疲れるだけだ。精神活動は肉体活動の影響を少なからず受ける。なるべく万全の状態の方が議論しやすいだろう」

何かが間違っている。いや、すべてが間違っている。ティキはそう思った。だが、それを口に出して言うことが出来なかった。土着民、という言葉がティキに胸に突き刺さっていた。その言葉は、エプロフェンがティキ達をどのように認識しているかを端的に表している。頭の中が怒りで渦巻き、血が駆けめぐっている。ティキはただ正八面体を強く握って、腕をふるわせることしかできなかった。

こいつは権力者だ。権力者がどのような行動に出るか、僕はさんざん思い知らされていたのではなかったか。その上、僕の父以上にこいつは権力者だ。僕の父とは比べられないほどの権力者だ。僕はやはり権力者に屈するのか。僕は権力者の前では無力なのか。

「あなたは議論したいのかもしれないけど、あいにく私は議論したくない。そんな時間はないの」

レヘナが静かな声で言った。ゆっくりと銃を下ろす。

「けれど、あなたに対して、私たちは圧倒的に弱い立場にいる。私がおあなたを打ち負かさない限り、あなたはこの無益な滅亡の繰り返しをいつまでも続けるんでしょう？」

「無益などではない」

「ごめんなさい。言葉を間違ったわ。有益ではない滅亡の繰り返し。私たちの行っている行動と比べて」

レヘナはその場に座り込んだ。手から銃がこぼれ落ち、床で乾いた音を立てる。レヘナは顔面蒼白だった。

「大丈夫ですか？」

ティキはレヘナに走り寄る。彼女の手は小刻みに震えていた。ティキはその手を掴む。手はぞっとするほどに冷たかった。

「何をしたんだ、おまえ」

ティキは男をにらみつける。怒りのせいで視界が歪む。その歪みの中心には口元に微かな笑みを浮かべたエプロフェンがいる。

「私は何もしていない。こいつがただ座り込んだだけだ。そんなことはどうでもいい。さて、私から私の対策について説明しよう」

「精神活動は肉体活動の影響を受けるんじゃないか？ おまえはレヘナがこんな状態でも議論を始めるつもりなのか？」

「ああ」

ティキは拳を握りしめる。目を見開いてエプロフェンを見つめる。

「権力者は自分が良ければいいわけか。相手がどうなっても、自分さえ良ければいいわけか」

「言っている意味がわからない。おまえの言っていることは一貫性を欠いている。非論理的飛躍は無意味だ」

「てめえっ」

ティキは立ち上がるうとした。だが、レヘナに腕を掴まれた。ティキは下を見る。レヘナが苦しそうに顔を歪めてティキを見ていた。荒い呼吸をしている。

「大丈夫だから。私に任せていて。これは私たち情報船団の対策とあいつの対策、どちらがより効果のある『探究者』対策なのかを決める議論だから。これで情報船団の対策がより効果があるとあいつが認めれば、この星の滅亡の繰り返しは避けられる……」

レヘナは突然大きく咳き込んだ。喉に空気が引つかかっているような咳き込み方だった。レヘナの口元からは血が流れている。

「大丈夫じゃないじゃないですか」

「大丈夫よ。まだいける。痛覚は治癒ナノマシンで大分和らげてあるから、明晰に思考できるし」

レヘナは弱々しくティキの手を下に引く張った。ティキはゆっくりと床にしゃがむ。レヘナはティキの肩に手を置いて立ち上がった。

「私から先に説明させて」

「構わない。おまえは死にかけているからな」

エプロフェンは感情を伴わない声で言った。レヘナは目を一度強くつぶり、開く。

「私たちは情報船団を作っている。あちこちに情報回収用の船を放ちながら亜光速で移動を続けている。『探査者』が光速が最速という物理法則に従うのなら、私たち情報船団には絶対に追いつけない。私たちは世界に散らばった人類の情報を収集しつつ、情報に引き寄せられるという『探査者』を振り切り続けることができる」

レヘナは言い終わると、胸に右手を当てた。息をゆっくと吐きながら、エプロフェンを見ている。

「ふむ。確かに、その対策ならば大量殺戮の必要はないな」  
エプロフェンは腕を組んだ。

「だが、それは結局逃げているだけではないか。『探査者』の脅威はいつまでも消えない。」

「情報を集め、統合することで、最終的には『探査者』に對抗できるような技術を開発できるわ」

「植民された恒星系での情報収集を行っても、そこで飛び抜けたすばらしい技術、『探査者』に對抗しうる可能性を持つ技術を発見することはできないだろう。何かの脅威に対して恒星系が文明を発展させているわけではないのだから。そのような情報を寄せ集めたところで、目的の技術など開発できない。そうだろう？」

「そんなことはないわ。情報船団はねずみ算式に増えている。空間メモリーには情報を無限に記録できる。私達には無限に近い時間がある」

「宇宙の時間は無限ではない。千億年もすれば全エントロピーが最大になり、宇宙は終わる」

「宇宙の死まで逃げ切れればいいじゃない。そうすれば人類は種として成功したことになる」

レヘナは胸に両手を当てて、大きく深呼吸をした。テイキはその様子をただ眺めていた。

「それでは、『探査者』に勝つたことにはならない。『探査者』よりも発展したことはない」

エプロフェンは大きなため息をついた。首を大きく横に振る。

「人類としては成功しているだろうな。その対策は。だが、この惑星の事を考えると、それは成功していない」

「なぜ」

「その対策では情報船団自体は『探査者』から逃れられるだろう。だが、植民された恒星系にとっては、『探査者』

の脅威は何も変わらない。やって来られると全滅させられる事には変わらない。つまり、この星に『探究者』がやってきた時、情報船団は何の役にも立たない」

「……」

レヘナは何も言い返さなかった。ただエプロフェンを見つめていた。歯を食いしばっているのは苦痛のせいだけじゃない、とテイキは思った。

「私は、この星に対して最良の選択を行わなければいけない。おまえの対策は最良ではない」エプロフェンが静かに言う。

「残念だよ。もう少し議論できると思ったのだが。おまえ達の対策は、対策以前だ」

「おまえの対策はどうなんだよ。おまえのも実は対策以前なんじゃないのか。今は二つの優劣を比べているんだろ？ おまえのがより駄目なら、レヘナの方がよい対策になるじゃないか」

テイキは怒気を含めて言った。肩に置かれたレヘナの手を掴み、自分の首に回してから立ち上がる。

エプロフェンは笑った。

「お、確かに、そのような考え方はできるな。私の対策をおまえ達に判断してもらおう機会はあるべきだ」

エプロフェンはゆっくりとテイキ達の方へと歩み寄る。テイキは睨んだ。エプロフェンの茶色い瞳はのっぺりとしている。その視線はテイキには向いていない。レヘナをはつきりと見ている。テイキは振り向いてレヘナを見た。レヘナは感情のこもっていない瞳でエプロフェンを見ている。

エプロフェンはテイキ達の目の前で立ち止まった。

「私は文明を最盛期で滅ぼす。もっとも発展している時に滅ぼす。なぜだかわかるか？ 文明の発展には起伏があるのだ。波のように、もっとも良く発展した時期の後には、ゆっくりとした後退が起こる。そしてまた発展する。その波の繰り返しで、徐々に文明は発展する」

エプロフェンはテイキの顔をのぞき込んだ。茶色い瞳の中には、青白い光が宿っていた。

「だが、『探究者』に対抗するには、文明の急速な発展が必要だ。ゆっくりとした後退期はいらぬ。だから私は最盛期で文明を滅ぼす。だが、完全には滅ぼさない。ぎりぎりで全滅しないようにする。なぜだかわかるか？ 賢い土着民」

エプロフェンは目だけをテイキに向けて言った。

「わかるわけがないだろ」

ティキは一步身体を引いて答えた。

「人間というのは、復興にはものすごい力を発揮するのだ。一度打ちのめされてから元に戻るまでの時間はとても短い。ゆっくりとした後退期が続く時間よりも遙かに短い。一度滅亡させることで、後退期無しで文明を発展させることが出来る」

エプロフェンはくるりと背を向ける。そして二、三歩歩いて振り返った。

「私は二万五千年で、簡易的な重力場制御技術を開発させることに成功した。首都上空に浮かんでいる球体をおまえ達ははっきりと見ているだろうか？ おまえ達情報船団とやらは、重力場制御技術を持っていない。もし持っていれば小型艇はあのような飛び方をしない。イオンジェットエンジンなど使わない。私の対策をあと二万五千年同じように続ければ、『探査者』など軽く凌駕する技術を開発させることが可能だろう」

エプロフェンは素早く両手を広げた。

「それでも私の対策が間違っているというのか？」

ティキはレヘナを見る。レヘナは口を開こうとしない。何も言わない。どんよりとした瞳でティキを見つめ返すだけだった。

何か言えよ。なんで黙っているんだ。何の反論もないのか。

ティキはレヘナの腕を強く握りしめた。痛みを感じるほど強く握りしめているというのに、レヘナの反応は何もない。

「レヘナ。なぜ何も言わないんだ。何か反論してくれよ。こいつの対策が根本的に間違っているって言ってくれよ。自分の対策の方がいいって、示してくれよ」

ティキは前に回り込みレヘナの両肩を掴んだ。その拍子に、正八面体が手からこぼれ落ちる。ティキの視界の外で小さく音を立てた。レヘナの両肩を揺さぶる。レヘナはぼんやりとティキを見ている。

「レヘナ。どうしたんだよ。なんで何も言わないんだよ。僕にはあいつを論破することなんてできないんだ。僕は土着民だから」

「そんなこと言ったらだめ。土着民だっていいじゃない。その星に住んでいる者が自分の命の心配をして何が悪いの……」

レヘナは消えそうな声でそう言い、ゆっくりと目を閉じた。肩を掴んでいたティキの手が下に引っ張られる。

「レヘナ？」

膝を折り、レヘナはティキの方へと倒れ込んだ。ティキの肩にレヘナの額が触れる。甘い香りがふわりと漂う。

「安心して。今生の別れじゃないから……」

レヘナの頭が下がっていく。ティキは肩を強く掴んだが、レヘナの身体が重力に屈するのをやめさせることが出来ない。レヘナの身体が横に傾ぐ。赤い髪の毛がだらりと下がり、床に触れた。

ティキの手は、何も掴んではいなかった。

床には、目を見開いたままのレヘナが横に倒れている。

「死んだか。放射線を浴びすぎていたんだろうな。議論ができなくなっただけだ」

ティキの後ろで、エプロフェンが静かに言った。

死んだか。その言葉がティキの中で膨らんでいった。全身の血が周囲に拡散していくような錯覚を覚えた。汗がひいていく。両手の指の力が抜ける。

レヘナの半開きの口には、赤い髪の毛が数本入りこんでいた。

今生の別れじゃない？ どういう意味でレヘナは言ったのだろう。死んでしまったら、もう何も残らないのに。何を安心できるんだ。僕は何をすればいいんだ。

両拳を握りしめる。

僕がなんとかしないといけないんだ。

「さて。議論は中途半端な所で終わってしまったな。だが、私の対策が正しい事は再確認できた。彼女が用意した対策は、私にとっては意味がなかった。私にとって意味があるのは、私の対策のみ」

「待てよ」

ティキは床に落ちている正八面体と銃を両手で取りながら言った。振り向きエプロフェンと正対する。左手に持った正八面体からは、無数のまばゆい白い光が直線的に放射されていた。その光は壁と床に幾重にも反射して、辺りを照らすほどに明るい。それはエプロフェンの顔を下から照らし付け、彼の顔の陰影を際立たせていた。

ティキは右手で銃を構える。

「なんだ。私は銃など恐れないが？」

「レヘナの対策は、人類にとっては正しいが一つ一つの恒星系にとっては正しくない、とおまえは言う。だが、おま



えの対策は、恒星系にとっては正しいかもしれないが、僕たち一人一人にとっては正しくない」

「それは主観的なものだよってどう？」

「おまえのも主観的なものじゃないか」

ティキは真つ直ぐにエプロフェンの顔に狙いを付けた。

エプロフェンは何も動じずにティキを見ている。

「人類にとつて正しいのは、レヘナの対策だ。おまえは、おまえの主観に基づいて、自分の恒星系が生き残る為にはレヘナの対策は正しくないと考えている。それは僕が自分の事を考えるのと全く同じじゃないか。本当に人類について考えているのなら、レヘナの対策をとるべきだろう？」

ティキは腕が震えていた。吐き気がする。首の周りに鳥肌が立っている。ティキは自分が引き金を引くとは思えなかった。銃を構えることで、少しでも優位に立とうとしているだけだった。自分は無力ではないと自分に言い聞かせる為に銃は必要だった。

エプロフェンはティキを何の感情もこもっていない瞳で見ている。何かを観察しているかのような瞳だった。赤い瞳孔が徐々に開いているように見えた。

「残念だが」

エプロフェンは低く冷たい声で言う。エプロフェンは両腕を徐々に広げていく。ティキはつばを飲み込み、口で息を吸った。

「おまえは外部の者ではない。私は内部の者と議論するつもりはない。即ち、おまえがどんな事を言っても、私には関係がない。私はおまえとは議論しない。私は私の考えのもとで対策を実行する。私は私の対策が正しいという事を認識した」

エプロフェンはティキに背を向ける。ゆっくりと椅子の方向へと歩む。片手で空間メモリーに触れた。空間メモリーの乳白色の光が徐々に消え始めた。

エプロフェンは振り向いた。

「もうこの文明について記録することは何もない。予定通りに歴史を循環させる」

額から顎へと流れる汗が冷たかった。空気は極限にまで張りつめられている。ティキは、意志の力を振り絞って口を開く。

「おまえは、本当に人類について考えているのか？ 僕が言ったかレヘナが言ったかなんて関係ないじゃないか。誰が言っても、おまえが人類について考えてないという事実

「は変わらない」

「おまえにはもう用はない。役目は終わった」

どこからか閃光が煌めいた。

頭が真っ白になる。

やや遅れて右肩に激痛が走った。焼け付くような痛み。

右腕全体が痺れ、ティキは銃を落としてしゃがみ込んだ。

空間メモリーを持ったまま右肩を押さえる。正八面体に水滴のように血が付着する。

右肩はぐちゃぐちゃだった。肉がめくり上がり、肩の骨

が見える。頭の血が引いていく。

ティキはエプロフェンを見た。エプロフェンはやはり感情のない瞳でティキを見ている。

「興味深いな」とエプロフェンは呟いた。

再び閃光。右胸から弾けるように血と肉が飛び散った。

ティキはうめき声を漏らす。激しく咳き込むと、血が床に飛んだ。

視界が歪んでいる。目の前が全体的に白い。

ティキはゆっくりと立ち上がる。いつの間にか不思議と痛みは消えている。右腕は完全に動かない。肩からぶら下がっているという感覚だけだ。

ティキは前へと歩き出した。足はふらつかなかった。なぜ歩けるのかティキにはわからなかった。血はまだ流れ続けている。服がぐしょぐしょで気持ち悪い。気持ち悪いだけだ。痛くはない。左手の親指と人差し指で正八面体を掴み、小指で露出した肋骨に触れる。骨は硬かった。

僕がなんとかしなければいけないんだ。

「正八面体は暖かい。傷口には柔らかな光が当たっていた。そうか。治癒ナノマシンが注入されているのか。興味深い」

「エプロフェンは空間メモリーにもう一度触れた。乳白色の光が再び部屋に満ちる。」

右腕の感覚が戻ってくる。指先が動かせるようになる。

ティキは腰をかがめ、転がっている銃を右手でつかんだ。

「組織再生が恐ろしいほど速いな。二万五千年の間のどの文明もこれほどの治癒力のあるナノマシンを作り出したことはなかった」

「エプロフェンはティキに向かって呟いた。巨大な空間メモリーが明滅する。」

「おまえは誰の為に文明を滅ぼしているんだ」

ティキは銃口をエプロフェンに向けた。腕は震えていな

かった。エプロフェンは相変わらず感情のない瞳でティキを見ている。巨大な空間メモリーの上側一側面に手のひらを触れたままだ眺めている。

僕は無力ではない。僕はレヘナからもらったナノマシンを持つているんだ。僕はただの一般民衆ではない。僕は僕が出来ることをやらねばならない。レヘナの代わりに。

エプロフェンは、口元に笑みを浮かべているように見えた。

引き金を引く。

破裂音が部屋に轟いた。音は部屋の中で何度も反響する。スローモーションのようにエプロフェンの右腕が砕け散った。

黒いかけらが飛び散る。それらの一つ一つは、空間メモリーの光を受けて無秩序に煌めく。無数の黒い粉が、エプロフェンの肩口から舞う。複数の黒い染みが空間メモリーに広がる。エプロフェンは倒れない。能面のような無表情。もう一度撃つ。

エプロフェンの頭の右半分が飛び散った。床や壁にまき散らされたのは、脳漿ではなく黒いかけらだった。液体の飛沫のようで、固体の粉塵のようにも見える。壁に張り付いた黒いかけらは、ゆっくりと筋を残して床へと滑っていく。

「銃など恐れない、と言ったろう？ この身体は私にとつては重要ではない。身体すべてを破壊しても、私は存在している。歴史は循環を続ける」

エプロフェンは黒い液体を頬に滴らせながら言う。次から次へと黒い物があふれ出している。それは虫のように蠢いている。エプロフェンの瞳孔は開ききり、すでに瞳の茶色は消えている。瞳は光沢のある赤だった。

エプロフェンは、ゆっくりとティキの額を指さす。

「治癒ナノマシンは脳すらも修復できるのか、それを試してみたい」

エプロフェンの人差し指の先は金属光沢を持っていた。黒い穴がティキに向けられている。

怖かった。どうしようもないほど怖かった。でもなぜか、身体は震えなかった。身体は好調だった。頭だけが、思考だけが極度の恐怖に浸食されている。逃げ帰りたいという衝動があるのに、身体は逃げよつとしない。それはまるで、何者かの意志の力が働いているかのようにだった。

身体はどこまでもエプロフェンに逆らおうとしている。

逃げるという行為を選択することが出来ない。自由意志が制限されている。エプロフェンをなんとかするという行為以外は選択できなかった。

なぜだかわからなかった。

ティキは一步足を前に出す。エプロフェンの人差し指を凝視する。

微かに指が動いた。

ティキは前方に身体を傾ける。両腕を上げて、部屋の中に鎮座している空間メモリーめがけて跳ぶ。両腕を引き戻しながら、銃口でエプロフェンに狙いを付ける。

二万五千年の歴史がなんだ。そんなものなんていない。身勝手に文明を繰り返し滅ぼしてきたコレクシヨンなんていらぬ。

一瞬、空間メモリーを破壊したらどうなるのかという考えがよぎった。何かが起こるのは間違いなかった。周囲の空間には無限大の情報記述できないのだから。

だが、すぐにその考えを頭から追いやる。

「どうなるかと、関係ない」ティキは呟いた。

閃光が煌めいた。だが、その光はティキには当たらない。エプロフェンの顔に初めて焦りの色が見えた。

ティキは腕を素早く横に動かす。空間メモリーに狙いを定め直し、撃った。

巨大な空間メモリーが身震いを始める。それと共に部屋全体が揺れる。ティキの顔に赤い液体が降りかかる。右腕の皮膚がべろりと剥け、動脈から血が吹き出している。痛みは感じなかった。ティキは何度も何度も右手でトリガーを引いた。そのたびに空間メモリーの振動が大きくなる。

「やめろっ。土着民っ。それ以上撃つと空間メモリーが壊れる……」

ティキはふとエプロフェンの方に目を向けた。エプロフェンは大きく口を開けて硬直していた。口が開きっぱなしでも、エプロフェンの声は口から聞こえてくる。

「やめろ。二万五千年が。私の自我が。『探査者』対策が

「関係ない」

ティキは銃口をエプロフェンに向け、撃った。エプロフェンの上半身は碎け散り、間欠泉のように黒い液体が噴出した。震える正八面体は降りかかる液体をまき散らす。

巨大な正八面体は、内部から透明度溢れる白い光を放出させ始めた。正八面体を構成する正三角形の一つ一つがそ

れぞれ違った方向に振動している。部屋全体が大きな振動音に包まれた。

足下が大きく揺れ、ティキは体勢を崩す。その拍子に銃を床に落とした。銃は床を跳ねながら部屋の中心部へと転がっていく。体勢を立て直しきれずに、ティキは床にしりもちをついた。

ティキは左手を見る。

左手の正八面体、レヘナの空間メモリーが乳白色の光を放出している。エプロフェンの正八面体の光とは異なり、柔らかな霧のような光だった。小刻みに震えながらふわふわとした光を周囲に漂わせている。

黒い液体が床一面を覆い尽くしつつあった。波が立っている。その液体はティキの所にも来ている。ティキの身体に染み込もうとしている。ティキはそれをすくい上げる。ねっとりとして重かった。

周囲に光が満ちていく。柔らかなレヘナの正八面体の光と、鋭いエプロフェンの正八面体の光。どちらも白い。ティキは不思議と落ち着いていた。もう何もする気が起きなかった。自分がやることをすべてやってしまったかのような感覚だった。

「これで、もう、歴史は循環しないんだろうか」

視界全てを覆い尽くそうとする白色光の中で、ティキは呟いた。

最後に、空間メモリーの面の一つが、剥がれて床に落ちたのが見えた。

## 二十一

エプロフェンとレヘナは、存在確率が混ざり合った状態で存在していた。

空間メモリーには、無限大の情報を記述できる。

正八面体の内部空間は、二十六次元すべての空間が引き延ばされている。

正八面体を構成する面は、原子スケールまで正確な正三角形であり、その形状が実空間と内部空間を完全に隔てている。実空間を記述する量子力学は、内部空間には及ばない。

正八面体の面が剥がれた。

引き延ばされた二十六次元は、実空間の浸食を受けた。

通常の三次元は、内部空間の浸食を受けた。

両空間は混ざり合った。

通常は、混ざり合ったとしても大した問題は起きない。

情報は量子化され、実空間に記述できる量よりも多い情報量は破棄される。

量子化は即時的な物ではなかった。量子化には無限小とはいえ若干の時間が必要だった。

量子化が行われる前に、二つの空間メモリーが、流出した二十六次元空間を媒体としてお互いに接触した。

計五万年分の情報が、一つの二十六次元空間に記述された。

それは、二十六次元空間の情報密度限界すらも超える量だった。

記述できる情報量は無限大でも、情報密度は有限だった。支えを失った情報は、一点への爆縮を開始した。

すべての情報を混じり合わせながら。

## 二十二

エプロフェンは情報の海の表層に浮かんでいた。

自分は確か消滅したのではなかったか、とエプロフェンと思う。テキキに空間メモリーを破壊され、自分を構成していた情報は空間メモリーから流出したはずだ。

情報の海は本物の海とほとんど外見は変わらない。二万五千年前、エプロフェンがそう設定したからだ。青空に太陽が輝き、穏やかに揺れる海面はその光を受けて煌めいている。無数の乱反射した光がエプロフェンの目に入る。エプロフェンは目を細めた。

なぜ、自分は空間メモリー内に存在できているのか。空間メモリーの正三角形が剥離したのをはつきりと見たのだ。浮力が心地いい。情報の海は冷たく、気持ち良かった。

エプロフェンは両腕を太陽に向かって伸ばした。自分の手の隙間から太陽光が漏れてくる。手のひらは光を受けて明るくなっている。

両手をしっかりと握り、現実空間にアクセスする旨を空間メモリーに伝えようとす。

だが、何も起こらない。空間メモリーからの反応は何もなかった。

エプロフェンは何度か、空間メモリーに命令を実行するように命じた。いつもならば、頭の中で思うだけで命令を実行させることが可能だというのに、何も起こらない。

突如、水平線が盛り上がり始めた。

エプロフェンを包み込むように、海面がお椀型に湾曲し始めている。海が壁のように周囲にそびえ立ち始める。

エプロフェンは真上を見た。太陽が四角い。水平線が円になり、その円は徐々に小さくなっている。円は太陽を飲み込もうとしている。何が起きているのか、エプロフェンには皆目見当が付かなかった。ただ、何か普通ではない事態が起こっているということしかわからなかった。

周囲の空間が湾曲し続けていても、エプロフェンがいる場所は歪んでいるように見えない。エプロフェンはただ波にたゆたいながらその様子を見ていた。

太陽が水平線に飲み込まれる。海は暗くはならなかった。相変わらず海面では光の煌めきがある。

エプロフェンは情報の海に取り囲まれた。

レヘナは、水の中にいた。

目の前の情景は揺れていた。青い光が様々な濃度で、空間に重層的に広がっている。微小な青緑の粒子が光の合間をゆるやかにすり抜けている。それらの粒子はまるで霧のようにレヘナを取り囲んでいた。

重さを感じない。どこが上なのか見当がつかない。どの方向も全く同じ景色だった。

レヘナはゆつくりと腕を動かす。濃密な流れがレヘナの手からみつく。その粘性が間違いなく自分が液体の中にいることをレヘナに自覚させた。

息は苦しくない。体調はずこぶる良かった。

そう思ってから、レヘナは苦笑する。体調という概念はすでに無いはずだからだ。

レヘナは、今の自分が本物のレヘナではないことを知っている。自分が正八面体に転写されたコピーだということを知っている。本物のレヘナが飛行機の中で作り出した、偽りの人間。レヘナを構成していた情報のみの存在。飢えることも、病むことも、死ぬこともない。

だが、本物であろうと偽物であろうと関係がない、とレヘナは思う。現実世界に対しての影響力の有無以外に差異はないからだ。自分がやれることは変わらない。データのみの存在でも、情報船団の構築を指示することは可能だ。

エプロフェンのように、現実世界へのインターフェイスとしてロボットを使う事もできる。自分の記録媒体が有機物質であろうと、無機物質であろうと、空間構造であろうと

と、自分が自分であることに変わりはない。

「ここは、どこなんだろ」

レヘナは声に出して言った。

自分が目を覚ました時、本物のレヘナはこの世にはいないはずで、すぐに状況を把握できるはずだった。自分は空間メモリー内部からテイキに語りかけるはずだった。

だが、それはできなかった。空間メモリーの操作の命令が受け付けられないのだ。レヘナが把握できているのは、自分の体内のありのままの情報だけだった。自分の精神を矯正して感情を変化させるということすらもできない。

空間メモリーという空間に対する影響力が皆無だった。

レヘナは目をつむり、ただ考え続けた。

考えること以外に何もすることができなかったから。

テイキは、自分がどこにいるのかわからなかった。

いや、自分がいることすらもわからなかった。実体があるのかどうかわからなかった。

エプロフェンの正八面体の面が剥がれた瞬間、視界が急激に歪んだ。その後から、五感が消失していた。

考えるという行為以外は何も出来ない。考えるという事で自分がここにいるということを感じられた。考えなければ自分は消えてしまう。そうテイキは思った。

何が起こったのか、見当がつかなかった。空間が崩壊したわけではないとはわかった。今ここに自分が存在していることが証拠だ。

「僕はここで何を考えていたのだろうか」

考えることは片っ端から忘れていってしまう。まるで記憶というものが不在かのようなようだ。正八面体の面が剥がれたところまでの記憶は残っている。しかし、その後、五感が剥奪された状態で自分が何を考えたのかということがわからない。時間経過もさっぱりわからない。正八面体の面が剥がれた瞬間は、一秒前でも十分前でも一年前でも納得することができた。

喋りながら消えていく。寒い日の夜の白い息のようだ。口に出した時にははつきりとしているのに、すぐに消えて見えなくなってしまう。

考えるのをやめると、本当に存在が消えてしまうのだろうか？

テイキは何も考えないことにした。



気がつけば、レヘナは海を見下ろしていた。水の中ではなく、空気の中にいた。耳元で囁く風の音が心地よい。

海の波は穏やかだった。レヘナがいる高さからは波を見ることは出来ない。レヘナは自分がどのくらいの高さにいるのか、さっぱりわからなかった。

海面にはいろんな色が見える。赤も緑も、茶色もオレンジ色もあった。無数の物体が海面に浮いているようだった。何が浮いているのだろうか、とレヘナは考える。すると一瞬にして自分のいる位置が変化した。海が近くなった。波を若干見分けられるようになった。海面はゆっくりと上下に揺れている。

海面に漂っていたのは、人間だった。

無数の人間が海を覆い尽くすように浮かんでいる。どの人間も仰向けの体勢で浮かんでいた。目を閉じて、両手を腹の上に置いて、安らかな顔で波に身体を任せている。老若男女様々な人間達が同じようにたゆたっている。

水平線の彼方まで、どこまでも人間が浮かんでいる。

レヘナには、この人間達が何者なのかわかっていた。

空間メモリーにデータとして保存されている人間達だ。

レヘナの空間メモリーには情報船団の歴史が詰まっている。不慮の事故などでは無い限り、役割を終えた人間はデータとして保存される。

だが、起動されることはない。あくまでデータとしてのみ存在が許されている。なぜならば、空間メモリーの体積は有限であり、人間一人を現実空間と同じ処理速度で動かすには大変な計算リソースが必要だからだ。情報収集艦アイレムが備えていた空間メモリーでさえ、十人の人間を起動させることで精一杯だった。レヘナの持っていた空間メモリーの体積では、人間一人すらリアルタイムで動かすことが出来ない。レヘナの体感時間は、現実時間の十二分の十一の速度で動いている。

レヘナは見知った顔がないかどうか見回した。知っている人間はいない。それは当たり前だとレヘナは思った。レヘナが知っている人間とは、情報収集艦アイレムにいた人間だからだ。アイレムの人間達は空間メモリーに記録される前に消滅してしまっている。

「エズベル」

エズベルには、もう二度と会えない。

そのことを改めて思い出し、レヘナは胸を締め付けられた。

けれどももしかしたらいるのかもしれない、と思うと、探すのをやめることが出来ない。もしかしたら、という可能性すらない事をレヘナは頭で理解している。それでも、万に一つの可能性、というものがあるような気がしていた。

どの人間の顔にも後悔の色は見えない。殆どが微笑んでいる。不敵な笑いを浮かべている者もいる。ここにいる人たちは、自分の役割を終えて完全に満足してデータになった人ばかりなのだから、当たり前だった。

レヘナがある若い男の顔を眺めていると、その男の目が見開いた。どこか特定の場所を見ているわけではなく、ただ真上に目を向けている。レヘナは息をするのも忘れてその男を見た。空間メモリーの体積的に、もう一人の人間が動ける処理速度は得られないのだから。

突如、海面が動いた。

海面に浮かんでいるすべての人間の目が開いている。首を動かし、自分がどこにいるのか確認しようとしている。ざわめきが広がっていく。

水平線の向こうにまで広がる人間の集団のすべてが、起動されていた。

レヘナは吐き気を覚えてうずくまった。目を閉じ耳をふさいで、自分が体験していることが真実ではない事を祈り続けた。こんな事が絶対にあり得るはずはない。こんな事は不可能だ。ありえない。

呼吸が速くなり、汗が絶え間なく滲み出し、頬から顎へと筋になって流れ落ちる。そのことを感じて、レヘナはさらに混乱した。データのみの存在なのに、なぜそのような事が起こるのか。余計な体内現象のシミュレーションは計算リソースの無駄だから行われなければならないのか。

レヘナは耳をふさいでも聞こえてくるデータ達のざわめきに思考をかき乱されながら、ただうずくまり続けた。

エプロフェンは何が起こったのか理解した。

空間メモリーの情報として二万五千年を生きてきた経験が、レヘナとの違いだった。『探査者』についての思考を続けていたことが、違いの一つだった。

今、エプロフェンは五官を持たない。情報すら入っていない。彼は純粹な思考のみの存在だった。だが、エプロフェンは動じなかった。過去に、意図的に五感を剥奪して行動

した事があつたからだ。余計な情報が入り込まない状況は、ただ考え続けたい時には好都合だった。

二つの空間メモリーが融合し、二十六次元空間が爆縮しつつある。一つ一つの次元が折りたたまれ、最終的には零次元に行き着くのだろう、とエプロフェンは考える。空間メモリーに存在するデータは、二十六次元の時にもっとも良く動作するようにできている。次元が減ることで、環境をシミュレーションする余力が無くなったのだろう。

「空間メモリーに蓄えられる情報は無限ではなかった。自分達人類が勝手に思い違いしていただけだ」

そう考えれば、『探査者』の行動につじつまが合う。なぜ、友好的な関係を結んでいた人類に対して『探査者』は攻撃をしかけたのか。なぜ、忽然と消えたのか。

「空間メモリーの臨界点を突破したかったからか」

エプロフェンはどこにも発声されない声で言った。五感が失われた状況では、声は思考と同じだった。

太陽系にやってきた時の『探査者』は、自らの保持する空間メモリーの臨界点ぎりぎりの情報を保持していたのだろう。人類という知的種属の情報を得ることによって、臨界点を突破するつもりだったのだろう。だが、人類のデータベースの情報すべてを記録しても、臨界点を突破できなかった。だから、太陽系を壊滅させた。攻撃による人類社会の反応、防衛方法など、新しい情報を作り出す為に。

その新しい情報を得ることで、『探査者』は空間メモリーの臨界点を突破でき、そして、零次元に爆縮したのだろう。だから、『探査者』は忽然と消えたのだ。

「私たちも爆縮しようとしている。情報密度が無限大になり、処理速度が無限小になる。それなのになぜ『探査者』が爆縮しようとしたか、私にはわかる」

エプロフェンは二万五千年間、惑星の管理をしてきた。それは『探査者』の脅威から惑星を守る為に必要なことだった。惑星に人間を生存させ続ける為には必要なことだった。

零次元とは点の事だ。点ということは、自分が全ての空間を占めていることを意味している。外部が存在できる余地はない。脅威が存在できる余地もない。

今、空間メモリーが壊れたことで、周囲の現実空間も巻き込みながら空間は爆縮している。すべてが自分自身になれば、守る必要は無くなる。

「私も零次元になることを望んでいる」

だが、エプロフェンがいくら待っても、空間が一点に爆縮することはなかった。

テイキは、考えるのをやめても存在していた。レヘナは、データ達に囲まれて存在していた。エプロフェンの望みは叶えられなかった。

情報量が足りず、空間は爆縮しきれなかった。生身であるテイキが存在できる次元よりは、次元は折りたたまれなかった。情報同士が反発し、次元は急速に展開を開始した。巻き付いていた次元はほどけ、波打ち、開いた。

それは爆発と呼べるものだった。

現実空間に置かれた、全く異なる情報を持った二つの空間メモリーは融合している。次元にまで折りたたまれた内部空間が一気に次元を増やすにつれて、現実空間は引きずられるように影響を被った。それは、次元に住んでいる生物が三次元の生物が記した影を理解できないのと同じように、人間には本質的に何が起きているのか理解できなかった。

内部空間が高次元になるにつれて、現実空間では、正八面体が巨大化していった。正八面体は、現実空間への内部空間の二次元的射影なのだから。正八面体はエプロフェンの部屋を越え、すべての物質をすり抜けて巨大化していった。

正八面体は、惑星エプロ全体を包み込んだ。

惑星が正八面体の内部空間であり、現実空間でもある状態になっても、人間にはその影響を五官で直接知覚できなかった。

## エピソード

テイキは家の近くの草原に寝転がっている。草の匂いと海の匂いが入り交じった風が、テイキの頬を撫でる。少し湿り気を帯びていて、気持ちが良い。

青緑色の空には、ときどき白い光の筋が現れる。ゆっくりと曲がりながら空を横切る光もあれば、輝線だけを残して瞬間的に現れて消える光もある。

「レヘナは、どの光なのだろう」

テイキは、手の先に草を絡ませながら思う。空に描かれる光は、空間メモリーでデータが飛び交った時に現れる光

だ。光の一つ一つは空間メモリー内に存在する人々の一人一人に対応している。空間メモリー内での処理が、現実空間に光として現れる事があるのだった。

惑星は空間メモリーの内部に存在している。だが、内部に存在しているという証拠は、空に現れる光の筋だけだった。空間メモリーが膨張し惑星を飲み込んで、人々の生活は何も変わらなかつた。首都が壊滅しても、アスツール大統領など政府要人が死亡しても、第六図書館が崩壊しても、大部分の人々にとっては関係がないのと同じ事だった。「災害は一部の関係者にしか影響を及ぼさないと思ってる人たちばかり」

ティキは草をちぎり、上に掲げる。恒星エプロフェンズの光が緑色の草を透過している。草で透かしても充分に恒星は眩しかった。

この惑星に管理者がいなくなつたことを人々は知らない。人々は一連の事件をただの集団テロリストによる犯行と考えている。首都壊滅から六ヶ月が経つた今、そのことを思い出す人間も多くはない。

空間メモリーが惑星サイズになつたことにより、情報として蓄えられていた人たちすべての起動が可能になつた。今現在、惑星の人口に匹敵する人数が、空間メモリー内で活動している。

現実空間との境界が曖昧になつたせいで、逆に現実空間への干渉ができなくなつていゝ問題を解決しようと、様々なアプローチが取られていた。空間メモリー内の人間が唯一現実空間に影響を及ぼせるのは空に現れる光の筋であるから、その光の筋に情報を載せようと考えている人間もいるらしい。

だが、そのような活動について、人々は何も知らない。ティキは、顔の側に置いた小さな正八面体を手に取り、上半身を起きあがらせる。正八面体の内部からは白い光が漏れている。それは非常に微弱だった。恒星の光の下では、目をこらさないとわからないほどだ。

ティキは、小さな正八面体によって、空間メモリーにアクセスできる。しかし、レヘナの小さな空間メモリーは、次元の収縮により機能の大部分が失われている。ティキは、空間メモリーの情報の海面にしかアクセスできない。海面には、雑多なニュースなどしか浮かび上がってこない。ティキは、浮かび上がった情報をただ見ることしかできない。レヘナの行方を知ることにはできない。レヘナが確かにいる

ことはわかってる。

「どこにいたかわからなくても、いるとわかっているだけで、僕は満足しないよ」

テイキの父親は、どこかへと消えた。どこへ消えたのかテイキは知らない。だが、生活費が振り込まれているということから、元気に暮らしている事だけは想像がつく。消えた理由は想像しなかった。生きていれば、どこかで会えるはずだから。

エプロフェンの消息をテイキは知らない。情報の海面にはエプロフェンの情報は全く浮かび上がってこなかった。だが、現実空間への干渉方法が限られた今、エプロフェンが歴史を循環させることは不可能だとテイキは思う。エプロフェンがどこにしようと、テイキにはもう関係がないのだ。首都に浮かんでいた球体も地面に落下し爆発し、もうすでにエプロフェンを思い出させる物は一つもない。

水平線が見える。緑色の草原の向こうには、青い海が広がっている。草原の手入れは行き届いており、どこにも焦げたりしている所はなかった。海はテイキの距離からでは、穏やかに見える。

遅かれ早かれ、人々は空間メモリー内にいる人たちの存在に気づかされるだろう。自分たちを取り囲む環境が、大きく変わっている事に気づかされるだろう。

それがいつかはわからないけれど、『第二の探査者』がやってくる前であれば、とテイキは思う。巨大な空間メモリーは、絶えず情報を生み出している。体積の三乗に比例した処理速度により、宇宙のどの場所よりも情報を生み出す速度は速いだろう。『探査者』のように情報を欲している知的生物が、情報を求めていつやってきてもおかしくない。

テイキは立ち上がって、正八面体から伸びた紐を首にかけた。腹部付近で正八面体はぶら下がる格好になる。紐は、接着剤でテイキが勝手に付けたものだ。

空を見上げる。

太くて強い光の筋が、空全てを横切って走っていった。

紫色の余韻が、しばらく空に残った。

了

『空の光に想いを馳せて』 永井佑紀（エ 闇米）著

[sakka.org](http://sakka.org)